

## 児島虎次郎日記 1919年(大正8年)

An Introduction to Kojima Torajiro's Diary for 1919 (Taisho 8)

吉川あゆみ (公益財団法人大原芸術財団特命上席研究員)  
YOSHIKAWA Ayumi (Senior Fellow, Senior Curator, Ohara Art Foundation)

### 要旨

明治末から昭和初頭、即ち、1900年代の終わりから1920年代にかけて活躍した洋画家児島虎次郎(1881-1929)は、フランスの国民美術協会展を主な発表の舞台とし、評価を得た人物である。同時に、実業家・社会事業家である大原孫三郎(1880-1943)の賛同と出資を得て、ヨーロッパ近代絵画やオリエント古美術を収集し、日本に招来したことで知られる。「日本の芸術界のために」という公益を目的に掲げて収集された美術品は、日本に到着して間もなく一般公開され、1930年の大原美術館開館以降は同館で常設展示されることとなる。児島は画家としての業績とともに、日本におけるヨーロッパ近代およびオリエント美術の受容という点でも重要な業績を残したのである。

本稿は、児島虎次郎の日記を翻刻・紹介するものである。児島は大原孫三郎とともに大原美術館の礎を築いた人物であり、その足あとを物語る日記の解読は当館の長年の念願であった。日記に記された情報それ自体の重要性はもちろん、今後、児島に関連する諸資料が持つ情報をつなぎ、編み上げていくにあたって、核としての役割が期待されるという点でも、重要性の高い資料である。しかし、私的な覚えとして速筆で記された児島日記は難読であり、引用や参照、部分的な翻刻の紹介はたびたびなされてきたものの、日記自体をまとまった形で紹介した例はこれまでなかった。本稿では、手始めとして児島の第二次滞欧の初年となる1919年の日記を取り上げる。渡欧に先立ち開催された初個展、第一次世界大戦終結後間もないヨーロッパでの暮らしや学び、制作、旧知の人々との交流の様子が記されている。

翻刻は、現時点では残念ながら十分な精度に達しているとはいえない。児島日記の解読には多くの情報を参照することが必要である。現時点での成果を公開することが新たな情報につながる契機となり、今後の解読に寄与することを期待するものである。

---

The *yoga* (Western-style painting) artist Kojima Torajiro (1881-1929), who was active from the end of the Meiji era to the beginning of the Showa era, i.e., from the end of the 1900s to the 1920s, presented his works mainly at the Salon de la Société Nationale des Beaux-Arts in France and earned a reputation there. At the same time, having received approval and funds from the businessman and entrepreneur Ohara Magosaburo (1880-1943), he collected modern European paintings and Middle Eastern antiquities, and brought them back to Japan. These artworks collected in the interests of the public, “for the Japanese art world,” were put on public view soon after they arrived in Japan. Once the Ohara Museum of Art was opened in 1930, they were put on permanent view there. Together with his achievements as a painter, Kojima's accomplishments from the point of view of the reception of modern European art and Middle Eastern art in Japan were significant too.

This article is a transcription and introduction of Kojima Torajiro's diary. Kojima was a man who laid the foundation of Ohara Museum of Art alongside Ohara Magosaburo, and the deciphering of his diary narrating the course he had come along was a longtime wish at our museum. Needless to say, the information written in the diary is important. In addition, in order to hereafter connect and compile the various pieces of information in the diverse reference materials related to Kojima, his diary is expected to play a pivotal role as a principal document. Nevertheless, as it was written rapidly as a personal recollection, Kojima's diary is difficult to decipher. Although it has occasionally been quoted, referred to, or reprinted in part, the diary itself has never been introduced as a whole so far. In this article, as a start, Kojima's diary of 1919, the first year of his second stay in Europe, is taken up. It describes his first solo exhibition, which was held prior to his departure to Europe, and his life, studies, work on his paintings, and mingling with old friends in Europe soon after the end of World War I.

At present, the transcription is unfortunately not yet fully accurate. The deciphering of Kojima's diary requires cross-references to a vast amount of information. By publicizing our findings to date, we hope that it might lead to new information and contribute to further deciphering in the future.

本稿は、洋画家であり、大原美術館の礎となる美術品の収集にあたった児島虎次郎（一八八一―一九二九）の日記を翻刻・紹介するものである。大原美術館は、児島が没した翌年の一九三〇（昭和五）年に、彼の業績を記念する美術館として設立された。当館にとって児島虎次郎は、創立者大原孫三郎（一八八〇―一九四三）と並ぶ生みの親であり、その足あとを物語る日記の翻刻は長年の課題でもあった。

### 児島虎次郎と関連資料

一八八一（明治十四）年、岡山県中西部の川上郡下原村（現高梁市成羽町）に生まれた児島虎次郎は、東京美術学校西洋画科選科および同研究科に学んだ後、一九〇八（明治四十一年）年から一九一二（明治四十五年）年まで大原孫三郎の支援によりヨーロッパに留学。主にベルギーのゲントに滞在し、同地の王立美術アカデミーで研鑽を積んだ。この留学中、同時代ヨーロッパの美術潮流、特にベルギーのルミニスムに触れることによって、児島の絵画は筆触の存在感と鮮やかな色彩のハーモニーを獲得。一九一（明治四十四）年、フランスの国民美術協会展へ初出品・初入選を果たし、留学の成果を証明することとなる。帰国後は倉敷郊外の酒津（現岡山県倉敷市酒津）にアトリエを構え、国内はもとより、ヨーロッパや東アジアを巡っては、各地の文化を自作に反映させていった。帰国後も引き続き国民美術協会の展覧会を主な発表の舞台としており、一九一三（大正二）年には同会準会員に、翌一九二〇（大正九）年には出品作《秋》がフランス政府買い上げとなり、あわせて同会正会員に推挙された。一方、日本では帝展審査員をつとめており、日仏両国で一定の評価を得た画家であったといえよう。

同時に児島は、大原の賛同と出資を得て、ヨーロッパ絵画やオリエント古美術を収集し、日本に招来した人物としても知られる。これらの収集は、当初より「日本の芸術界のために」という公益を目的に掲げたもので、実際、収集品は日本招来後間もなく一般公開され、一九三〇年の大原美術館開館以

降は同館にて常設展示されることとなった。児島は画家としての業績とともに、日本におけるヨーロッパ近代美術およびオリエント美術の受容という面においても重要な業績を残したのだった。

児島の作品、収集品は、現在、大原美術館（大原芸術財団、以下同）と高梁市成羽美術館がその多くを収蔵・保管している。また、大原美術館は児島旧蔵書籍のうち洋書を「児島文庫」として所蔵している。本誌で別に紹介されるが、児島の活動を大原孫三郎が支援していたことから、有隣会が管理する大原家関連資料には書簡をはじめとする児島の関係資料が含まれている。これらとは別に、児島の元にあった作画資料や書簡、写真など、多種多様な関連資料（以下「児島家資料」とする）は、遺族の手によって大切に、かつ豊富に保管されてきた。

### 児島虎次郎日記

児島家資料の中でも最も重要な資料のひとつが、本稿で取り上げる児島虎次郎の日記（以下「児島日記」とする）である。日記に記された情報それ自体の重要性はもちろんのこと、今後、作品や各種関連資料が持つ多様な情報をつなげ、編み上げていくにあたって、核としての役割が期待されるという点でも、重要性の高い資料である。

児島日記は、児島が最初の渡欧を果たした一九〇八（明治四十二年）年から、没年の前年にあたる一九二八（昭和三年）年までのものが確認されている。ただし、その間の一九一一（明治四十四）年、一九一七（大正六）年の日記は現時点では見つかっていない。また、一九〇九（明治四十二年）年の日記は手帳様の三冊で構成されているが、別の時期に使用された同様の手帳も存在することを勘案すると、これらは日記とは別の備忘録的な手帳と考えるべきかもしれない。これについては、手帳の調査のちにあらためて検討・判断することとしたい。

現在、現存する日記全てを対象に翻刻作業を進めており、順次紹介してい

く予定であるが、手はじめとなる本稿では一九一九（大正八）年の日記を取り上げる。年を追って順に紹介することが最良ではあるが、この年にはじまる第二次滞欧期の児島の動向を明らかにすることは、大原コレクションの形成過程を知る上で重要であり、そういった関心からこの期間の翻刻作業が先行して進んでいるという事情がある。ご理解頂ければ幸いである。

## 一九一九年の児島虎次郎

博文館発行の『当用日記』（中長形、縦一七・五×横一一・二cm、総頁数五〇二頁）を用いて記された一九一九年の日記は、「本年度欧の事 本日（年）四月上旬東京と大阪にて作品展覧會を開く 右昨年末決定の事」という一文ではじまる。「昨年」即ち一九一八（大正七）年の児島は、春・夏に約三ヶ月かけて中国・朝鮮を旅し、そこで得た刺激をもとにアトリエで制作に励んでいた。そんな中、十一月に第一次世界大戦の終結が報じられる。これを受けてヨーロッパへの再留学と、出発に先立って自身初となる個展を開催することが決定したというわけである。

年が明けると、個展開催に向けて倉敷と東京・大阪を行き来しながら忙しく過ごし、個展終了からわずかひと月半ほどで児島はフランスを目指して旅立った。機雷の残る地中海は航路が制限されていたため、マルセイユへの寄港はなく、イギリスのサウサンプトンで下船し、ル・アーヴル経由でパリに向かった。ヴェルサイユ条約調印の報に接したのは、フランス入りを控えたロンドンでのことであった。折しも、西園寺公望ら日本の政府要人が滞在中の英仏に、児島は到着したのであった。

パンテオンのそばのオテル・デ・グラン・ゾムに当面の宿を得た児島は、落ち着き先となるアトリエを探しながら、クロッキーのためにグラント・シヨミエールなどの美術学校に足を運び、また、エドモン・フランソワ・アマン・ジャン（Edmond-François Aman-Jean、一八五八―一九三六）ら旧知の人々を訪ねている。ようやく再開しはじめた美術館や画廊、骨董店にも足

繁く通っている。美術館では、エジプトやローマ、ペルシアなどの古美術ばかりを模写しており、これらの分野に対する児島の関心の高まりをうかがうことができる。

八月末にエルネスト・クレツソン通りのアトリエに転居するまでは、集中的にパンテオンを描き、転居後はサロン出品のために日本から持参した作品の修正に取りかかった。パリ在住の日本人画家との行き来も増えていった。特に青山熊治（一八八六―一九三二）とは多くの時間を共にしており、青山とともに実業家中沢彦吉によるルノワール作品の購入に関わったことも確認できる。

第一次滞欧時もそうであったように、都会暮らしに心満たされることのない児島は、たびたび郊外へ遠出を試み、年末にはスペイン旅行に出発。翌一九二〇（大正九）年の元旦をアンダルシアの空の下で迎えることとなる。詳細な時期は明らかでないが、児島は遅くとも一九一九年の秋頃までに、大原に対してフランス絵画の本格的な収集を提案したと考えられる。この提案は一九二〇年の夏にようやく受け容れられ、クロード・モネの《睡蓮》をはじめとする大原コレクションの収集が始動するのであった。

## 児島日記 現状と課題

児島研究の基本文献である『児島虎次郎略伝』<sup>4</sup>は、児島の甥で新聞記者であった児島直平によって著されたもので、生前の児島を知る人物ならではの情報、新聞記者ならではの取材成果とともに、児島日記からの引用が多く含まれている。児島の没後七十年に際して出版された松岡智子・時任英人『児島虎次郎』<sup>5</sup>では、『児島虎次郎略伝』をベースとしつつ、児島日記をはじめとする児島家資料にあらためて照らして、『児島虎次郎略伝』の修正と新発見の追加が行われた。また、松岡智子『児島虎次郎研究』<sup>6</sup>は、児島日記ほか児島家資料を多く参照しつつ、児島の画業とともに文化交流における功績を明らかにした。

その他にも展覧会図録や各種文献において、児島日記の部分的な翻刻、引用および参照がなされてきたが、日記自体がまとまった形で紹介されたことはこれまでなかった。それはひとえに、児島日記が非常に難読であることによる。私的な日記であるから、他者に読ませるつもりがないのは当然であるが、児島にとって日記は、記された出来事を知る児島本人が、その出来事を振り返る手がかりになりさえすれば良かったのであろう。このことは、特に欧文のスペルミスからはつきり感じ取ることができる。正確に綴ろうという意思はほぼなく、もはや「ミス」というレベルではないものも多い。大体の音がわかりさえすれば、書いた本人であれば何のことかはわかる、という考えであったのだろう。日本語においても同様である。

本稿はこの難題に取り組んだものであるが、現段階では残念ながら、十分な精査を経た信頼のおける翻刻に至っているとは言い難い。作業の多くは「文字を読む」というよりも、多種多様な資料から、いわば「状況証拠」を拾い集め、それらを積み上げることによって「文字を特定する」というものである。本来であれば、翻刻とともにそれらの「状況証拠」も示すべきであろうし、また、原文校正によって翻刻の妥当性を客観的に検証すべきであろう。本資料の難読さは、そのハードルまでも高め、これを実現するには至らなかった。しかし、不完全ながら現時点の成果を公開することをきっかけに、多くの「状況証拠」が寄せられれば、管見ではかなわぬこともかなえ得るかもしれない。そうなることを期待して、本稿をまとめた次第である。

また、現在進めている児島家資料の調査成果も児島日記の解説に大いに役立つものと考えられる。今回はごく一部を活用するに留まったが、今後そのデータ整理が進めば、決定的な「状況証拠」も多く得られることであろう。これらを反映し、遠くない将来、あらためて信頼できる精度で、かつ、まとまった形で児島虎次郎日記を広く共有できればと考える。

1 児島虎次郎・満谷国四郎、大原孫三郎宛書簡、一九二二年五月三十日付、大原芸術財団所蔵

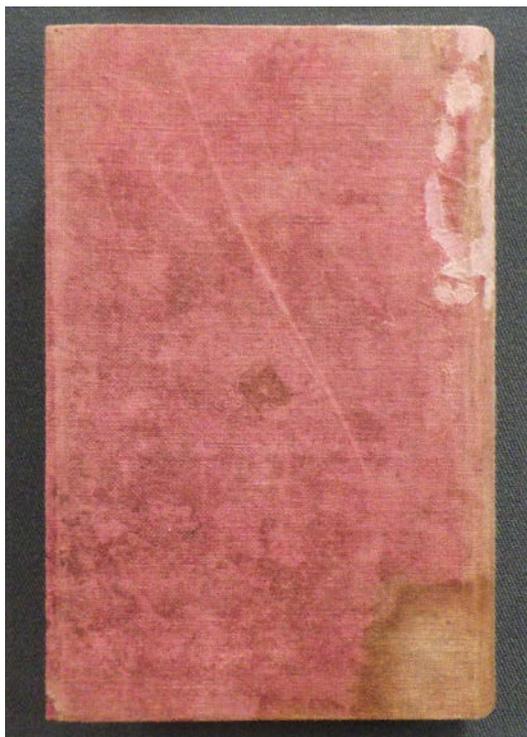
2 この書簡は、児島が第一次滞欧時中の一九二二年、児島と同じく大原孫三郎の支援により滞欧中であつた洋画家満谷国四郎と連名で送つたもので、エドモンソフ・アマーンジャン作《髪》（現大原芸術財団所蔵）の購入を依頼する内容となつている。同作品の購入・招来は、のちの一九二〇年から始まる児島と大原による本格的なヨーロッパ絵画取集の端緒となつたと考えられている。同書簡中で児島は「これは個人としてのお願にては候はず 日本の芸術界のために最も有益なる次第に候へば 突然ながら切に懇願申上候次第」と記している。

3 原文は「本日四月上旬」となつてゐるが、「本年四月上旬」の誤記であらう。本誌六四頁上段を参照のこと。児島直平『児島虎次郎略伝』児島虎次郎伝記編纂室、一九六七年、一一八頁

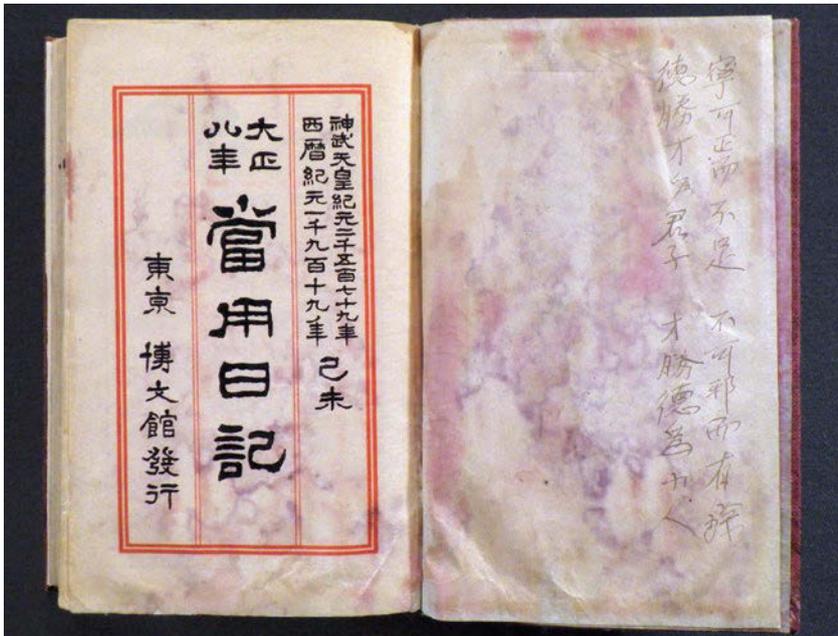
4 一九一九年十二月五日発信の三橋玉見宛児島書簡が引用されており、その中で大原孫三郎に対して現代フランス絵画の取集を提案していることが述べられている。

5 前掲書

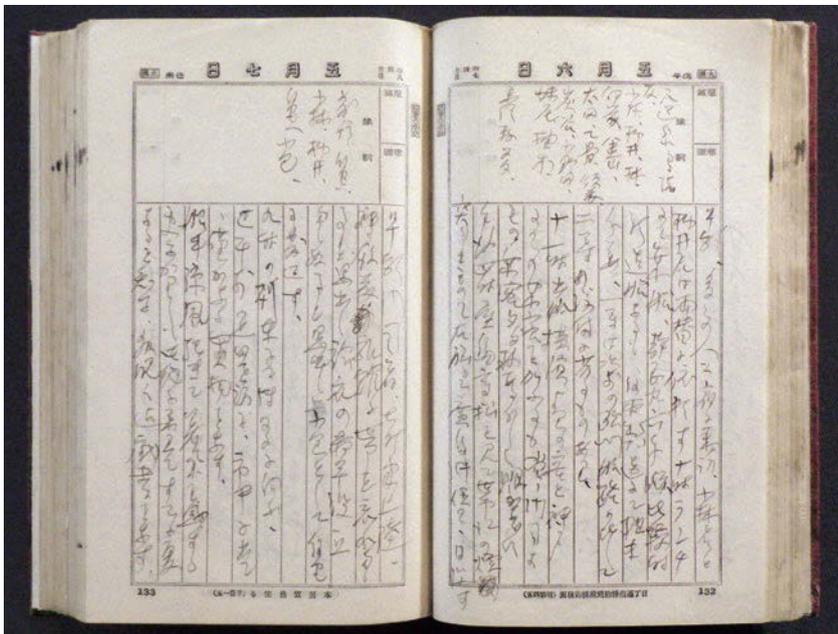
6 松岡智子・時任英人『児島虎次郎』山陽新聞社、一九九九年  
松岡智子『児島虎次郎研究』中央公論美術出版、二〇〇四年



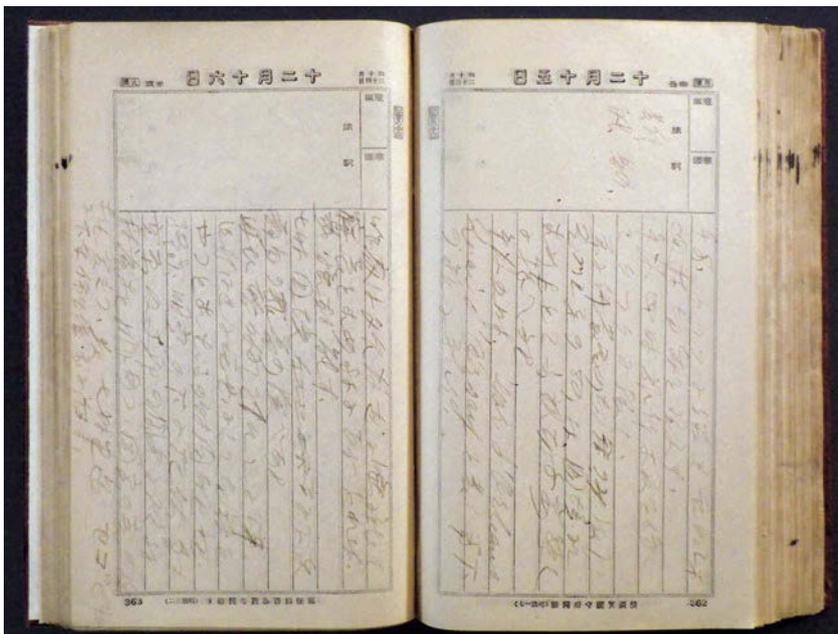
児島虎次郎日記 (1919年)  
表紙



扉



5月6日、7日欄



12月15日、16日欄  
挿図：いずれも筆者撮影

## 一 収録内容について

- ・本稿は、児島虎次郎日記のうち一九一九（大正八）年の日記を翻刻収録したものである。
- ・児島が使用した日記帳『当用日記（大正八年版）』（博文館発行）には、一九一九年分の日記以外に、補遺欄に翌一九二〇（大正九）年一月一日から二十一日までの日記、金銭出納記録欄に一九一九年一月から一九二〇年二月二十一日までの出納記録が記されているが、本稿ではこれらを対象としない。

## 二 記入欄について

- ・日記帳は、一頁に一日分があてられている。各頁上段には「天気」「寒暖」「予記」欄が設けられ、その下の縦野に日記本文を記入するレイアウトとなっている。本稿では、これら記入欄を【】内に示し、これに続けて当該欄に記入された本文を掲載した。所定の欄以外に記入されている場合は、「【欄外右側】」のように、記入されている場所を示した。
- ・欄をまたいで記入されている場合は、「【予記欄・本文欄】」のように、記入されている欄を「・」でつないで示した。また、異なる欄に文が続く場合は、「【本文欄×予記欄】」のように、「×」を用いて記入順を示した。

## 三 書式等について

- ・一月一日から十月二十九日までの日記は、日記帳所定の縦書きで、十月三十日から十二月三十一日までの日記は、日記帳を反時計回りに九十度回転させて横書きで記入されている。本稿はこれに対応する形で、十月二十九日分までを縦書き、十月三十日分以降を横書きのレイアウトで示した。ただし、ごく一部のみ縦書き／横書きが変わっている箇所については、その旨を脚注に示した。
- ・改行は原則として原文に従った。本誌誌面の都合上、原文にない改行が生じた場合は、その箇所を「↵」で示した。
- ・原文において、内容を区切る意図や空白を残す意図をもって

行間や文字間を空けていることが明らか場合は、これを反映した。

- ・原文の字下げは原則的に反映していない。

## 四 文字、文字列について

- ・文字、文字列については、引き続き翻刻の精査を進めることを前提に、その便を考慮して次のように扱った。
- ①旧字、異体字等は、可能な限り原文のとおり掲載し、新字体への置き換えは行わないこととした。ただし、文字コードの制約等によりPCでの使用が難しい文字は、同意の近似する文字で代替した。
- ②判読できなかった文字は□で示した。
- ③児島本人によって、取り消しや訂正が加えられた文字は、「赤帯」のように二重取り消し線で示した。
- ④引出線などを用いて追加された文字は、指示された箇所を追加した。
- ⑤児島以外の筆跡による書き込みは本文として扱わず、注にその内容を示した。

## 五 翻刻者による補足情報について

- ・読みやすさを考慮し、次のとおり情報を補った。
- ①明らかな誤字については、適宜（ ）内に正しい文字を示した。
- ②明らかな誤字であるが、正しい文字を補わない場合は、「ママー」を付した。
- ③本文で示された名称等がわかりづらいものについては、今日一般的に用いられる名称・呼称などを適宜（ ）内に示した。
- ④翻刻に疑いの残る文字については、「？」を付した。
- ・外国語のカナ表記の誤りや揺れは、言語による発音の違い、時代による一般的外来語表記や呼称の違い、また、児島による外国語の文法・つづり・発音の誤り、さらには単純なカナ

の誤りなど、様々な要因が混在・複合して引き起こされている。これを踏まえて、次のように取り扱うこととする。

⑤ 欧文の単純なスペルミスや文法の誤り、カナの誤りについては、正しい文字・つづり等を適宜（ ）内に示した。

⑥ カナ表記の元となる欧文や、その日本語訳、今日の一般的呼称などの補足情報を適宜（ ）内に示した。

・ 児島に特有の用字・用語については、次のように情報を補った。

⑦ 原文では、仮名の濁点は殆どの場合省略されているが、原文のまま掲載することとした。濁点の省略は誤字として扱わず、濁点の省略によって理解が損なわれると判断した箇所については、「(エジプト)」のように、「( )」内に濁点を補った単語、または一般的名称・呼称を示した。

⑧ 「額縁(額縁)」「自働車(自動車)」など、当時比較的一般であった用字、「カンパス(カンヴァス)」など、児島が日常的に用いていた用語は誤字・誤記として扱わない。ただし、誤解を避けるために、適宜（ ）内に一般的用字・呼称などを示した。

⑨ 児島は「寝」「憩」を常に独自の文字(誤字)で表す。これらについては、正しい文字に置き換え、その傍に「\*」を付した。

⑩ 児島は、いわゆる「くの字点」(二字以上の文字列の繰り返しを表す記号)を横書きでも用いており、縦書きの場合と同様に縦位置で配置している。縦書きのくの字点は「く」で表したが、横書きについては実際の字形に近い「ゝ」に置き換え、その傍に「\*」を付した。

・ 以上①～⑩の補足情報および記号は、縦書きの場合は本文当該箇所の右横に、横書きの場合は上に配置した。

・ ( ) および ( ) 内に示した補足情報自体に疑いが残る場合

は、( ) または ( ) 内に補足情報に続けて「？」を付した。

・ その他の補足情報を脚注に示した。

・ 人名については、初出のみ極簡単な人物情報を脚注に示した。初出以外については、一六一～一六九頁の人名索引を参照されたい。なお、これらは前後の日記や関係資料などから現時点で得られた情報をもとに人物の特定・推定を試みたものであり、更なる精査を要する段階のものであることをご了承いただきたい。脚注中、人物の特定・推定に用いた資料として、「児島の住所録」がたびたび出てくる。児島が使用した住所録としては、手のひらサイズのアドレス帳が五冊、他に日記巻末の住所録(いずれも児島家資料)が確認されているが、本稿ではこれらのうち現時点で人名等のデータ化が終了している住所録(一九二〇年前後に使用されたと思われるアドレス帳一冊、一九二二年および一九二三年の日記巻末の住所録)を参照した。

## 六 その他

・ 空欄となっている日については、日付・曜日のあとに「(記入なし)」と記した。

・ 一部、現代の社会通念や人権意識においては不適切と思われる用語・表現、またはプライバシーに関わる内容を含むが、当時の社会的背景や本資料の学術的意義を鑑み、原文のまま掲載した。本稿を活用される場合は、多様性の尊重、個人の権利への配慮をもって活用されるようお願いしたい。

本稿をまとめるにあたり、児島虎次郎の孫である児島塊太郎氏に格別なるご高配とご助言を賜りました。ここに記して、感謝の意を表します。

児島虎次郎日記 一九一九年（大正八年）

一月一日 水曜

【予記欄】

本年

渡欧の事

本日<sup>(年)</sup>四月上旬

東京と大阪

にて作品展

覽會を開

く<sup>1</sup>

右昨年末

決定の事

【本文欄】

元旦早起

早朝より倉敷に廻礼に出つ

午後二時帰宅

三橋氏<sup>2</sup>来宅

昨年暮より描きつゝある林氏母堂<sup>3</sup>

の肖像<sup>4</sup>尚未成なるため午後

林夫人<sup>5</sup>の来室<sup>6</sup>を乞ひ批評を

受く

一月二日 木曜

【欄外右側く本文欄】

殆と

終日新年ハカキを書く

武内君<sup>6</sup>来訪

一月三日 金曜

【本文欄】

終日新年ハガキを書

吉田君<sup>7</sup>来訪

一月四日 土曜

【本文欄】

林氏母堂の肖像、

西湖の復写<sup>(巻)</sup>をなす、

一月五日 日曜

【本文欄】

毎年の新年旅行を青野<sup>8</sup>の健康を

按し当年は余の宅にて行ふ事

とす柳井君<sup>9</sup>昨夜出産にて来席延

期の旨電報<sup>10</sup>し来る

青野、小林、吉田君滞在、

一月六日 月曜

【欄外右側く寒暖欄く本文欄】

昨日より

1 「児島虎次郎習作展覧會」東京展（東京美術学校、一九一九年四月一日〜三日）、大阪展（大阪中央公会堂、一九一九年四月十四日〜十六日）のこと。児島にとって初めての個展となった。

2 三橋玉見（みはし・たまみ、一八八二—一九三九）であろう。大原家の主治医で、大原孫三郎の文化面でのブレーンでもあった。

3 林源十郎（十一代源十郎、甫蔵）（はやし・げんじゅうろう（ほぞう）、一八六五—一九三五）。薬種商を営む倉敷の実業家、社会事業家。大原孫三郎に大きな影響を与えた。

4 十一代林源十郎の母清（せい）の肖像画《林源十郎の母》（大原芸術財団所蔵、所蔵品登録No.0210）のことと考えられる。清は前年十一月に死去している。

5 十一代林源十郎の妻浦（うら）。社会運動家山川均の姉にあたる。

6 武内潔真（たけうち・きよみ、一八八八—一九八一）であろう。倉敷紡績で電気技師などを務め、のちに大原美術館初代館長となった。

7 吉田苞（よしだ・しげる、一八八三—一九五三）であろう。洋画家。現岡山市出身。

8 青野俊一郎であろう。児島と同郷の親友で、倉敷紡績に勤めていた。

9 柳井新太郎であろう。児島と同郷の友人で、郷里成羽で呉服商を営んでいた。

10 小林寿美太（こばやし・すみた）。児島と同郷の友人で大阪で商店を営んでいた。

小林 柳井君、吉田君滞在

吉田君帰宅まゝ

一月七日 火曜

【欄外右側へ本文欄】

午後、

柳井君と岡山に出で後樂園の

研究会<sup>11</sup>新年茶話會に列す

天勝<sup>12</sup>を觀て夜九時の列車にて帰る

柳井君泊す、

小林君帰阪、

一月八日 水曜

【本文欄】

柳井君泊す

一月九日 木曜 (記入なし)

一月十日 金曜

【本文欄】

午後岡山に出で久振りにて天主

教の先生<sup>13</sup>に学ぶ

午後七時の列車にて帰宅、

一月十一日 土曜

【本文欄】

展覽會出品作品を一通り

準備のため検へ置く必要あり

尚加筆すべきものなどあれば

これより少時多忙なる日を送る事

となる、

一月十二日 日曜

【予記欄】

発信

Aman-Jean<sup>14</sup>

Lamorelle<sup>15</sup>

(Bartholomé)<sup>16</sup>  
Bartholomé

一月十三日 月曜 (記入なし)

一月十四日 火曜 (記入なし)

一月十五日 水曜

【本文欄】

終日修作、

百号迄の作品の手入を終り

たり

西湖の復写<sup>(複)</sup>をなす

11 岡山洋画研究会のことであろう。後樂園(岡山市)で例会が行われていた。

12 奇術団の松旭齋天勝一座、または奇術を指すか。

13 デュトゥッ神父 (Jean Baptiste Laurent Dutru, 一八六五—一九三二)のことであろう。パリ外国宣教会の宣教師として来日し、岡山ほか西日本で活動した。児島は彼のもとでフランス語を学んでいる。

14 エドモン・フランソワ・アマン・ジャン (Edmond-François Aman-Jean, 一八五八—一九三六)。フランスの洋画家。児島と親交が深く、児島に制作上の助言を与えたほか、児島によるフランス絵画収集に協力した。

15 ラモレル (A. Lamorelle)。パリの画材商。ポール・アルベール・バルトロメ (Paul-Albert Bartholomé, 一八四八—一九二八)。フランスの画家、彫刻家。児島が出品していた国民美術協会 (Société Nationale des Beaux-Arts) の会長をこゝめていた。

一月十六日 木曜

【本文欄】

終日旧作修製

夜大原氏を訪問黒田先生へ面會され

たる様子を聞く

青野君の所に廻り夜を深し

て夜半帰宅、

林氏の母堂の肖像を描き終

り大原氏の宅へ届く、

一月十七日 金曜

【本文欄】

終日作品の修作、

夕方、大原、三橋、氏を

同伴来訪さる

一月十八日 土曜

【予記欄】

発信

斉藤、矩一、<sup>19</sup>

加藤、柳井、

発信

Claus<sup>20</sup>

Delvin<sup>21</sup>

柳井、

斉藤

【本文欄】

終日旧作の修製に費す

午前中温暖快晴

一月十九日 日曜

【本文欄】

全上

一月二十日 月曜

【本文欄】

此朝は非常の寒冷生し

一日中氷溶けす

終日旧作の選擇修

製、カタロク調べ

一月二十一日 火曜

【本文欄】

此日の寒さハ昨日位の

降下なり

終日同上

17 大原孫三郎（おほはら・まごさぶろう、一八八〇—一九四三）。実業家、社会事業家。倉敷紡績社長ほか。児島の制作活動を支援し、のちに児島を記念するために大原美術館を設立した。

18 黒田清輝（くろだ・せいき、一八六六—一九二四）。洋画家。児島の東京美術学校時代の恩師。

19 児島矩一（こじま・くいち、一八九六—一九三四）。児島虎次郎の甥。彫刻家。エミール・クラウス (Emile Claus, 一八四九—一九二四)。ベルギーの画家。児島は第一次滞欧時、クラウスに制作の助言を受けていた。

20 ジャン＝ジョゼフ・デルヴァン (Jean-Joseph Delvin, 一八五三—一九二二)。ベルギーの画家でゲント（ヘント）の王立美術アカデミーで校長を務めた。児島の恩師。

一月二十二日 水曜

【本文欄】

午前九時の列車にて  
大阪に向ふ明日の岡山孤児院<sup>22</sup>  
の評議員會の愛染園<sup>23</sup>  
に開催列席のため

午後四時大阪着

一月二十三日 木曜

【本文欄】

午前九時愛染園に趣く  
評議員會は午後二時  
終る

卍展覽会の事につき皿井  
氏<sup>24</sup>を訪れ、小林君の所に立寄  
り公會堂を一覧す、  
夜山内愚僊氏<sup>25</sup>を訪問し  
直に神戸迄帰り一泊

一月二十四日 金曜

【本文欄】

朝神戸にて金山君<sup>26</sup>の在宅<sup>?</sup>  
を電話にて聞く 不在、

午後三時半帰宅

今朝より降雪、

帰宅の頃積雪一寸餘にて  
雪景眺美し

一月二十五日 土曜

【本文欄】

昨日の雪消残り尚眺清  
ければ朝来写生の考  
へなりしに<sup>?</sup>

中山君<sup>27</sup>早朝より来訪  
昼帰途につかる  
正午頃には早や雪のかけ  
稀となる

一月二十六日 日曜

【子記欄】

雑誌  
『黄薇之友』<sup>28</sup>  
黄薇の友  
来る

【本文欄】

朝より小牧牛<sup>29</sup>の描写に  
費す  
夕方吉田君来訪  
夜倉敷に大原氏を訪る

22 児島の岳父石井十次(いしい・じゅうじ、一八六五―一九一四)が岡山市で設立した児童養護施設。石井没後は大原孫三郎が経営を引き継いだ。

23 石井記念愛染園。石井十次が大阪で開始したセツルメントを、石井の没後大原孫三郎が継承し財団化したもの。

24 皿井立三郎(さらい・たつさぶろう、一八七〇―一九四五)であろう。岡山市出身の医師、俳人。号は旭川。児島の個展大阪会場の主催者のひとり。児島虎次郎の孫である児島塊太郎氏によれば、児島家の親類にあたるとのこと。

25 山内愚僊(やまうち・ぐせん、一八六六―一九二七)。洋画家。

26 金山平三(かなやま・へいぞう、一八八三―一九六四)。洋画家。

27 中山巍(なかやま・たかし、一八九三―一九七八)か。洋画家。岡山市出身。

28 『黄薇之友』は東京で発行された岡山県人雑誌。一九一八年創刊、黄薇社発行。

29 『小放牛』(大原芸術財団所蔵、所蔵品登録No.4127)、またはその関連作品のことであろう。

一月二十七日 月曜

【天気欄】

晴

【寒暖欄】

やゝ暖し<sup>?</sup>

【予記欄】

来信

上田、

石井

【本文欄】

朝小牧牛の描写をなす

桃田氏来訪昼迄

午後小牧牛を描きつゝく

夕方前三橋氏来訪暮迄

一月二十八日 火曜

【予記欄】

発信

柳井

【本文欄】

小牧牛描写、

一月二十九日 水曜

【本文欄】

全上

一月三十日 木曜

【本文欄】

小牧牛描写、

午後阿藤君来訪<sup>30</sup>

夕方の列車にて出岡

石井紀念會<sup>31</sup>に出席

家族同伴

一月三十一日 金曜 (記入なし)

二月一日 土曜

【本文欄】

この日頃

東京に出品すべき作品を

梓よりはづし準備をなす

点数、百餘点

二月二日 日曜 (記入なし)

二月三日 月曜 (記入なし)

二月四日 火曜 (記入なし)

二月五日 水曜 (記入なし)

30 阿藤秀一郎(あとう・しゅういちろう、一八八八―一九七二)か。洋画家。現岡山県浅口市出身。

31 同日は石井十次の命日にあたることから、石井十次を紀年する会が、岡山にて催されたと考えられる。

二月六日 木曜 (記入なし)

二月七日 金曜

【本文欄】

東京に送るべき

(カンパツス)  
カンパスの荷造をなす

終日、大工さんの手続を  
なす、

二月八日 土曜

【本文欄】

小牧牛描写

二月九日 日曜

【本文欄】

全上

二月十日 月曜

【本文欄】

東京へ荷物発送、

学校宛<sup>32</sup>三箱、

長尾宛<sup>33</sup>一箱、

二月十一日 火曜

【本文欄】

午前九時の列車にて大阪に  
向ふ、

駅前に泊す、

牛夕方小林君を訪問、

夜須藤君<sup>34</sup>等と同食

す、

二月十二日 水曜

【本文欄】

朝、愛染園に趣く

午後、斉藤<sup>35</sup>、林君を

訪る、

夜六時より、大阪クラブ

に於て今回大阪にて展覧

會開催の事につき、

岡山県出身の在阪紳士

十名と會食會談す

九時散會

二月十三日 木曜

【本文欄】

朝八時半の列車にて小林君

と大阪を發し東上す

昼てあり、晴てあり、友語

し得らるしなにて、

終日早春の旅心地よし

午後八時過木挽町の小林

32 東京美術学校のこと。  
額縁店磯谷商店の長尾建吉(ながお・けんきち、一八六〇—一九三八)、またはその息子長尾一平(ながお・いつべい、一八八六—一九七八)のこと。

34 児島と同郷の友人須藤祐七または須藤新六か。両者は上海で須藤洋行・須藤通関所を営んでいた。新六は時期不明ながら児島の住所録で兵庫県武庫郡西郷町(現神戸市灘区)の住所が確認できる。  
大阪毎日新聞の斎藤徳太郎(恵太郎、漢舟)であろう。三月二十一日欄参照。

君の宿に同宿す、

二月十四日 金曜

【本文欄】

朝、木挽町の宿を出て  
金沢を訪る<sup>36</sup> の事問合せたれとも  
美術学校に荷物未着  
の由答へらる

運送店には已に送置りとの  
事にて学校に趣くに荷物  
已に到着致し居りたり

二月十五日 土曜

【本文欄】

午前、麴町に齊藤君を  
訪問し

後黒田先生に面會

目下学校<sup>37</sup> 郊外写生にて  
休業中なれは来る<sup>37</sup>、

月曜日、学校にて作品の  
撰擇を乞ふ事となる

午後藤島先生を訪問す<sup>38</sup>

午後金沢を訪問

午後太平洋画會を參觀す

二月十六日 日曜

【予記欄】

来信

柿原得<sup>39</sup>

【欄外右側く本文欄】

朝金沢氏来訪

午前満谷氏を下落合に訪問す<sup>40</sup>

午後三時川合玉堂氏を<sup>41</sup>

訪れ、柿原君よりの四五〇〇を  
渡す、

二月十七日 月曜

【予記欄】

来信

柿原

政<sup>42</sup>

【本文欄】

午前博物館に入場、

午前十一時学校に登る、

藤島先生、岡田、黒田、藤<sup>43</sup>

島中村先生の来校を

乞ひ、

持参したる百余点の作

品より六十四点を

撰擇を受く、

午後昼食を<sup>44</sup>諸兎師と

36 金沢蔵であろう。児島と同郷の人物で、東京で薬局を経営していた。

37 齋藤豊作（さいとう・とよさく、一八八〇―一九五二）であろう。洋画家。児島の東京美術学校時代の友人。

38 藤島武二（ふじしま・たけじ、一八六七―一九四三）。洋画家。児島の東京美術学校時代の恩師。

39 柿原得一。倉敷紡績で重役を務めるほか、大原孫三郎の手がけた各種事業を補佐した人物。

40 満谷国四郎（みつたにくにしろ、一八七四―一九三六）。洋画家。現岡山県総社市出身。

41 川合玉堂（かわい・ぎよくどう、一八七三―一九五七）。日本画家。

42 柿原政一郎（かきはら・せいいちろう、一八八三―一九六二）。倉敷紡績をはじめ中国民報社などで大原孫三郎の右腕を務めた。のちに代議士、宮崎市長、宮崎県高鍋町長。

43 岡田三郎助（おかだ・さぶろうすけ、一八六九―一九三九）であろう。洋画家。中村勝治郎（なかむら・かつじろう、一八六六―一九二二）であろう。洋画家。

精養軒に共にす、  
夜、菊坂に、岩村氏を訪る

二月十八日 火曜

【本文欄】

午前磯谷を伴ひ美術学校に  
至り額縁の注文をなす、

□□

午後二時校長に面會、  
満谷氏を太平洋画會に  
訪れ同伴して浅草  
に夕食をなす、

二月十九日 水曜

【本文欄】

午前、駒込病院に岩村悦郎  
夫人を見舞ふ入院式週間、  
チブスの熱は衰へたるも心臓不良  
にて危険なりとの事二三十分話す、  
昼前藤島先生を訪れ他外同  
食す、

午後四時の急行にて退京、  
帰路伊勢太神に参詣の筈なり  
しも時間不充分なるため  
直行大阪下車の事となす、

二月二十日 木曜

【本文欄】

午前六時大阪着  
直に電車にて奈良に趣く  
八時頃着  
市中をふらくなし十一時頃三山  
亭に立寄る  
午後  山に千塚あゆを訪ぬ  
停車場より里余、これ神武皇后  
の塚ならむとの推説、  
帰路、正行の墳に詣ず、  
夕方帰宿一泊、

二月二十一日 金曜

【本文欄】

朝奈良発 大阪に小林君の  
所に三十分ほど話し十一時  
過の列車にて帰宅  
咽喉を痛めたるのみならず少  
し感冒の気味あり

二月二十二日 土曜

【予記欄】

発太田、  
奥原、  
来太田

45 岩村悦郎か。(二月二十四日欄参照)石井十次が経営した茶臼原孤児院教育部で教師を務めた岩村愛子の夫。(菊池義昭「大正期の岡山孤児院の運営体制と大原理事時代(上)」『共栄学園短期大学研究紀要』第十八号、二〇〇二年、一一八、一二七―一二八頁)

46 磯谷商店(額縁店)。前掲注33参照。『瓢箪山』の意であろう。

47 太田喜二郎(おた・きじろう、一八八三―一九五二)であろう。洋画家。児島と共にゲントの王立美術アカデミーで学んだ。

【本文欄】

十時頃迄朝床、

美術学校生徒の来訪あり

吉田君来る

衣を重ねてストーブの傍に話す

午後三時兩人共帰宅、

夜少し気分よきと大原氏明朝

日向出発の事を聞き倉敷に

出づ展覧会準備の様子を

傳ふ

但し大原氏の日向行は延期さる

二月二十三日 日曜

【予記欄】

発信

石井、疋田<sup>49</sup>

柿原河原<sup>50</sup>

柿原、関

村田

【本文欄】

後樂園の研究會<sup>51</sup>あるも、

咽痛を心配して欠席、

天気快晴、暖気催す

梅花枝を飾りて清香を

放つもの数樹、

夕方原田氏朝鮮<sup>種</sup>将来品を

携へ来り示さる

首かけ徳利式本を、土産に頂く

二月二十四日 月曜

【本文欄】

午前倉敷に出て柿原得君に

玉堂、関雪<sup>52</sup>よりの受領証を

渡す

午後出岡、柿原政君に面會、

原田善吉氏を訪問不在

四時の列車にて帰宅、

夜電報来、

岩村愛子(悦郎夫人)<sup>53</sup>長逝さる

二月二十五日 火曜

【予記欄】

来奥原、

出、柳井、太田、

岩村、

長尾

二月二十六日 水曜 (記入なし)

49 疋田直太郎、または疋田家。直太郎は児島の従兄で医師。岡山県高梁市で眼科医

50 院を営んだのち九州帝国大学医学部助教授。その後、福岡市で開業。

51 河原質市であろう。倉敷紡績で重役を務めた人物。児島の個展大阪会場の主催者のひとりであった。

52 岡山洋画研究会。前掲注11参照。橋本関雪(はしもと・かんせつ、一八八三—一九四五)。日本画家。前掲注45参照。

53

二月二十七日 木曜 (記入なし)

二月二十八日 金曜

【本文欄】

出岡、佛先生<sup>54</sup>を訪問す

原田善吉氏を訪問す、

午後二時帰宅

三月一日 土曜 (記入なし)

三月二日 日曜

【本文欄】

吉田君の来宅を乞ひ

東京より持帰りし、

カンパス<sup>(カンヅァス)</sup>を各枠に張直

す手傳を乞ふ

終日、

羽織の手裏を描く

三月三日 月曜

【本文欄】

出陣、

吉田君と午後同道して

出岡、夕方帰宅

三月四日 火曜

【本文欄】

吉田君夫妻、三木令嬢

と他<sup>(の?)</sup>に一名の令嬢を伴ひ

来酒<sup>55</sup>、

小放牛の手指を描き改むる

ためモデル<sup>(モデル)</sup>に乞ひたるためなり

夕方迄写生、

夜、願書、及羽織の裏地を

描く

三月五日 水曜

【本文欄】

午前、旅券願書をかき

描きたる羽織を大原に持

参、其席調印を乞ふ、

午後青野君訪問、痔にて

臥床、

夕方、満谷、松尾氏<sup>56</sup>来

倉、

三月六日 木曜

【本文欄】

満谷氏朝岡山より来られ

54 デュトウ神父のことか。前掲注13参照。

55 「酒津(兎島の住所)に来る」の意であらう。

56 松尾哲太郎か。満谷国四郎の友人で、第六高等学校教授を務めた。

午後玉島に去らる  
夕方、伊藤仙君<sup>57</sup>夫婦連れに  
て来訪、三橋氏来車

午前岡山に趣き縣廳に旅券下  
附願書を持参す

三月七日 金曜

【本文欄】

午後吉田君来訪、  
夕方倉敷に出て大原に屏風を  
出して東京出品<sup>58</sup>に就き如  
何せんかと考ふ

三月八日 土曜

【本文欄】

終日画室に在り  
満谷氏滞在  
小放牛を習描す、

三月九日 日曜

【予記欄】

発信  
林杉造<sup>58</sup>  
【本文欄】  
終日画室にあり

琴かけ未た筆をとらず

満谷氏滞在

三月十日 月曜

【本文欄】

満谷氏滞在

三月十一日 火曜

【本文欄】

満谷氏滞在

三月十二日 水曜

【本文欄】

満谷氏滞在中なりしたため  
仕事、及準備不可能、

午後大原宅にて屏風の手入  
をなす、  
午後雨降る

三月十三日 木曜

【本文欄】

前日にて描き終れす  
今朝より午後すぎ迄て  
手入をつゝく、

57 伊藤仙三郎か。児島の住所録に名前があり、住所は神戸市夢野町、野崎通および上筒井通となっている。

58 林杉造。大阪にて印刷会社林欧文堂を営んでいた。

夕方衝立に西湖を描く  
夜半終る、

三月十四日 金曜

【欄外右側～本文欄】

東上

□早朝、□柿原氏の絹に  
日の出を描き青野君の  
ガクに京城を描く、

午前十一時の列車にて東上  
夕方大阪に下車、  
小林君を訪問し  
林君と、齊藤氏の宅を訪る  
停車場前に一泊

三月十五日 土曜

【本文欄～欄外右側】

早朝神戸に趣き、  
郵便會社、静岡丸の乗船  
切符の假契約を終る  
正午前帰阪、  
河原氏を訪問、  
小林君と共に皿井、三越、  
銀行に廻る

午後三時過の列車にて

京都に趣き、夕方太田君を  
訪問同夜十時限の急行に  
乗し東上、

三月十六日 日曜

【本文欄】

午前正午東京着、  
直に村田氏を来宅を乞ひ  
同道田井<sup>④</sup>印刷所を訪問  
カタロク印刷の件につき見積  
を乞ふ、  
夕方散髪、

三月十七日 月曜<sup>59</sup>

【本文欄】

午前藤島先生を訪れ  
午後三越に大原氏より依頼の  
買物をなす、  
夕方山本君を訪問不在  
藤島先生、岡田先生に□肖像  
画の依頼をなす、  
結城氏へ屏風の事を話す  
四月一ぱいかかる筈  
吉田君来京

59 三月十九日欄に、印刷された日付を訂正  
して記入されている。

三月十八日 火曜

【本文欄】

午前磯谷に趣く椽<sup>(樑)</sup>未た、出来さるも  
午後五時迄に出来る筈、

正午、吉田君矩一來訪

午後学校に趣き正木校長<sup>60</sup>に

案内状兼招待状の起稿<sup>(需)</sup>を求む

三月十九日 水曜<sup>61</sup>

【本文欄】

午前九時学校に趣き

田中の主人と写真屋同道来校

作品写真<sup>62</sup> 式十枚を撮影す、

午後、

畜産博<sup>63</sup>を見物

夜に入り非常なる強風起る、

吉田君、同宿、

家内より来信

旅行□状下附につき一應倉敷警察に

登署せねはならぬと申来る、

三月二十日 木曜

【予記欄／欄外左側】

発信

青の

発電

青の、

来電

青の

斉藤

洗濯へ

シャツ一、カラニ

ハンカチ 六

【本文欄／欄外左側】

朝金沢氏来訪、

午前中田中印刷所に趣き写真

の撮影を一覧す、

正午村田君来訪、

午後光風會に同伴

山本<sup>64</sup>、跡見<sup>65</sup>、平井君に面會、

夕方、再ひ田中印刷所に

趣く、

昨夜国元より、来信「倉敷警察署

より旅券の事につき出頭せよとの事」

青野君に打電して帰国せずに済む工夫

を相談す、

60 正木直彦(まさき・なおひこ、一八六二—一九四〇)。官僚、東京美術学校校長。

61 三月十七日欄に、印刷された日付を訂正して記入されている。

62 田中印刷所。三月二十日欄参照。

63 第一回畜産工芸博覧会(中央畜産会主催)。この頃上野公園内で開催されていた。

64 山本森之助(やまもと・もりのすけ、一八七七—一九二八)であろう。洋画家。

65 跡見泰(あとみ・ゆたか、一八八四—一九五三)であろう。洋画家。

三月二十一日 金曜

【予記欄】

来信

青の

小林

【本文欄】

午前田中へ趣く

午後、斉藤溪舟<sup>66</sup>、富永<sup>67</sup>、磯谷<sup>68</sup>、

時々の写真員来訪

午後會場に趣き面積を見る

大阪の會場中央公會堂借入

不可能となり

府立商品陳列場の式階を借

入れる事となる

三月二十二日 土曜

【予記欄】

来信

原、青の

発信

青の

小林、

自宅

【本文欄】

午前□汐留、高瀬組運送店に

趣き出荷の事を依頼す

貨車借切、倍賃、護送者附

にて八冊五日夜東京発送

八日午後二時迄にハ大阪着の予定

右約束を終る

正午、斉藤氏来訪村田氏来訪

午後、光風會にて三宅<sup>70</sup>、辻氏<sup>71</sup>に面

會、□博物館に趣く

夜美術旬報の松原氏来訪

三月二十三日 日曜

【本文欄】

朝美術学校、昼黒田先生訪問

不在、午後村田氏宅に至り招待

状発送の事につき相談をなす

牛夕方光風會に趣き、岡野<sup>72</sup>

田辺至氏<sup>73</sup>に中国民報社洋画展

覽會の出品を乞ふ、

三月二十四日 月曜

【本文欄（欄外左側）】

午前美術学校卒業式に参列

諸先生に會遇、

藤島先生より先日依頼せし

肖像ハ揮毫不可能なる由

申出られ小林萬吾氏<sup>75</sup>に依頼の

事と決す、交渉済 □

66 斎藤徳太郎（恵太郎、溪舟）。前掲注35参照。

67 富永勝重（とみなが・かつしげ、一八八四—一九五八）か。洋画家。

68 時事新報のことであろう。

69 原澄治（はら・すみじ、一八七八—一九六八）か。大原孫三郎の右腕として倉敷紡績などで活躍。のち、倉敷町長。社会事業も多く手がけた。

70 三宅克己（みやけ・こつき、一八七四—一九五四）であらう。洋画家。

71 辻永（つじ・ひさし、一八八四—一九七四）であらう。洋画家。

72 岡野栄（おかの・さかえ、一八八〇—一九四二）であらう。洋画家、版画家。

73 田辺至（たなべ・いたる、一八八六—一九六八）。洋画家。

74 中国民報は岡山の地方新聞で、現在の山陽新聞の前身紙のひとつ。一九一三年より大原孫三郎が経営にあたっていた。

75 小林萬吾（こばやし・まんご、一八七〇—一九四七）。洋画家。

午後、日日の記者来る、写真班  
村田氏来訪

今朝写真版の校正来る、  
吉田君牛込行  
宿分ず

三月二十五日 火曜

【予記欄】

糞、  
来電  
小林

【本文欄】

午前下谷警察に趣き指紋を  
なす、

黒田先生訪問不在  
今関氏訪問不在

午後村田氏宅に至り午後  
七時頃迄招待状案内の  
準備をなす

三月二十六日 水曜

【予記欄（欄外左側）】

来信  
大原夫人<sup>78</sup>  
妻、<sup>79</sup>

発

大原夫人

妻

青の

小林

発電小林

【本文欄】

朝より村田氏宅にて招待  
状発送の準備をなす

午後五時帰宿

夜、黄微<sup>(黄微之夜)</sup>の友の田中氏

来訪

三月二十七日 木曜

【本文欄】

昨夜日□寒気加り帰りて風邪の  
気味ありて氣の面白からず、

午前砂田君来訪、<sup>80</sup>

午後、坂田、<sup>81</sup>□□、

富永金山、氏来訪、

午後五時より山本氏に招かれて  
有楽座に出かく

十時半帰宿、

77 東京日日新聞のことであろう。  
今関天彭（いませき・てんぼう、一八八  
二―一九七〇）か。漢詩人、中国研究家。  
児島の住所録に本名（今関壽磨）が見え  
る。

78 大原壽恵子（おおはら・すえこ、一八八  
三―一九三〇）。大原孫三郎の妻、歌人。

79 児島友（こじま・とも、一八九〇―一九  
七一）。岡山孤児院の創立者石井十次の  
娘。一九一三年、大原孫三郎の仲立ちに  
より児島虎次郎と結婚。

80 砂田正二か。洋画家。児島の住所録に名  
前があり、住所は岡山市桶屋町となつて  
いる。

81 坂田一男（さかた・かずお、一八八九―  
一九五六）か。洋画家、岡山市出身。児  
島の住所録に名前があり、住所は東京麴  
町となつている。

三月二十八日 金曜

【本文欄】

朝藤島先生の宅を訪問、  
午後同伴学校に趣く、  
諸教授試験成□の審査に  
登校、

夕方屏風荷をとく、

夜佃兄弟来訪<sup>82</sup>、村田氏来訪  
山谷氏来訪

三月二十九日 土曜

【予記欄】

発電  
斉藤、  
発信  
自宅、  
来信  
小林、  
青の、  
自宅、  
来電斉藤  
【本文欄】  
午前九時学校に趣き作品の  
粹張をなす、  
午後四時頃終る

高島屋に洋画家の邦画展

覽會を見る

夜、柚木<sup>83</sup>、藤島先生来訪

学校にて佃、砂田、矩一吉田君  
など手傳されたるため案外  
早くかたつく

三月三十日 日曜

【本文欄】

昨夜藤島先生来訪「有島山下<sup>84</sup>  
君<sup>85</sup>などと交情堪たるを復活させ  
た<sup>86</sup>との事」物語らる  
朝九時学校に額の陳列準備を磯谷  
に約したるも先生のため早朝  
自働車にて山下君を訪問会談一  
時間要領を不得帰途有島君  
を訪問不在、  
十一時学校□に到る、夕方迄陳列  
準備、

三月三十一日 月曜

【本文欄】

午前八時半学校に到り昨日の  
陳列を整ふ  
十時頃より□招待したる記者達  
ほつく来観□さる

82 佃武昭(つくだ・たけあき、一八九一—一九六八)、洋画家。佃政道(つくだ・まさみち、一九〇一—一九九二)、洋画家、版画家。岡山市出身。

83 柚木久太(ゆのき・ひさた、一八八五—一九七〇)であろう。洋画家、現倉敷市出身。

84 有島生馬(ありしま・いくま、一八八二—一九七四)。洋画家。

85 山下新太郎(やました・しんたろう、一八八一—一九六六)。洋画家。児島とは、東京美術学校の同期卒業。

86 藤島武二が二科会発足(一九一四年)に参加しなかつたことをめぐり、有島生馬・山下新太郎ら二科会創立会員である教え子たちとの間に生じた不和について述べていると考えられる。

夕方迄、数多来観

夕方

四月一日 火曜

【本文欄】

午前八時登校

早朝より来観の人多し

終日會場にて招待の勞をとる

此日會場者約四百位、

観者は非常なる熱心の度を以て

観覧さる、

総て専門家、學生など多し

来援の人々、

金沢、村田、新支局<sup>87</sup>の人三人、矩一、藤<sup>88</sup>、

佃、中山、坂田、小野片岡の諸氏

四月二日 水曜

【本文欄】

今朝も早くより登校

終日展覽會場にこもる、

入場會約<sup>(者)</sup>、七百位

四月三日 木曜

【本文欄】

早朝より登校

終日在場、

説明を要し望まるし<sup>(も?)</sup>人なかく

尠からず、

午夕方五時閉會直に磯谷

は荷造に従事其夜総てを

芝の磯谷の所に持運ふ

夕夜食を手傳れたる学校諸氏など、<sup>?</sup>

會食す、

四月四日 金曜

【予記欄】

発電

筒井氏に

旅券の事

を依頼す

【本文欄】欄外左側

午前國民美術<sup>89</sup>に趣く

午後、学校に趣き屋代氏<sup>(矢代?)</sup>に<sup>90</sup>

面會小使への心付など相談す、

夕方村田氏来訪カタログの

計算を持参せらる

88 87

中国民報社の支局の意か。  
藤彦衛（ふじ・ひこえ、一八九七—一九六八）か。洋画家、岡山県出身。兄島の住所録に名前があり、住所は東京府下和田堀町となっている。

90 89

国民美術協会のことであろう。  
矢代幸雄（やしろ・ゆきお、一八九〇—一九七五）か。美術史家。横に鉛筆にて「矢代幸雄」と書き添えられているが、兄島の筆跡ではない。

七時より、赤坂三河屋に参会  
此夜、藤島先生、斉藤、山下、有島  
富永の諸氏余のため別宴を□らる、  
「今朝、村田氏に依頼して外務省に  
青木君を訪問し旅券の事を  
尋ねて貰ふ  
事にした

四月五日 土曜

【子記欄】

来電、

筒井、

【本文欄】

午前学校に至り

小使、門衛などに心付をなす、

幕など損料支拂、<sup>91</sup>

磯谷に趣き額稼代支拂<sup>(額稼)</sup>

豫想よりは非常に安價にて<sup>?</sup>

済みたり、

帰途村田氏の局へ尋ね、

此所へも少しの心付をなす、

四月六日 日曜

【本文欄】

朝正本校長を牛込にの宅に訪問<sup>ママ</sup>  
半時後退出、

麴町に黒田先生を訪問、一時間  
會談、  
帰途、中国支局に村田氏を訪<sup>92</sup>  
ね旅券未着の事を謀る  
今夕迄に着ならむと語らる  
岡崎君、夜来訪  
女子大学□の先生来らる、

四月七日 月曜

【子記欄】

発信

青の

発電

筒井

全

来□電

筒井

【本文】

午前金沢氏来訪

正午過中西屋へ錦絵の複

製を買求めに趣く欧州への土産

とせんためなり

二時過富永君来訪

藤島先生を訪問不在

夕方待詫たる旅行券到着、  
明日は退京横濱に趣く予定

91 借用料の意。  
92 中国民報社の支局の意か。

四月八日 火曜

【本文欄】

午前八時都田屋を辞し九時頃発  
横濱下車、

英国領事館に至る写真二葉必要  
なる由早速大庭氏に依頼して復写

を附近の写真師に乞ひ昼前

領事館に出頭手続をなす、

午後大庭夫人に誘れて大牧原<sup>（本牧を）</sup>

氏の三溪園を観る

午後五時頃の急行にて大阪に向ふ

旅券証明本日出来上らず

後便に托し送付方を大庭氏に乞ふ

四月九日 水曜

【予記欄】

磯谷□

へ□電

【本文欄】

午前六時半梅田着

直に小林氏を訪問展覧会準備

備につき聞合せ直に齊藤氏の

宅を訪れ同道して米中央公會

堂に至る

倉紡出張店、欧文堂<sup>95</sup>に至り

夕方迄小林君宅にて案内状

発信の準備をなす、

淀屋橋小路の越智旅館へ泊す

夜松原氏来訪

四月十日 木曜

【予記欄】

磯谷より

来電

【本文欄】

朝是則倉庫に至り荷物を

点検す、

明日市下新聞記者を招きて一應展

覧する□事となり場所を中央

電気倶楽部に約束す、

午後三時に趣き幕の事を

橋本氏に□す

午後方々に観覧券の配布に市

中を廻る、

四月十一日 金曜

【本文欄】

午前十時は則倉庫に趣き

後中央電気倶楽部

に箱荷を運び階上に陳列

す、

午後一時より招待したる

93 大庭猛か。児島の住所録に名前があり、住所は横濱市森町となっている。大庭は岡山孤児院出身で、大原孫三郎の援助により横濱で織維品貿易会社を営んだ。また、一時期岡山孤児院長を務めた。

94 倉敷紡績。大原孫三郎が経営する紡績会社。

95 林欧文堂。大阪の印刷会社。前掲注58参照。

96 松原三五郎（まつばら・さんごろう、一八六四―一九四六）であらう。洋画家、岡山市出身。松原は児島の個展大阪会場の主催者のひとりであった。

新聞記者数名来場、  
午後四時<sup>(額?)</sup>を箱に納む  
めて再び是則倉庫に預く

夜発信の残務をなす、

四月十二日 土曜

【本文欄】

早朝来阪を乞ひたる長尾氏  
来着、  
公會堂に至り會場設備  
の準備につき長尾氏の策を  
求む、  
案内状発信などの準備に  
尚忙し、

柳井君来

四月十三日 日曜

【本文欄】

柳井君来阪(手傳のため)  
愈々明日より開会の事、  
長尾氏の方の準備なりたれハ  
明<sup>(明日?)</sup>の開会は正午の時刻を  
遅れる事なからむ

林君の所のカタログ等無事<sup>?</sup>

運び都合よし

四月十四日 月曜

【本文欄】

六時公會堂に来至り腰かけの取  
かたつけをなす一方に額箱の  
荷ときする人々、<sup>□</sup>多く松原<sup>□</sup>  
の学生其店、小林、三原 林の  
店員<sup>99</sup>など、長尾氏の梓組<sup>(額縁)</sup>  
幕張、井上<sup>?</sup>額縁店の主人  
人夫などの助により、正午  
僅過ぎて全部陳列済と  
なり午後一時開場す  
夕方迄の人場者八百人余、

四月十五日 火曜

【本文欄】

朝より小雨降り正午前後は  
非常の暴風雨となる、  
も人場<sup>(人)</sup>者多数にして  
比較的静肅なる観賞家  
の満つ、  
入場者八百人余、  
此夜成羽<sup>100</sup>出身者の會食あり、  
小林、柳井、林、横見、三原、  
林弟、須藤、

97 偏は「吝」、旁は「冡」から成る漢字が用いられている。「額」または「額縁(額縁)」の誤字と考えられる。

98 松原三五郎の画塾(天彩画塾)の塾生のことであろう。前掲注96参照。

99 「林源十郎商店の店員」の意か。前掲注3参照。

100 成羽(なりわ)は児島の故郷、現岡山県高梁市成羽町。

吉田君来阪

四月十六日 水曜

【本文欄 欄外左側】

空霽れて心地よし、

朝来入場者の数巨多午後

に入りて一層の数にて殆と雑

騒として静観に的せず、

入場数四千を越る事三

百

内藤博士<sup>101</sup>、小山健三<sup>102</sup>、松方幸太郎<sup>103</sup>

氏来場松方氏羊の絵を

希望さる、

午後六時閉場直にとりかたつけ

をなし午後十時全て荷造などを

終へて印刷倶楽部に慰勞會を開く

四月十七日 木曜

【本文欄】

午前中支拂などの雑用

あり

午後淀に余のため京阪在住の

画家双鳩會を開かる、

會するもの二十名

深夜大阪に帰る、

長尾氏、柳井、小林金沢氏

等しく趣く

四月十八日 金曜

【欄外右側 本文欄】

朝

長尾氏<sup>104</sup>三原、柳井氏と

共に奈良に趣く、

昼食後、大佛、葦八幡春日

を廻りて三山亭に帰り夕食後

大阪に帰る、

長尾氏夜行にて帰東す、

四月十九日 土曜

【本文欄】

午前八時発午後三時帰倉、

家越、留守中の取かたつけ、渡

欧準備などにつきほゞ考

按も定まる

四月二十日 日曜

【本文欄】

朝来<sup>104</sup>大原氏先代の肖像画

を描き始む、十二号、

101 内藤湖南(ないとう・こなん、一八六六—一九三四)か。東洋史学者。児島は前年中国旅行に先立って内藤を訪問していることが、同年の児島日記から確認できる。

102 小山健三(こやま・けんぞう、一八五八—一九二三)。実業家、教育家、官僚。

103 松方幸次郎(まつかた・こうじろう、一八六六—一九五〇)か。実業家、政治家、川崎造船所社長。

104 《大原孝四郎像》(倉敷紡績所蔵)であろう。

四月二十一日 月曜

【予記欄】

発信 屋代(矢代ウ)<sup>105</sup>

正木、黒田、

林杉、<sup>106</sup>山内

松原、齊藤、

山下、有島

齊藤豊

【本文欄】

肖像描き、(まじりく)く

吉田、小林君来宅、

四月二十二日 火曜

【本文欄】

大阪より荷物到着、小林吉

田両君の手傳にて開箱、

倉に夕方迄にて全部の

かたつけを終る、

肖像を描き終る、

四月二十三日 水曜

【予記欄】

発信

太田、上田尚<sup>?</sup>

山本□

【本文欄】

屏風一双を描くべく大原氏

より依頼され、

屏風来り、春秋を描くべく

構図を謀る、

屏風に

夜デッサンを描く

小林君帰阪

四月二十四日 木曜

【本文欄】

終日屏風を描く吉田君は

泊酒<sup>107</sup>されて取かたつけの手傳

を尽さる

四月二十五日 金曜

【本文欄】

屏風殆となる、

画室中のものは画室に数個の

木箱に収蔵し置く事と

なす、画室の額はすべて

倉に蔵する事となす数日<sup>?</sup>

来<sup>マツ</sup>毎日出しつゝの取かたつけ

のため画室の整理殆とつく

<sup>105</sup> 前掲注90参照。  
<sup>106</sup> 林杉造のこと。前掲注58参照。  
<sup>107</sup> 「酒津(児島の住所)に泊まる」の意。

四月二十六日 土曜

【本文欄】

屏風全くなる、  
琴かけの図按を考ふ

一方の渡欧準備をなす、

四月二十七日 日曜

【本文欄】

午後七時岡山に趣く  
九時より岡山中学に於ける  
余のために催さる、研究会  
の送別會に望む  
正午過ぎ會を辞し、田天主寺  
閣の洋画陳列を観る  
午後二時半の列車にて列婦酒109  
琴かけを描く

夜都志7氏の宅にて迎110□の諸氏の  
會食に招せらる、

四月二十八日 月曜

【本文欄】

午前七時車にて堪井111に趣く十時  
発自働車十一時半成羽着、  
午後学校を訪問し、本光寺に  
墓参す、

夜深く迄語合ふ、  
夜、井上、柳井、庄、遠藤諸氏  
より饗應を受く

四月二十九日 火曜

【本文欄】

早朝柳井君と八幡宮に詣づ  
八幡社前の丘の中、成羽川に向て  
傾斜せる地面の眺めよく金か出  
来たれば此の辺に住家を建て、  
暮してもよしなど、地域の  
撰定など試む夢の如き話し  
なり、  
正午中村井上、柳井諸氏と會  
合午後一時の自働車にて  
午後四時酒津着、  
描きかけの琴かけをつゝく

四月三十日 水曜

【本文欄】

朝青野兄の嗜血7烈しき夢を見て  
醒む、  
終日琴懸112を描く式枚にて各天女  
の樂を奏する所なり、  
午後近家に配布すべき色紙など  
描く、夜荷物のとりにかたつけ  
なとす、

108 岡山城天守閣のことであろう。

109 「酒津（児島の住所）に帰る」の意。

110 都志太郎、または都志家、都志太郎は、大原孫三郎が経営する倉敷銀行で取締役をつとめた人物で、児島の近所に住んでいた。児島の孫である児島塊太郎氏によると、両家は家族ぐるみの付き合いがあったとのこと。

111 湛井（たたい）は現総社市の西部、高梁川河畔の地名。児島の住む酒津から故郷成羽に向かう途中に位置する。

五月一日 木曜

【本文欄】

昨夜深く青野兄の室重患なる  
を傳へらる六時過ぎ同兄の宅を  
訪問一時危篤を宣せられたるも  
其後少し平安を得た由を報せ  
らる、  
心臓の不良なる事の特に心痛  
されるも、□腹、より腹膜に移  
りたる本症はや、軽快熱度降  
下せるもとにかく重患なればと  
三橋兄宅となす、午後岡山□□<sup>112</sup>寛博<sup>113</sup>  
士の来るあり、等しく重患なると  
傳へらる、

五月二日 金曜

【本文欄】

昨夜は通夜して看護の手傳を  
なす、  
朝小林兄の来るあり、青野兄  
の近親、諸友に報する事を  
好まず、只危篤なる旨を強<sup>?</sup>に  
親族の人々に通知す、  
終日病状に差したる変化なし  
此の一兩日最も危険らしく  
兎に角<sup>とら</sup>再起の望みなしとの事

なりしも余は徹頭徹尾快方  
の来る事を自信す、

五月三日 土曜

【本文欄〱欄外左側】

昨夜九時、家に歸りて眠る、  
午前三時、使來りて病者の死近き  
を報す、急き趣く三橋兄すてにあ  
り少時して脈傳や、平調に復し  
て一同愁眉を開きしも  
午前八時半遂に逝く、  
暁の頃死の近づきたる病者は親近  
を枕頭に寄せて明□なる遺言  
を□す、  
死は遂にせまりて心臓ををかす、  
葬儀を明後五日と定む、  
寄せ参しられたる近親友人、衆多、  
青野兄は已に不帰を覚悟したるも失望の色面に現れ、  
見るに  
堪へす

五月四日 日曜

【本文欄〱欄外左側】

昨夜十時頃青野君の宅にて大原氏より  
明日出発神戸にて準備したる方よからむ  
と勧められ今朝より急遽<sup>?</sup>、旅□□  
行李の支度を調ふ、正午酒津に

112 三橋玉見（医師）宅にて看護するという  
意であろう。前掲注2参照。

113 寛博（かけい・しげる、一八八二—？）  
であろう。医師、岡山医学専門学校教  
授。

趣き大原氏に持行くべき画面四五を撰ふ、

午後三時発の列車にて倉敷を去る、

岡山に下車、デュス先生(Düss先生)に挨拶に寄る

吉田君訪問就床は腹膜炎にて一

時重患なりし由と聞く、六時四十分

岡山発十時過神戸着海岸

後藤に泊す、

五月五日 月曜

【欄外右側～本文欄～欄外左側】

朝

八時過の列車にて大阪に趣き三井

銀行に小切手五〇〇〇を受取る、

三越にて小許(少)の買物をなす、

正午帰過帰神、二時白耳義(ベルギ)

領事館に証明を乞ふ恰もガンの<sup>111</sup>

出生なる書記館ありて直に済む<sup>?</sup>

午後、市中に買物をなす、

夕方、金山、伊藤夫婦来訪連立ち

て散歩す、途上柚木君に遇ふ

十一時帰宿、

柳井、小林君すてに着宿、

柳井君より青野兄の其後元気に復せし

を聞く

五月六日 火曜

【予記欄】

見送られたる諸

友、

小林、柳井、林、

伊藤、金山、<sup>115</sup>

太田、乙骨、須藤

炭谷、<sup>116</sup>小野田、<sup>117</sup>

妹尾、柚木、

来信数多、

【本文欄】

早朝、多くの人々宿に来訪、小林君と

柳井君は両替に依頼す十時ランチ

にて乗船、静岡丸六千噸比較的

新造船なるも、日本製造にて粗末

千萬、一等は以前の欧州航路に比して

二等の設備に劣るものあり、

十一時出航横濱よりの客と神戸

にての乗客を加ふるも尚、門司よ

りの乗客多数あるらしく賑かならず

午後四時屋島高松を見て帯江の煙備

突らしきものを右舷にて廣島沖位？日没す<sup>118</sup>

五月七日 水曜

【予記欄】

発信 自宅、

114 ベルギー北部の街のゴロヘント、またはゲントのこと。「ガン」はフランス語での呼称。児島は第一次滞欧中、同地の王立美術アカデミーで学んだ。

115 乙骨安昌であろう。児島の住所録に名前があり、住所は岡山国富となっている。

116 炭谷小梅（すみや・こうめ、一八五〇—一九二〇）か。キリスト教の布教師。石井十次による岡山孤児院の活動を支援した人物。

117 小野田鉄弥（おのだ・てつや、一八六四—一九四八）か。石井十次とともに岡山孤児院の運営にあたった人物。  
118 帯江村（現倉敷市帯江）にあった帯江銅山の煙突のこと。

小林、柳井、  
自宅へ小包、

【本文欄】

早朝門司着、七時半上陸、  
神戸後藤田旅館に帯を忘れたる  
事を思出し袷衣の最早役立  
たらぬ事を思出し上小包として自宅  
に発送す、

九時の列車にて博多に向ふ、  
正午前疋田を訪る、市中に出て  
、僅かなる買物をなす、  
船中涼風起きて暑気を感じる  
処なかりしも此地に來りてすてに夏  
なるを知る、夜晩く迄戲書をなす、

五月八日 木曜

【本文欄】

午前十時発六時四十分？福岡  
発、九時過ぎ門司着、直に帰船  
十一時発船、岸近き港との様は  
長崎に似て去年の旅を思出づ  
港外の波も静かに玄海の船旅も  
さほどの事なし、乗客一同の  
食事を欠くもの一人たになし  
日本より携へたる西南血涙史<sup>(「薩南血涙史」？119)</sup>  
を読み始む  
晴快にて心地よし

五月九日 金曜

【本文欄】

波に明けて波に暮れたる今日も  
されたる荒れもなし只終日霧に  
包まれて快晴を見ず、  
読書とデッキの遊戯に消暇す、  
午後二時に諏訪丸乗船上田君  
より無線電信来る、今朝上海  
発帰国の途にありと田小生より  
返電に會し尚一回通信あり小生  
より重ねて返電す、  
意識快明を欠き氣進まず

五月十日 土曜

【予記】

発信

自宅、

大原、

【欄外右側】

上海の甚三郎は今朝彼か父の悲報に接し帰国のため、  
発船

【本文欄】

八時起床、外海すてに濁色に黄はみ  
て上海の近づきたるを知る、揚樹江<sup>(「揚子江」？120)</sup>  
を遡<sup>(揚子江)</sup>して郵船埠頭に投錨したるハ  
正午頃なり昼食を済して二時

119 加治木常樹著『薩南血涙史』のことであ  
らう。西南戦争の記録。

120 「揚子江」または「揚樹浦」の誤記であ  
らう。

過上陸直に須藤氏を訪門少時、  
附近の散策を試みたれとも見る  
ほとものものなし

伊藤妹尾、須藤兄弟の月の家に案  
内されて夜深して須藤君の宅に  
一泊す、

上海の暑気烈しく極暑と思ふ

五月十一日 日曜

【予記欄右側】

発信、大原、  
青の、家族、  
矩一、柳井、

【本文欄～欄外左側～予記欄左側】

昨日の蒸暑さは夜半に急変し  
て非常の涼気を催来る午前  
八時起床十時頃迄故国の諸友へ  
通信を書く

十一時、原田瓊生<sup>122</sup>氏の宅に訪門  
王、統一氏の来訪中、支那人

の対日思想なるもの及支那人の日

本人の性格観察□日本人と支那

人の思想、性格上に現れたる差異

などに就きて興味ある意見を聞

く原田氏の宅にて昼食をす、められ

たるも食欲なし食事せず夕方より須藤、妹尾、伊藤

氏に案内を受けて競馬場附近の支那料理店に至り△<sup>123</sup>

△

十時過頃

會食、

十時半

シマパンにて

帰船、

五月十二日 月曜

【本文欄～予記欄】

午前八時上海郵船埠頭を発船す、上海  
より新なる乗客の増したるものあれと上海に上

陸したの<sup>と</sup>人と差引増客なし、揚子江の

濁流の波色減する頃より船波荒く船の

動揺烈しく霧深くして小雨交る、

午後に至りて読書するも睡気を

催するのみ遂に夕方迄半眠半醒の

姿にて煙突室に過す、昨日より消化

剤の服薬を試みつゝあるも空腹を

来さす夕食を控ゆ、多くの乗客も

等しく船暈の気味？△

△

夜に入りて波

穏かに一同の

快気生す

夜晩く迄

蓄音器

を聞く

121 須藤五百三、祐七、新六兄弟のいずれか。  
祐七および新六については前掲注34参  
照。須藤五百三（すどう・いおぞう、一  
八七六一一九五九）は医師で、上海で医  
院を営んでおり、魯迅の主治医として知  
られる人物。

122 大原孫三郎の幼なじみ。児島の住所録に  
名前があり、高田商会の関係者であるこ  
とがわかる。

123 文章が別の欄に続くことを示した記号。  
児島は「△」を用いることが多い。

十時就床  
睡眠充分

五月十三日 火曜

【本文欄】

昨日は少し波高かりしも今日は終日平穏にて空晴れて風涼しく快気を催し<sup>?</sup>食味あり  
甲板の遊戯と読書になかき  
終日を送る  
明後日は香海着<sup>(香港)</sup>の予定  
上海に上陸せし時ほどの暑さに至らず想像より涼気あり、

五月十四日 水曜

【本文欄】

終日海上平穏にて明朝は香港着の予定、  
午後ゴルフの競技を乗客一般に行ひ夕方迄時の過ぎを知らず、

五月十五日 木曜

【本文欄】

早朝香港入港九時半上陸同船の両三氏と自働車にて一時間廻遊し

正午頃ピークに昇る二時過

迄市中を徨い東京ホテルにて

食事をなし夕方帰船、

三度目に観る香港の風光、

朝も昼も夜も晴れたるも曇りも

山も水も建築も草も花も木

美しとも鮮し

往年スケツチに過せし香港の思出

も此旅には只贅美の眺に時を過す

のみ

五月十六日 金曜

【予記・本文欄】

今朝再び香港に上陸し少し珍らしき物にても目につかは何か買求めて記念の種にもせんと考へしも正午出帆なれハ上陸しても気忙しからむと遂に船に止りて上陸せず  
昨夕籐行李を支那人より買求む、  
船は正午正しく出航す、朝来風強かりしかはたして港外風愈々強く波荒し  
出航<sup>?</sup>すくより船の動揺烈しくして不快<sup>??</sup>  
この上なし、  
夕に至るも<sup>?</sup>静穏に復せず夕食を見合す、

五月十七日 土曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

昨日の荒波何時の程よりか静まりて

空晴れ渡り今日の航海の平穩を期せ  
らる、西南血涙史〔西南血涙史〕を読む事と、

デッキにてゴルフをする事と時に煙突室  
にてトランプを遊ぶ事は毎度日同じ日課  
の如し、

香港以来暑氣次第に加り来り、乗客の  
白衣に改むる人多し余この日白服に改む  
日没の頃より熱氣去りて涼風起り夕方より  
夜にかけての心地よく眠につくは大低夜半  
に入る、毎夕九時或は十時入浴す、

五月十八日 日曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

暑氣は一日と増し来りて蒸苦し、海上常  
に風氣あるもなま温温きくして氣重し、  
寢室\*に丸窓の小なるもの二つあれと風を  
通するによしなし、室内に一個の送風器  
あるも小にしてしかも廻轉力弱く風を起す  
に足らず終夜暑に蒸れて安眠する事を  
不得床に就てハ夜半甲板に出て、涼風  
に浴し再\*ひ寢\*に就く、  
巴里の様着佛後などの事思浮べて予想を  
定めむとするも不得、  
日本の出立後の出来事に知らむとする事と  
多々あれとこれも不可能なり

五月十九日 月曜

【予記・本文欄】

朝来霖雨霖暫々来て涼風快爽  
数日来の暑熱一時に去て終日殆と  
南洋の旅にある事を忘れしむ、

読書するも遊戯するも快味尠からず、  
西南血涙史〔西南血涙史〕は昨日読終りたれば La maison  
の続読をなす、

午後に至り雨霽れたるも風涼しく終に  
暑さを知る事なし、  
夕食は乗船来始めての日本食を供せらる、  
酒津の宅庄の事など思出て、  
琥一郎124の事突然頭に浮ぶ若し彼の上に何事か  
災の来りしにハあらずと心配の念湧く

五月二十日 火曜

【欄外右】

洗濯靴下縮シャツ125、寢衣125  
縮下シャツ125、スミ

【天気・寒暖・予記・本文欄】

海平穩なり航海中は大低無風125と云ふ  
事なく船の進行につれて何れよりか  
涼風の起らざる事なし  
昼は殆と暑氣に苦しむほどの事  
なけれとも夜に入りて船室に下れば  
通風なくし醒眠なくして夜を通  
す事かたし、

124 児嶋琥一郎（こじま・こういちろう、一  
九一四—一九九二）。児島虎次郎の第一  
子。戦後、祖父石井十次の児童福祉事業  
を再興し、児童福祉家として活動した。

125 洗濯に出した衣類をメモし、受け取った  
仕上がり品を取り消し線で消除したもの  
と思われる。「スミ」は、全品の受け取り  
が済んだという意であろう。

五月二十一日 水曜

【欄外上側】

□

袖ナシ

ツボン下

縮シヤツ由

靴下

スミ

【天気・寒暖・予記・本文欄】

今日の一日の航海も静かに船は午後三時新嘉坡に入港、四時旅券の検を終へ上陸、海岸の碩田館に泊す、往年此の宿に泊したる事を思出す  
夕方迄にサラサ屋に趣きサロン四五四枚を買求む  
夜夕食後浴衣かけにて海岸に天幕張にて馬來オペラを観る奏樂はすべて洋式にしてピエロも何か洋風めきたるもの日本の浅草辺の歌劇の類のものか  
国民記者山田氏余等の室に来らる  
これにて四席満員となる

五月二十二日 木曜

【欄外右側】

発大原、自宅、青の、吉田、林源、矩一

【天気・寒暖・予記・本文欄】

新嘉坡の夏も朝風は涼し同宿せし小笠原<sup>127</sup>

加藤<sup>128</sup>の諸氏とサラサ屋に來り市中を廻て

午後二時、帰船す、

船は午後四時出航ペナンに向ふ、

海波揚らす暑氣甚しからず

日は没して清光の星空に満つ、

明日一日の波の上明後日は又ペナンに上陸

を得む、

海の上は氣倦みて時長しされと港に

寄るの日を思へは又快興湧き來て

空想に耽ける、

五月二十三日 金曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

終波静かなりし

読書とゴルフに時を費す、時にトランプ

将棋などを試む、

五月二十四日 土曜

【欄外右側】

発信、大原、自宅、青の、林杉、関、上田、妹尾、

富永、一外四、

【欄外上】

洗濯

縞シヤツ一

ツボン一

縮シヤツ一

半袖一

128

児島の住所録に「山田毅一」の名がみえる。当時國民新聞の記者で、のちに政治家として活動した山田毅一（やまだ・きいち、一八七七一―一九五三）のこと。山田の著書『戦後の欧米漫遊記』（放天義塾、一九二〇年）により、児島と同じ船に乗船していたことが確認できる。  
小笠原長丕（おがさわら・ながまさ、一八九一―一九六八）。子爵。六月二十日欄参照。  
御木本真珠の加藤虎之助。六月二十日欄参照。

127

小笠原長丕（おがさわら・ながまさ、一八九一―一九六八）。子爵。六月二十日欄参照。

126

御木本真珠の加藤虎之助。六月二十日欄参照。

ハンカチ一

スミ

【本文欄より予記欄】

早曉船はペナン港外に近く着港後  
警吏の面倒なる旅券検への後十  
時上陸朝日館に憩ふ同船の人々  
植物園極楽寺などに趣く余は車を  
雇ひて市内を廻る何か紀念の品を  
購ふべくも何の珍らしきものを發見  
せず午後スケッチブックを携へて  
市中を彷徨すマーケットの傍に  
籠を頭に載せて立つ十三四才の小  
女裸足黒褐の馬來端然たる姿<sup>(マレ)</sup>  
勢嘆美に價す、

一式枚の鉛筆  
写生をなし  
たるは日本  
出發以來  
始めての写生  
なり  
昼と夕を  
諸氏と共に  
此の宿に會食し  
午後九時  
歸船す、

五月二十五日 日曜

【欄外上側】

下

シヤツ一  
カラ一

【天気・寒暖・予記・本文欄】

午前八時出帆愈々印度洋の波にさからひて  
コロンボに向ふ、今の期はムーンストーン<sup>(モンストーン)</sup>  
の頃にて向風なかくに強きため船の  
動揺かなり烈しく風力強くし  
て一時間<sup>(やまと)</sup>やと十哩未滿の航行  
のみされと波と風の都合にては二十九  
日或は三十日の朝迄にハ到着の予定  
なり、  
此の波の旅を一週間もつゝける事の我身に  
堪へ得るや如何にと、

五月二十六日 月曜 二十九日 木曜<sup>129</sup>

【五月二十六日欄の欄外右側】

六月七日記

【五月二十六日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

ペナンよりコロンボ迄は五日間の航程常にムーンストーン<sup>(モンストーン)</sup>  
の  
風を向に受て進む事なれば波は高く風は愈  
暴し平均一時間十哩位の速力に満足するより  
外なし

129

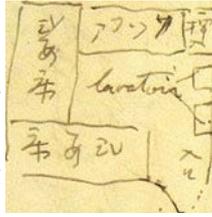
五月二十六日欄から二十九日欄までは、  
当該期間、つまりペナンとコロンボ間の  
様子を、後日六月七日に記している。

日本出発の時船中にて写生も試みるべき時  
もあらむとカンパス(カンヴァス)写生箱絵具等を第一の  
調度品としてトランクに詰込みたるも其れ  
を引出して来りてついそ筆とり写すべき気  
もかつて起らず各港に上陸する時スケッチ  
ブックのみは携へ持するもこれさへ鉛筆を  
走らす事の物うく暑気の烈しきと気

【五月二十七日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】  
の進まさるとによろむ写生欲のなき事は

我なからに不思議なる思ひそする

僅か四畳半大の船室に上下式安の寢床二ヶ



所ありラバトール(lavatoire 洗面台)式臺とベツ

ト大のソツファ(ソファ)一臺とあり一室四人

詰満員にて殆ど小荷物のカバン

さへ置く場所なく持来りし

トランク式個は下甲板層の荷物

庫に入れありてそのバカールーム(baggage room 荷物室)の

温度は今百二十度位ならむか

一式度夏服の取出入れ仕に入て見たか

【五月二十八日欄の予記・本文欄】

とても五分間とも止て居る事の出来ぬ

位の暑さにてシャツ一枚にても出る時は汗にひつ

しよりとなる事なり、そんなためか写生道具は  
依然としてトランクの中に留むるまゝとなし

船中の写生は鉛筆にてもと思へとも一等乗  
客の外人日本人の子供連多く香港？よりは

都合十二才を頭に十三人毎日方々で大騒を

始めてうるさくとも前回の如く甲板にて

写生などする事不可能と思へハ始めぬ方

かましとそれもそのまゝ新嘉坡より□□□□

などのテツキバツセンジャー(デッキ・バツセンジャー)などの衣色美しき

【五月二十九日欄の天気・寒暖・予記・本文欄・欄外左側】

装の多く乗込む事と思ひしも積荷多

くしてこれ等の乗客をとらさ□□何となく物た

りなく折角船中写生の種をと思ひ

しも訳なく終りぬ、

波は絶へす高く荒のみなれとあまり面倒

なる読書もせずテツキの運動は何かと

相手のあり次第毎日一時間怠なら

ぬ事としたれは三度の食事を欠す様の

事なく荒海の旅にかく食欲の衰へさる

事は我なから心強き限りなり

但し朝食は只カツフェと僅かのパンと玉子位

に止置たり

【五月二十八日欄の欄外右側】

洗、ネマキ一、縞シャツ一、ツボン下一□□シャツ

ツボン一上衣一、リ、ネクタイ一フランネル一、サ、

ルマター一、

130  
デッキ・バツセンジャー。船室をとらず  
甲板で寝泊まりする乗客のこと。

五月三十日 金曜

【本文欄】

午前十時コロポ港<sup>131</sup>内に<sup>132</sup>入る  
旅券の検べ各港と等し  
午後一時過ぎ上陸、每港衆各<sup>(客)</sup>  
と共に行動を共にすため  
自分の思ふ様の所をぶら／＼  
廻て見る事出来ため一人にて  
市中をふらつきく商店に入  
りて産物の珍らしきものなきやと  
探す、前年此地にて色々土産物  
を買求めたるを思出す、  
六時船に帰り泊す、

五月三十一日 土曜

【欄外右側】

雨

【天気・寒暖・予記・本文欄／＼欄外左側】

午前九時再上陸平塚氏と馬車にて博物  
館に趣く一時間ほど見物す、  
Anuradhapura<sup>(アヌラダーダプラ)</sup><sup>132</sup>てセイロン島(コロポより百二十  
哩)の紀元前四百三十七年より紀元後七百六十九年  
のセイロン島の最も古く最も偉大なりし旧都  
の文明せる遺物の多く陳列されたるを見る  
ポンペイの如く全くハイタイしたる都らしく  
紀元前の印度藝術の発達せる事に驚くガラス類  
にてエジプトの如く美しきもの多くあり、

其他 Polonnaruwa (769-1319 A.D.) の<sup>(ポロンナルワ)</sup><sup>133</sup>

佛教藝術品などの遺物も尠からず、午後三時迄市  
中を見物、  
船中午後四時出帆の予定なるも  
ポートサイド同盟罷業のため此地にて水炭積込のため  
め十時出帆

六月一日 日曜

【予記欄】

昨日コロポ  
にて  
赤茶地布に  
刺繡せる幕  
式枚を求む  
其他香箱  
など

【本文欄】

朝来ウネリ強く波高し、  
往年賀茂丸乗船の時には此  
位のウネリはさほど船の動揺を  
催せざりしと思しに此の船は  
船の丈短ければにや前後への  
動揺なか／＼に烈し、  
幸に天晴れて風割合に涼し  
ければ船暈など催す事  
なし船と波に慣れたるにや  
時々日本の事を思出して

131 山田『戦後の欧米漫遊記』(前掲注126参  
照)一一頁の記述、および六月二十日欄  
に「平塚農学博士」とあることから、農  
学・蚕糸学者の平塚英吉(ひらつか・え  
いきち、一八八八―一九八四)であるこ  
とがわかる。

132 アヌラダーダプラ。スリランカ北部の古都。  
ポロンナルワ。スリランカ中部の古都で、  
十一―十三世紀は首都であった。

133

色、の事を考ふ、

六月二日 月曜 〽 五日 木曜

【六月二日欄の欄外右側】

シャツ一、縮白シャツ一、靴下一、浴衣、一ネルヅ、  
ホシ一、ツメリ一、サルマター

【六月二日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

コロンボよりホートサイド<sup>(ホートサイド)</sup>迄は通常十三四日の航  
程なるもこの強き向風と荒波にては十五日

間でもとても着けるかとうか疑<sup>?</sup>らしく

風位左舷の正側即ち斜面西西南にして

船体常に右にかたむき左右の動揺なきも

前後の揺は波と共にかなり烈しく時に

下甲板に波の打かふさる事ありゴルフす

る時も常に白泡より起るシブキ小雨の

如く降り来りて衣□□て塩気にてじ

トトとして気持あし

波の形波の色も鮮かにして美し空は

【六月三日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

幸に毎日晴れかちにて雲の形なと面

白く眺めらるゝもの珍らしからず夜は

空の星光鮮明にて若月の光さへ美

しく静かに荒れ狂<sup>マッ</sup>く波を輝す夕も

ありこの大洋にては夕陽の没景盛

烈なる光景を観る事あるも毎回は

未だ壮なる夕暉を見る入<sup>マッ</sup>夕なし、

思はんとして黙すも遂に夢に入る事

あり読書せんとして欧書なと出せば

頭重くなり来りて不快を感せられ人と

語らむとすも相手少く殆んどほんやりと

【六月四日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

不為に時を過すより外なし

時に過去向後の上に就き考へ浮ふ事

も尠しせず

これから自分の仕事一、自分はすてに人生の

半途を過きたりとすれハ今残る半途の

路は愈々進むに難くして捉へんとする

對照<sup>(対象)</sup>は高くやゝもすれハ精力感情の

衰弱を来す事なきやと愁ふ、

今自らの歩み来りたる迄の余は比較

易々たるものなりし或は誰れにても

出来得べき容易なる業なりしか

【六月五日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

これより進むべく否進まねはなる前途は

とてもこれ迄の自分の全体では及もつか

ぬほと遠大なる業なるを思ふ時自分の

賤弱なる事の何とも云へぬ心細さを起す

のみ、偉大なる偉大ならむとす今後

の大業かはたして此のこれ迄の不肖なる

自分の力にてなし遂げ得らるゝてあらふ

か自分は自分の價値を考へてあまりに

それか無謀な望みてハないかと躊躇<sup>マッ</sup>す

するのである

六月六日 金曜 (記入なし)

六月七日 土曜

【欄外上側】

昨日正午より本正午迄百九十余哩航

【予記・本文欄】欄外左側、欄外下側、欄外右側】

コロンボを出てより波は一日一日と

荒く風は暴しく洋水茫茫終日一隻の

すれ<sup>〇</sup>遇<sup>〇</sup>ふ船の影たになく同じ様なる日を同

し様なる事をして其日くを暮すのみ明ては

暮れを待ち暮れてハ明を待のみの楽し

さ、昨日よりも今日の風は朝来非常の烈し

さ下甲板に時々打揚る大波は正午前より

上甲板迄にも越揚て波の音風の音すさまじ

ともすさまじく覆布の大ズツク<sup>134</sup>の太綱か

切れるやら木材が打おられるや船か殆ど右舷

の沈む様にかたむくやら朝食昼食にはテブル<sup>テーブル</sup>

に態々柁を用ひる迄の荒方なり正午過スマトラの島

に近づきて風漸く静かに趣きしも夕方迄には又其勢

を

盛返したり明日は少しハ波も

穏かになる頃ならむと船員のかたるを聞く

六月八日 日曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

食堂に柁を用ひたる只昨日のみなりしも

今日も波浪の高さなかくに衰へ来らす

上甲板に打越す回数尠からず、

船に弱き余も何となく海の様に興味

生して少しも船暈を催す事なく

終日デッキに在り少しは読書さへ試る

事あり、

船は兩三日にして紅海に入るべければ

洋域次第に狭り来たれば航行の船

に會する事少なからず、

六月九日 月曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

此所ポートサイドに碇泊する事の長時間

間なりせばカイロ迄陸行してエジプト<sup>(エジプト)</sup>

遺物の一半のみにも接し度く望みしも

とても其の時間の生せさ<sup>(後?)</sup>事船員の語らる

ゝに余は明<sup>(後?)</sup>年、帰朝の途を此の道にとり

ポートサイド<sup>(ポートサイド)</sup>寄港して一月間位此地に遊ぶ

尚印度に上陸して一句或は半月を彷徨

ひてエジプト藝術と印度藝術の關係

に就て研究を試むに両者の文明上に就て

少しハ得る所の智識も加らむ<sup>〇</sup>と思起し

ぬ若しこれを得むとせハ幸甚なる<sup>(べからず)</sup>

亜米利加經由を断念せざる<sup>(べからず)</sup>

六月十日 火曜

【欄外右側】

六月十九日記

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝来少は波浪の衰へたるを見れと尚蒼浪の高きを見る、正午に近き過ぎ船はアデンの沖近く過ぐ夕方に入りて波は次第に勢失し来る、夜バベルマンデブ海峡<sup>136</sup>を過ぎて愈紅海に入る、

印度洋は今貿易風の期にて今回の如く往々烈げき浪の海と化する事あるも多くは普通只風に向て進むのみにて却て暑熱烈しからすこれに反して紅海は風絶へて兩岸沙漠の熱気に苦しませは過ぎるを得ず、然し地中海へ入る迄僅か数日なるのみ

六月十一日 水曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

暑き思寒き思は旅の興ならむ波の荒るも静かなるも亦旅の思出たらむのみ、此回の印度のゲキ浪もかつてなき荒海の旅の味を覚へて思出深からむ、

紅海の暑熱は覚悟の程なりしも印度洋の暴風の影響を受けてか紅海上常に涼々たる向風に會してスエズ通<sup>(スエズ)</sup>過迄殆と毎日心地よきほどの涼しき

日のみ送り、印度洋の浪に苦しめられし不快なる心地も紅海に入りてハ全く愉快なる船旅を洋上に楽しむのみ、

六月十二日 木曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

数日後ポートサイドに寄港すれハそれにてロンドン迄は寄港の港もなく最終の物珍らしき上陸を楽しむ事尠からず、少しはエジプト記念の珍物ても聞<sup>?</sup>くものありやなど考ふ事時、ポートサイドに投函すべく書信を数通かく暑熱あまりに烈しからされは気分も引しまり来りて読書するのも興味多し、日本出発以来非常に時の経過きたる心地す、

六月十三日 金曜 (記入なし)

六月十四日 土曜<sup>137</sup>

【天気・寒暖・予記・本文欄・欄外右側】

午前早起すてに遙に右岸兩舷に当りて遙に山影を見る兩岸次第に近づき来りて山質土砂粘岩にして一つの青草緑樹を見ず、茫茫連々たる山脈廣くつゝきて遠き<sup>ママ</sup>所<sup>(連なる)</sup>空に連らるるを思ふ、

135 アデンはイエメン南部の港湾都市、あるいはアデン湾のこと。

136 バブ・エル・マンデブ海峡。アデン湾と紅海とを分ける海峡。

137 六月十四日分の日記は、六月十四日欄から六月十三日欄の右2/3に続けて記入されている。

昼すきスエズ港を遠望するを得港外に  
投錨すれば市街近く、碇泊する船数隻、  
土人の土産物など持込て客を求むるあれと  
木低買求むるほどのものなし、

午後四時出帆なり↓の事、<sup>□</sup>荷揚などの  
都合にて、午後八時、満月の運河の水に  
影す頃途々船は河口に進む

【六月十三日欄の天気・寒暖欄・予記・本文欄（右<sup>1</sup>/<sub>3</sub>）】  
船は夕食後前除々としスエズ運河に入る河口市  
街の傍に多くの天幕を張りたる野衛の軍  
隊を見る、

運河は十五夜の満月静く昇りて茫茫たる  
半砂の漠野東空は月に光りりて西空  
は尚紅に染み残りて高く清光の星は  
輝く、

六月十五日 日曜<sup>138</sup>

【六月十五日欄の欄外右側】

六月<sup>□</sup>十三日の欄に記入

【六月十五日欄の欄外上側】

<sup>□</sup>

発信、

青の、

自宅、

大原、

柳井、

ハカキ

ニダース

【六月十三日欄の予記・本文欄（左<sup>1</sup>/<sub>3</sub>）】欄外左側  
早起すれば両岸高く堤只一つの見るべき物象  
なし、船は進みて<sup>□</sup>左舷に見る停車場に近づく  
頃より両岸限りなく廣く敷れたる野衛の兵  
隊を見るこれ欧乱の残影にして尚数多千の陣影  
は当時のま、<sup>□□□</sup>備を守る、あり、

八時過ぎ<sup>□□</sup>ポートサイドの町かけ眼界に入る、  
【六月十五日欄の予記・本文欄】欄外左側  
午前九時余、<sup>（ポートサイド）</sup>ポートセツドに着  
投錨、直に上陸、此地は別に訪観  
すべき地もなければ同船の諸氏と共に  
に廣くもなき市中を往復して  
各土産物などを賣る商店に立寄り種々の買  
物を試みんとするも先年余の訪れたる期に比し  
て物價の非常に高價なる<sup>□</sup>一驚す、午後、  
六時出帆の事なれば、とて一同と五時過帰船す、  
<sup>（エジプト）</sup>エジプトの寶玉遺物などの発掘品に模したる珍  
らしき小品多々あり、布及金箱、石など買求  
めて帰る、カイロ辺にて至れば何か面白き品も見  
出し得るならむか

【六月十五日欄の予記・本文欄】欄外左側  
午前九時余、<sup>（ポートサイド）</sup>ポートセツドに着  
投錨、直に上陸、此地は別に訪観  
すべき地もなければ同船の諸氏と共に  
に廣くもなき市中を往復して  
各土産物などを賣る商店に立寄り種々の買  
物を試みんとするも先年余の訪れたる期に比し  
て物價の非常に高價なる<sup>□</sup>一驚す、午後、  
六時出帆の事なれば、とて一同と五時過帰船す、  
<sup>（エジプト）</sup>エジプトの寶玉遺物などの発掘品に模したる珍  
らしき小品多々あり、布及金箱、石など買求  
めて帰る、カイロ辺にて至れば何か面白き品も見  
出し得るならむか

【六月十五日欄の予記・本文欄】欄外左側  
午前九時余、<sup>（ポートサイド）</sup>ポートセツドに着  
投錨、直に上陸、此地は別に訪観  
すべき地もなければ同船の諸氏と共に  
に廣くもなき市中を往復して  
各土産物などを賣る商店に立寄り種々の買  
物を試みんとするも先年余の訪れたる期に比し  
て物價の非常に高價なる<sup>□</sup>一驚す、午後、  
六時出帆の事なれば、とて一同と五時過帰船す、  
<sup>（エジプト）</sup>エジプトの寶玉遺物などの発掘品に模したる珍  
らしき小品多々あり、布及金箱、石など買求  
めて帰る、カイロ辺にて至れば何か面白き品も見  
出し得るならむか

【六月十五日欄の予記・本文欄】欄外左側  
午前九時余、<sup>（ポートサイド）</sup>ポートセツドに着  
投錨、直に上陸、此地は別に訪観  
すべき地もなければ同船の諸氏と共に  
に廣くもなき市中を往復して  
各土産物などを賣る商店に立寄り種々の買  
物を試みんとするも先年余の訪れたる期に比し  
て物價の非常に高價なる<sup>□</sup>一驚す、午後、  
六時出帆の事なれば、とて一同と五時過帰船す、  
<sup>（エジプト）</sup>エジプトの寶玉遺物などの発掘品に模したる珍  
らしき小品多々あり、布及金箱、石など買求  
めて帰る、カイロ辺にて至れば何か面白き品も見  
出し得るならむか

出し得るならむか

六月十六日 月曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

ポートサイドは昨夜七時過出帆海上小波を見るのみ  
の静かさ愈々船は地中海に入りぬ

138 六月十五日分の日記は、六月十三日欄の  
左<sup>1</sup>/<sub>3</sub>から六月十五日欄に續けて記入され  
ている。

四方茫茫たる大洋なれと印度洋

なとに比しき何時となくなつかしき

心地して海の色も空の色も夏の色光も

何となく優れて観ゆ、

地中海に入れば行□手遥に見渡す事

も得されとも、神話期の名残の所多く

限りなき空の彼方に隠れて見へめも何と

なく身のかつて黄金時代の物語に加り

たる心地す、気温は昨日よりも一層下降

暑を感じせず

六月十七日 火曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

昨日はギリシヤの沖を航行す此船のマルセ

ーユに寄港せされは垂非利加の葎岸近く地中

海の南方を行く此日終日□一つの島かけ

一隻の船体を見す 只坦々たる水の上を船は

かろき風に迎へられて軽く行くのみ、

外気、冷気を加へ来れば船客のデッキに

出つる人次第に少なくなりて殆ど半日は船

室に話合ふ様になる

ロンドン上陸及入国手続となかくに面倒らし

く再び佛国への入国手続などの事なと思出し

て少々嫌な思を起す、

六月十八日 水曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝来冷風漂々として起るもそは只船航の速力により、

生する空気の抵抗のみ、海波一つの起るなく見渡す

限り洋々たる緑藍の水面のみ昨日以来気温は

とみに下降して七十余度となる、白衣の装を

更へてチヨキさへも着するを要す、両三日前

より少し喉を痛めて気分悪しかりし□□□も

今日頃全く快□□に帰す、上甲板の籐椅子に

よるは已に寒冷を感じる位にして殆ど

下甲板にてゴルフをなすの外は船室に諸氏と談

笑するのみ、最早やロンドン迄は旬日とせま

り来る上陸の事なと思出て、面倒な□□事と

想像す、

六月十九日 木曜 二十一日 土曜

【六月十九日欄の外右側】

廿一

【六月十九日欄の外上側】

二十二日記

【六月十九日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

地中海の波は実に静雅にして毎日只船中

に在るを忘れて全く陸上の生活に在るか如し

印度洋の旅を思出してハ実に快味限りなし

朝に多く床を起き出て、甲板に登るも涼気

を感じる位にて最早白服の用なき事と

なりぬ 船客の持合せの書籍など借読

みて時を過す、

此頃は一日中比較的多くの時間船室に在りて同室の人と□語合ふ事あり夜など他室の人々も加りて毎夜を深ふする事例となりぬ、同室の人々は山田国民記者と

【六月二十日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

東京御木本真球(真珠)の加藤虎之助氏とコロソボにて青野氏と入更りて乗船されたる西村氏(江商々會重役とか)、

各語合ふ話題は各方面に渡りたるものなれと多く時の過ぎるを悦ぶ様の談合のみ、

他室より来る人に平塚農学博士と

□小笠原子爵あり各年若く

ロンドン留学の士なり、

其他海軍主計の二村光三氏140もあり

山田氏を大低中心として話しは湧き出て、

【六月二十一日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

時に生欲上の問題に走る事尠からず

山田氏としてハ多く政治を語らるも

余としてハ多くの興味を持す不能

其他西村氏の珍話を語る事ある

外総て残りの諸氏は寡言なり、

あまりに海の静穏につゝ、きければ旅の日数の

経重なるも意とす所なく尚一ヶ月は

こんな旅なれば続けて興ああき来る

様の事なからむと思ふしかし

ビスケーの海を思出せば想像せはロン

ドンの着港を楽しむものならむと思ふ

六月二十二日 日曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

正午後ジブラルタルの頭南島形

を右舷遙に望む全山要塞の完

備□現る、地中海を出れば潮流加りて

風なきも□波起る様の心地す

風は地中海以来殆ど同じ追手なり

タリファの辺は岸に近く航行せるため

市街城砦の様接見するを得、

午後船は次第に少しつゝの動揺を

加へ来りめ、トラファルガー(トラファルガー)を過ぎて、大西

洋の波に揺られて船は夕空照の空を

追ふて西北に走る、

【欄外左側】

此の日頃一日三百哩の航程数度あり、

六月二十三日 月曜 二十四日 火曜

【六月二十三日欄の欄外上側】

七月

十一日追

記

【六月二十三日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

船は愈ビスケー湾の航路に入る風浪の益し来り

て再應印度洋の荒しを偲はしめ来らむと

す、ビスケー湾に入りてより往來の船舶

139 江商株式会社の西村磯右衛門。兎島の住所録に名前があり、山田「戦後の欧米漫遊記」(前掲注126参照)五一頁でも氏名が確認できる。同書には、江商の中尾優も西村とともに乗船したことが記されている。

140 山田「戦後の欧米漫遊記」(前掲注126参照)には「二村海軍主計少監」とある。

141 タリファ。イベリア半島最南端部、ジブラルタル海峡に面する町。

142 トラファルガー岬。ジブラルタル海峡西端の岬。

に會遇するもの多く欧州近き旅を思はしめ来る

長かりし航海も後数日にて終らむとす日本出發の時數多用意せし写生道具も何の

用をも成さず全く呑気なる間に式ヶ月を終りたる事を残念に堪へざるもせん方なし幸に船旅の平安なりし事を思へはこの二ヶ月の取戻しは着欧後奮闘すれば□差引

【六月二十四日欄の天気・寒暖・予記・本文欄】

の就さる事もあらざるべし

明後日は或はロンドンに着港すべきやも

不計との事なりしも 昨日より向風の

度加り来りたれば先日中三百哩も航

せしものかやつと式百五十哩位より進む事

不能との□なればとても廿六日に着港

は不可能ならむ一通トランクなど整理

する必要もあれば室の荷物のかたづけ

及 Baggage room<sup>(Baggage Room)</sup>のトランクを引出して

荷物の詰更をなす

六月二十五日 水曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

昨日より波は如何程か静まりたる様なれとも

風も尚衰へず船の進航例日の如し、

船中常に無聊に苦しむも如何ともなす事

なく、読書せんにも面倒なる書籍を手

する事不能、船中誰彼れの読さしの

小説単本など手にまかせて読破するのみ

コロンボより乗船の西村氏河原賀市君

の知人なりと云ふ夕食に碎ふてなかく

滑稽を演せらるゝ事あり

明日の昼頃迄にはビスケー湾も通過すべ

れは船の味も覚ゆる事は今日明のみ□となる

六月二十六日 木曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

愈明日中には英国に上陸出来得べし何と

なく重荷の下りたる様の氣持す、

六月二十七日 金曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

早朝より右舷に遥か佛国の陸平

の見ゆ、これ或はノルマンデー<sup>(ノルマンデー)</sup>の辺ならむか、

正午頃に入りて船の進むに従ひ左方に

英国の陸を眺めてドーバーを過ぎてよ

り船は進てド<sup>(ド)</sup>バ<sup>(バ)</sup>テムズに入りぬ、

午後六時頃サウザンプトンの岸に着此所

にて旅券の検査及、荷物の検査を終

り上陸、八時ロンドンに向ふべき特別

列車ありてこれに乗して一時間余にしてロ<sup>(ロ)</sup>ン

トン、サントパン<sup>(セント・パンクラス)</sup>ク<sup>(ク)</sup>ラス停車場に着一行と

ときわ料理店に到りて夕食をなし夜晩く

イウストンロード<sup>(ユーストンロード)</sup>のオックスホテルに投宿す、

六月二十八日 土曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

木村山田小笠（小笠原）の甫三氏と共に同道正金145に至る、日本よりの為替金五〇〇受取、後一行と同道、佛国領事館に旅券証明を受く後、ローヤルアカデミーを観る、前回の時かつて見を得ざりしか想像通り殆ど見るべきものなしサンジヤンか描きし戦士の図も何の價値なくブランキグイン146の出品なきは非常に物足なき心地す、夜は早々宿に帰りて床に就く

此日午後四時過ベルサイユにて平和條約調印済となれりとの号外出づ

六月二十九日 日曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

午前一人にてナシヨナルガラリ（ナシヨナル・ガラリ）に參觀す、午後、セントパンカール停車場（セント・パンカール）に來り預置きのトランクを宿に引取る、木村氏と明日佛国に向て同行を約しウオタロー停車場に至りて切符を求む。ドーバカレ（ドーバ・カレ）の線も、フォクストン（フォーク・ストーン）、ブローニヌ（ブローニヌ）の線も公用の人のみに限られ旅行し得るも一般はサブサンプトン（サブ・サンプトン）、ハーブル（ル・アーヴル）の線を過るよりの外なし、

夕食をときわに來り、山田、小笠原、西村中尾（中尾）、木村の諸氏と会食す、

六月三十日 月曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝ピカデリーに近き骨董店に至りガラス瓶とペルシヤの皿の破片を求む、午後ブリテイッシュ・ミュージアム（ブリテイッシュ・ミュージアム）を參觀す、午後七時ウオタロー停車場発サブサンプトン（ウオタロー・サンプトン）に着したるは九時過なり此所にも旅券の檢非常に面倒なり十一時147発船佛地に向ふ

七月一日 火曜

【天気・寒暖・予記・本文欄・欄外左側】

早起すれば已に船は陸地の近148てありこれハーブル（ル・アーヴル）の港外なり七時着港又旅券の檢査要して九時発車、午後一時少し過ぎ巴里着、Boulevard de Clichy（クリシー大通）ブルバールクリシーの諏訪と云ふ日本人の經營せるホテルに今夜不取一泊する事となす、木村氏149、木村氏はハーブルにて一泊、「昼食を終へて直にグランパレーに趣くに尚サロンは昨日迄に閉場せずして來る日曜日迄延なりと云ふ何たる至幸！

144 木村半蔵。鬼島の住所録に名前があり、山田『戦後の欧米漫遊記』（前掲注126参照）一五頁でも氏名が確認できる。

145 横浜正金銀行のこと。

146 フランク・ブラングイン (Frank Brangwyn, 一八六七—一九五六)。イギリスの画家。江商株式会社の中尾優であろう。前掲注139参照。

147 諏訪ホテルのこと。諏訪秀三郎がクリシー大通で営んでいたホテル。着仏間もない日本人客が多く利用した。

夕方パントンテオの傍に宿を求見当る

七月二日 水曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝ガールサナザルの荷物を自働車に積

みて Place Pantheon の Hotel Des Grands

Hommes に運ぶ先ず一ヶ月滞在の約を

終ゆ、

午後諏訪ホテルの小荷物を運ひて

愈々巴里の客となりたる気持す、

午二時過大使館に趣く何れへも小生への

通信来り居らず聊か悲観の感を生ず、

七月三日 木曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

午前ルーブル参観絵画の室は殆ど

尚閉されて見るものなし

午後ルクサンブルこれも同前只

彫刻のみ参観せらるゝのみ

ルクサンブルの園何時見ても美し

とも美し

余の求めし室はパントンテオの右側にして

三階の前室なればパントンテオと前の廣

場の眺望よく日没の夕照堂上の

圓柱の辨に輝く頃日本で見られぬ偉

大なる感じす

七月四日 金曜

【天気・寒暖・予記・本文欄】

朝ベルネヘイムジャン及、シヨウビ

プチに趣く ジョーシプチにてドカの

デッサンの入札あり高價なるに驚く

七月五日 土曜

【欄外右側】

発信 小林、青の、自宅、山田芳

七月六日 日曜

【天気欄】

晴

【予記・本文欄・欄外左側】

午前十時朝のカッフェを終へてセーブルに

趣くべくポロワイヤル迄出かけたるも

開戦後渡止となりたるや川蒸気の停船場には

人影もなし乗合船は向岸に撃かれて古ひて観

ゆ電車にて正午前セーブルの棧橋畔のカッフェに

て昼食を済し陶磁器のミュー

ゼに趣く、此所にもエジプト、ギリシヤ、ローマン

の

古代の陶器多く列せらる、ペルシヤのものにも見

るべきものあり、日曜日なりしたため工場は休業

一度ジャルダンプラント迄帰りたるも此所ミューゼ

閉館再びセンの岸リユーードテヤートルに青山君の宿

149 第一次世界大戦中より閉室されたままであるということ。

150 エドガー・ドガ (Edgar Degas, 一八三四—一九一七)。フランスの画家。

151 山田芳三郎か。児島の住所録に名前があり、ロンドンの高田商会の関係者であることがわかる。大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』(大原孫三郎傳刊行会、一九八三年)七五頁にも同じ名前が見え、明治四十五年倉敷紡績に入社したとされている。

152 欄外上側に鉛筆にて「青山熊治」との書き込みがあるが、児島の筆跡ではない。セーブル陶磁器美術館か。

153 青山熊治(あおやま・くまじ、一八八六一—一九三二)。洋画家。

訪ふ同氏不在夕食後滞室

七月七日 月曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

昨日山田西村の一行、巴里着夕方  
小生を訪問されしも小生不在なりし  
ため名刺を残して今朝早く是非  
案内に来て呉れとの事スワホテル  
に趣き午後より、オペラの附近を  
をうろつき夜リッセルの日本飯屋

はすき焼に趣く、

夜オリピヤを観る

七月八日 火曜

【天気】

小雨

【本文欄】

朝ルゾル及ルゾルマカザン  
による、午後ルゾルミュージーゼ  
を観る、夜日本飯屋にスキ  
焼を會食す

今日も案内して方々を馳  
廻る、

七月九日 水曜

【本文欄】

午前十時半山田、西村、中尾氏と  
共にベルサイユに行く午前  
中庭園に遊び午後大小の  
トリオノを見、後宮殿の各  
室を観る、平和調印のされ  
たる鏡の室を見る、  
夕方パリに電車にて返る、  
又日本飯屋に趣く、今夜オペラ  
に趣く苦なりしも一行の勞れ  
尠なからずして中止す、

七月十日 木曜

【本文欄】

ラモレルに趣きて金山君より依頼  
のトワルの件を傳へる、  
午後久し振りにて湯に浴し  
夕方食事後早く床に  
就く

此頃日脚なかくして九時半ならて  
は點燈する必要なく大低毎  
夜十二時を過ぎ一時に近づく頃  
就床するを慣とす、  
朝は八時頃起床朝のシヨコラ  
大低十時前後となる

七月十一日 金曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

青の、

妻、

【本文欄】欄外左側

朝ギユスターヴ・モロー<sup>155</sup>のミュゼに趣

く此所は故人が住宅の後にして

レツドシヨセ<sup>(rez-de-chausée 一階)</sup>の両三室と二階三階

の画室に使用せし廣き両室に

全く空間なく直に多くの遺作

品を陳列したり完製のものも尠

からされと未完のもの多あり七百

のタブローと四千400近きデッサン

は故人が逝きし時の俣に此画室と

共に永遠に保存されんとす偉と

云ふべし

午後ミュゼ、ギユメ、及ミュゼガラリレアを観る、

七月十二日 土曜<sup>156</sup>

【予記欄】

来信

青の、

妻

【本文欄】

朝 rue de Theatre に青山君を訪問す

昼食後同道して Billancourt

都鳥<sup>157</sup>、廣瀬氏<sup>158</sup>を訪問す、

夜十時過迄話込て帰宅す、

明後日は14 Juliet なり今年

戦捷□共盛大なる事ならむ、

今夜あたり方々の辻々にて奏

楽してしよぼく雨の降る中を

男、女の群かしきりと舞愉を

試みて夜を深して居る

七月十三日 日曜

【予記欄】

発信

青の、自宅、

柳井、斉藤、

ハガキ

二十四枚

【欄外右側】

金のことを申送る九月始送出の事<sup>159</sup>

【本文欄】

朝シヨコラを飲み一寸出かけ

て帰て正午迄青野君と妻とに

手紙をかく、

午後ルクサンブーにカル、ステユ

ラン<sup>160</sup>を展覧会を観る筆に於

て壮なるも、色調に快味を覚へす

155 ギユスターヴ・モロー (Gustave Moreau, 一八二六—一八九八)。フランスの画家。

156 欄外右側に「リュードチャートル」、欄外上側に「都鳥(トトリ) 英喜 広瀬勝平」との鉛筆での書き込みがある。児島の筆跡ではない。

157 都鳥英喜(ととり・えいき、一八七三—一九四三)。洋画家。

158 広瀬勝平(ひろせ・かつべい、一八七七—一九二〇)。洋画家。

同日予記欄の「青野」と引出線をつないでいる。

159 カロリュス・デュラン (Carolus-Duran, 一八三七—一九一七)。フランスの画家。

160

160

160

肖像の表情何れも俗悪なるを  
悲しむ、午後ハガキ二十四枚手紙  
なとかく夕方迄エトワル(エトワール)よりコンコルド  
迄明日の支度を大観するため散歩  
す

七月十四日 月曜

【本文欄】

14 Juillet 朝九時過コンコルド迄  
出かけたシヤンゼリゼの凱セン式は  
人群の遙に馬上の兵士や剣の先  
の旗か見へる位であつた人出は沢山  
て乗物なと殆とと絶(途絶)、夜色火  
花□火なとあつた  
パンテオンの側でも五臺のサー  
チライ(ト)とを発動させてパンテ  
オンの堂上(堂上)に赤き色火を燃て  
なか／＼壯観であつた十二時頃眠につ  
く迄外は尚騒然たるものであつた

七月十五日 火曜

【天気欄】

曇

【本文欄】

午前近所を散歩した、  
午後、二時バルトロメ氏を訪  
幸在宅数刻話して帰つた

極親切そふな老人である  
日本から携へ来た竹根の印  
を贈た非常に悦て居られ  
た、夕方迄ふら／＼と散歩  
したボンマルセ(ボン・マルセ百貨店)に寄てアラ  
ブの布を買た、  
ノートルダム(ノートルダム)の附近を歩廻た  
夜今日買た布の手入をした

七月十六日 水曜

【本文欄】

朝ラモレル(ラモレル)に行絵具箱の小さきもの  
及額縁(額縁)なと求む、  
午後ブルベートル(Boulevard des Italiens イタリア大通)イタリアンの方  
に出かけてベルンヘイム(ベルネーム・ジュヌヌ画廊)、ジヨルジュ  
ブチ(ブチ画廊)に趣たるも何の展覧会  
もなし夕方宿に帰る

七月十七日 木曜

【本文欄】欄外左側

午前ルクサンブル公園(ルクサンブル公園)を中心として  
其附近に借部屋なきやと尋ね  
廻る大きな画室(空室)の明たるものあれ  
となか／＼立派すぎるらし、  
午後も三時頃迄歩廻た、  
朝ルクサンブル(ルクサンブル宮殿?)の日光に輝く  
緑葉紅花の清香心地よし

夕方一時間ほとルクサンブルの  
公園内に憩ふ夕日の没せん  
とする噴水の池水暗くなり行  
てパンテオの堂殿紅に窓硝子の黄金  
に輝く頃さても美しき所なり

七月十八日 金曜

【本文欄】

朝ルクサンブル公園に写生に  
趣く殆と三四ヶ月振りにて油  
絵具を手にした

午後ルーブルにエジプトロー  
マ、グリーキの硝子壺の写生  
に出かけ、ベルジヤルティエール百貨店  
に寄る

七月十九日 土曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

暑気を  
感ず

来信

加藤

【本文欄】予記欄右端、欄外左側  
朝ミューゼカルバレを觀ユーゴー  
の住宅を訪れた、

カルナヴァレ博物館にては石器時代  
及ローマ時代の遺品最も趣味  
深し、ユーゴーの生活を偲ひ  
て甚た廣潤なる趣味に驚く  
然して其家具を自分にて調  
製せしものなど或はデッサン写生  
などに独特なる描法のほとこされ  
たるに感ず、  
午後コルラツセニ、クロッキに趣く  
午後七時迄  
夜、青山君来訪

七月二十日 日曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

冷気を感じる  
発信

加藤

自宅

【本文欄】欄外左側

十時過青山君を訪問昼食  
後同道してレビアンクールに  
都鳥、廣瀬氏を訪問し同道  
してセン川の中洲に写生行く  
夕餐を共にし十時帰宅  
セン川岸か洪水にて土くづれ

161 仏語の Breque または英語の Greekであ  
らう。

162 鉛筆にて引出線がつけられ、「壺」と書き  
加えられている。児島の筆跡ではない。

163 ヴィクトル・ユゴー (Victor Hugo, 一八  
〇二—一八八五)。フランスの小説家、詩  
人、劇作家。

164 ヴィクトル・ユゴー邸 (博物館)  
165 「アカデミー・コラロッシにクロッキに  
赴く」の意であろう。アカデミー・コラ  
ロッシは私立の美術学校。

たる辺ガラス瓶の破片数多捨  
られて各片表面に風化したる  
美しき輝きあり何時頃の時代の  
ものなるやエシプト(エジプト)、ローマ朝の破片と  
殆ど同時代のもの、の如し  
最も美しき一片を持帰る

【欄外左側】

バルトロメ(バルトロメ)氏166

留守中に来訪せらる

七月二十一日 月曜

【欄外上側・予記欄】

発信二十二日書留、

大原、金山

大原へ九月十日迄  
の送金の事を  
申送る、

金山(カンヴァス)カンパス代取替

九百五十法送金の  
事を申送る

【本文欄】

朝、ヘルネーム(ヘルネームIIジュヌ画廊)ヘクルべの  
展覧會168を観る、マドレン(マドレーヌ寺院)の横  
の骨董店に支那の物を陳列  
してあつたか別にほしそふなもの

なし

正午前コントワールナシヨナレデラ  
マントにて一〇〇〇の分の為替169を受取  
午後入浴ラモレルに金山君の(カン)カ  
ンパス代九四八法を取替支拂、  
夕方迄クロツキ

七月二十二日 火曜

【予記】

来信

山田

青の

【本文欄】

朝少しかたつけて居つたら十一時  
頃になつた朝のカツフエを抜にし  
て昼食を済してベルシヤルデニエ(ベルシヤルデニエII百貨店)  
に洋服の着合せに行つた  
午後、クランシヨミ(クランド・シヨミエール170)へにクロツキ  
に行く  
夕方より雨降り外出せず手紙など  
かく

七月二十三日 水曜

【欄外右側・天気・寒暖・予記欄】

来備

青の

166 鉛筆にて「バルトロメ？」と書き添えら  
れている。児島の筆跡ではない。

167 ギュスタヴ・クールベ(Gustave Courbet,  
一八一九—一八七七)。フランスの画家。  
168 ヘルネームIIジュヌ画廊で開催されてい  
たクールベの個展を観覧したものと考  
えられる。

Exposition Courbet, Galerie Bernheim-  
Jeune, Paris, Jul. 18-31, 1919

169 鉛筆にて「為替」と書き添えられている。  
児島の筆跡ではない。

170 アカデミー・ド・ラ・グランド・シヨ  
ミエール。私立の美術学校。

発信、

武内、三橋、

三宅専<sup>171</sup>、原田

都志、

来信矩一、

【本文欄】

昨夜半床に就てより急に腹痛にて

醒め二回便通（何の原因たる<sup>?</sup>と不知）

朝トロカデル<sup>(トロカデル)</sup>迄出かけたれと氣

進まずして帰る<sup>?</sup>昼めしを抜

として午後クローキ<sup>(クローキ)</sup>に行く、

夕方より少し心□よくなる、

午後都鳥、廣瀬氏来訪され

しも小生不在

七月二十四日 木曜

【予記欄】

発信、矩一

廣瀬

今日も午前中

より少し腹

の痛みを感じ<sup>?</sup>

昼食を抜

き<sup>?</sup>にす、

【本文欄（欄外左側）】

午前十一時四十五分の列車にてシャトール<sup>(シャトール)</sup>

チエリー<sup>(チエリー)</sup>に向ふ最急行にて一時間に

て達すマルン川<sup>(マルン川)</sup>の架橋の切断

されたるとホテルトビルの<sup>(Hotel de ville 市庁舎)</sup>廣場の辺

など最も無斬な家屋の破壊及焼

燃されたるを見るアマンチヤン<sup>(アマンチヤン)</sup>氏幸

に在宅氏の邸宅も殆ど総ての窓硝子の

のなき迄に破損し他に物置などの塀

の壊れたる所多し此所へ来て見れば

始めて戦後の悲惨を目前にする事

を得独逸捕虜の数多勞役せるを見る、

午後四時発の列車にて帰巴<sup>172</sup>、

七月二十五日 金曜

【寒暖欄】

寒し<sup>173</sup>

【本文欄】

朝木村氏をホテルミラボー<sup>174</sup>に訪ふ不在

午後二時帰宅、

山田氏兼訪伊太利より昨日巴里に

歸られたる由午前中に来訪

さる、

三時訪問し共にボンマルセ<sup>(ボンマルシエ百貨店)</sup>に

同道す、夕食後帰宅

171 三宅専一か。大原孫三郎傳刊行会編『大原孫三郎傳』（前掲注151参照）七五頁に、明治四十年倉敷紡績入社者として名前が見える。

172 「パリ（巴里）に帰る」の意。

173 印刷された「寒暖」の文字のうち「暖」に取り消し線を引き、「し」を書き足すことで「寒し」としてゐる。

174 児島の住所録には「木村半蔵 Hotel Mirabeau, rue de la Paix, Paris」云々。前掲注144参照。

七月二十六日 土曜

【寒暖欄】

□

【予記欄】

来信

中尾?

【本文欄】

朝山口女史を訪問しアトリエ

の明たるものなきかと尋ぬ

午後三時、山田氏を訪問し

氏のロンドンに出発をガルサナ

ザール(Gare Saint-Lazare)に送る、

克蘭シヨーム(サン・ラザール駅)エ(アランド・シヨーム・エール)に夕方趣くも

モデル面白からすルクサンブール(ルクサンブール公園)

ルの写生をなす、

七月二十七日 日曜

【予記】

発信

炭谷

【本文欄】

午前十一時ルクサンブール(ルクサンブール駅)停車場より

Seauxに向ふ四十分にして達す

都の生活から久し振りに田舎の

空気に接して矢張は呑気な

閑静な田舎に限る何を苦し

むて都に住むのであろうかと思ふた

附近を大分散歩して一枚スケッチ

を試みて午後四時帰寓した、

昨夜少し□(熱?)かあつたかよく眠られ

なかつたので今日は少し勞れて居る

様である夕方一寸夕食に出て帰る、

七月二十八日 月曜

【予記欄】

Janssen

発信

来信 原

【本文欄】

朝晩く出かけてペルシヤ陶器の破片と

コブラン織(コブラン織)の断片を求む

午後クロツキーに趣きラモレ

ルにて画室の明きたるものある

やも不知との事にてフアギエー(フアギエー)

ルの方面を散歩す、なし

ガールノール(Gare du Nord 北駅)に行き汽車の時

間表を求むベルギー行のため

夜早く就床、

山口青山君など留守に

来訪さる、

七月二十九日 火曜

【本文欄】欄外左側

朝画室の事につきて山口嬢の所に趣く大低借入れ得る事なれとコンシエール(Concierge 管理人)ジュの意中不明なる点あれば直に借入る事を見合す、午後、ルーブル(ルーヴル美術館)に行きVerre(ガラス)のスケッチをなす、夕方帰宅後スケッチに彩色などしてクロッキーに行暇なく日暮る早く床に就き新聞を読む風邪の気あり、

七月三十日 水曜

【本文欄】

朝画室約策のため

No18, rue Ernest Cresson に趣く十月より三ヶ月分三百法支拂、別にコンシエール(Concierge 管理人)ジュ百法世話話を呉れとの事これは先方より申出すべきものならざるのみか百法とは法外なる金なれと先づ支拂置く事となす、午後、久し振に浴湯に行く(クロッキー)クロッキーへ寄り、夕方

近所にマダムルロア175を訪問す、

七月三十一日 木曜

【本文欄】

朝ルクサンブル停車場に写生に出かけた、何か構図の材料にもと鉛筆スケッチをなす、色は午前も美しけれどパントン(Conte, 逆光)を望む方面はコントルシユールにて裝飾風のものには不適當ならむか、午後ミユゼギユメ(ギメ美術館)に行くローマンの古き布模様(リュクサンブル公園)の模写をなす、夕方再びルクサンブルの写生に趣く

八月一日 金曜

【欄外右側】

送金を催促する事 青野兄へ

【予記欄】

来信 木村、山田、山田、加藤、発信 今日腹痛のため 終日何もせず

175  
ルロワ夫人 (Madame Arthur Leroy de Borgard) は児島が第一次渡欧時に滞在した下宿の主人。ルロワ家の下宿は、藤島武二はじめ日本人画家が滞在したことで知られる。

終た

【本文欄～欄外左側】

朝田故コラン先生の妹さんの住所を聞  
くため Rue de Vaugirard の旧宅を訪ね  
んとして出かけた出かけから少し変て  
あつた腹部が非常に痛を感じ  
て便通を催して来た中途で帰宅する  
事にした昼食を見合して一時間  
ほど眠た三時頃西村中尾氏来訪  
された同道して出かけたいかとうも腹  
か安かたないのて失敬した  
先般案内した謝礼たとして金を置て  
行かれた其の金て夕方兩人に送るべきピン  
を式本買た、

八月二日 土曜

【予記欄】

来信

Ja □ □ □ □ 178

【本文欄～欄外左側】

朝 Vaugirard の旧コラン先生のアトリエ  
に行き妹さんの事をコンシユールシ  
ユに聞く妹さんは長い間リユマチ  
か神経痛にて就床の処、昨年  
終に永眠一ヶ年程経たる由妹さ  
んからは手紙を頂た事がある実

人生不常一、

コラン先生の東洋品コレクションはリヨンの  
ミユーズに買取たらしく遺作品は  
も共に妹さんの存命中それく賣

渡して始末つきたる由、

午後ミューゼギユメに布の模写に行き夕食後、  
Pigalle に西村氏を訪れピンを渡す

八月三日 日曜

【天気欄】

晴

【寒暖欄】

1 ?

【本文欄～欄外左側】

朝カバンのかたつけなとして遅く  
なつて十一時頃よりカールドノールに  
行きモンモランシー行きの切  
符を求め十二時五分発アンフエン  
にて乗換総て三十分間にしてモンモラン  
シーに着町は丘上にしてサンジャク  
ルローの住地たりとて其の住宅は  
今、住人ありて参観させず町役場  
にルソーの遺物あれと見るほと  
のものなし写生箱を持行たるも  
写生する所なし日曜日の人出数多にし  
雑騒を極む午後六時電車にて帰巴

176 ラファエル・コラン (Raphael Collin, 一八五〇—一九一六)。フランスの画家。黒田清輝の師として知られる。

177 ブランシュ・コラン (Blanche Collin) 七月二十八日の予記欄に対応する人名であらう。

179 ジャン＝ジャック・ルソー (Jean-Jacques Rousseau, 一七一二—一七七八)。フランスの哲学者。

八月四日 月曜

【本文欄】

朝ルクサンブル公園のスケッチ  
に出かけた

昼食の頃から又腹痛か起て

便通を催した昼食をそこく

によして 午後ロダンの遺作品

をホテルBiron<sup>181</sup>に集めたものか

今日開館式があつて後一時

より公衆に観せるとの事行く

筈であつたか勇氣な□

夕方クロッキーに趣き夕食後

續の散歩をして帰る、

八月五日 火曜

【本文欄】

今朝は醒たのか九時半であつた、

出かけたのか十一時て朝のシコラ抜き

クリニーの傍のP.E.□□□のレストランで

二法半の食事をして電車にてミユセ

ギユメに行く又何たか腹か変て

あるからよして帰ろうかと考へたか今

日始めて支那のコレクシヨンか見へるからと

入館した餘り感心す品なし、

遂に階上に昇り古布の模写を

なす、夕方帰寓外出せず、

パンテオンのデッサンを試む、

八月六日 水曜

【予記欄】

発信 柳井 岩村、

来信

中尾氏

Decoyleの壺を求む

辰沙<sup>(辰砂)</sup>



【本文欄】

朝ルクサンブル公園<sup>(スケッチ)</sup>に行昼頃グ

ラン・ブールヴァール<sup>(ジョルジュ・メソジエの彫刻)</sup>に廻た

ベルネヘイム<sup>(ベルネヘイム美術館)</sup>も其は同しくクールベ

午後Hotel Biron<sup>182</sup>なるロダンの遺

作品のミユセを觀るロダンの

殆と総ての作品及其初期後期

のものを比してロタンは全くの凡匠

であつた、只表面しか觀察し得ぬ

しかも総ては至て優弱なる技巧家て

あることを知たとてもミケランシロ<sup>(ミケランシエロ)</sup>の

如き巨匠と共に語るべき彫刻家て

はない 夕方ルクサンブル<sup>(ルクサンブル公園)</sup>に写生に趣く

180 オーギュスト・ロダン (Auguste Rodin, 一八四〇—一九一七)。フランスの彫刻家。

181 ロダン美術館の開館のこと。

182 ロダン美術館のこと。

183 ミケランシエロ・ブオナローティ (Michelangelo Buonarroti, 一四七五—一五六四)。イタリアの彫刻家、画家。

八月七日 木曜

【予記欄】

発信

矩一、自宅、

来信

Conciergerie 管理人  
コンシエール

ジユ

【本文欄】

朝 Ernest Cresson の (Conciergerie 管理人) ロンシエール

ジユから画室の事か出て呉れとの  
手紙か着したので出かけた五階か

(貸し) 借せてもよいとの事なれば如何

との事、一應考へるからと云ふて

山口女史の所にて昼過迄話、

(タリユニー美術館) ミユゼクリニを観る、

中尾氏より依頼されたる地図を探し

にオペラの辺迄出かけた、なし、

夕方一寸ルクサンブル(リュクサンブル公園)に写生に

出かけた

八月八日 金曜

【予記欄】

発信

黒田先生

【本文欄】

朝早く西村中尾両氏来訪

地図と戦争記念写真帖買求

め度き由にて昼過ぎ迄方々案

内に同伴した

夕方ルクサンブル(リュクサンブル公園)にスケッチに

行た

夕方後スツローホテルの隣に

滋野男爵を訪問、<sup>184</sup>

夜シヤトレ劇場(シヤトレ劇場)に八十日間世界

一週(一週)を観る、十年前に此の劇

場にて見たる何日間世界一週とかと

何の撰ふ所なく何の新味もなし

八月九日 土曜

【予記欄】

発信

加藤

【本文欄】欄外左側

朝画室の事につき山口嬢来訪、

五階の画室の借主か画室に在る家具

を買て呉れ、は賣渡したしとの事

宿の主人に一通り價格を見積て

貰て高値でなけれハ引取る事と

せんと主人同道、道具はきぼ決し

て言値の式千法にてハ高からすとの

事千八百五十法にて買求む事

とする、午後、ループルに趣く、

夕方帰寓、硝子瓶の写生に色

彩す、夜、原九郎氏来訪夜半

184 滋野清武(しげの・きよたけ、一八八二  
—一九二四)であろう。男爵、パイロッ  
ト。

過迄語る、

八月十日 日曜

【予記欄】

発輪

加藤、平塚

【本文欄】

早朝、同宿のルロア君とCampigny(campagne)に至る水流の岸緑葉繁り

着佛後始めて欧州の田舎に

在る事を思ふ、

夕方迄同君の友人なとと會

談し夕食頃巴里に帰る、

夜、加藤君よりの国民新聞

を読む

八月十一日 月曜

【予記欄】

発輪

大原、青の

送金の事

黒

新聞と

雑(雑)□を郵送

【本文欄】

朝散髪す久し振りなり、

一昨日頃より暑気急に増し

て夏心地となる、

午後クロッキーに行き夕方迄

写生、帰りをルクサンブル

公園に行む、

夜暑さのためか睡気つき

た気の労れを感ず、十時前

就床、

八月十二日 火曜

【予記欄】

来信、

西村、

【本文欄】

朝少し読書す、

昨日より宿のカツフェを飲む事

にしたれは早く外出する必要

なし、

昼前モンマルトルのモーロー美術(モロー美術)

館(館)に趣く一日より十五日迄閉館

なる由、

午後、岡田氏185の所を訪る、夕方

久し振りに入浴しふらく散歩

して帰る

三四日前より食料品値下運動にて賑そふ

なり夕方路上にて菓実賣(果)と弥次の言争

185 岡田毅（おかだ・みのる）か。洋画家。児島の住所録に名前があり、住所は Rue du Sommerard, Paris V となつてゐる。

盛なるを見たり、

八月十三日 水曜

【本文欄】

今日も朝から暑そふてある  
絵具箱を携へてルクサンブル<sup>(リュクサンブール公園)</sup>  
に行く霧が包んでなかく、  
美しい腰を据へて考へて  
居る間に正午か来た、  
昼食後あまり暑いので室  
て憩<sup>\*</sup>て五時からクロツキに出  
かけ夕方帰る、

八月十四日 木曜

【予記欄】<sup>186</sup>

発輪

太田

【本文欄】

今朝青山君来訪ルノアール<sup>187</sup>  
の所へ作品購入の話に行きたい  
から同行して呉れとの事、  
早速出かける、ルノアール先生  
在宿、次の月曜日来れとの事  
昼前長谷川君<sup>188</sup>の宿を訪ふ  
午後宿に帰る、青山君と  
夕食を支那料理店に行  
き十時過頃帰る、

八月十五日 金曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

今日は何のためか日曜の如く休日である、  
金曜日だから何か宗教上の祝日  
か知ら、<sup>189</sup>  
午前中ルクサンブルにてスケッチ  
をなす  
午後オデオンのマチネを観る、  
(Le Grillon du foyer)  
今日もなかくの暑であつた、  
今晚は早く就床しようと思ふて  
居る所に岡田氏来訪十二時過迄會談  
す

八月十六日 土曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

発輪  
三宅、加藤、  
発信三原  
加藤君より

186 予記欄に鉛筆にて「長谷川潔(創作版画エッチング)」との書き込みがある。児島の筆跡ではない。

187 ビエール・オーギュスト・ルノワール(Pierre-Auguste Renoir: 一八四一—一九一九)。フランスの画家。

188 長谷川潔(はせがわ・きよし、一八九一—一九八〇)。版画家。  
同日八月十五日は聖母被昇天の祝日。

発送されし

藤島先生

よりの托品

来着す、

【本文欄】

朝少し読書して昼前出かけた  
昼食後ルーブルに趣く午後一時  
の開館に三十分ほど待ねはならぬ  
ぬのて帰宿、滋野氏を一寸訪問  
す、

午後読書と午睡をなす

夕方パンテオンの写生を試む

夕食後 Les Peintres

(Peintres)  
Impressionistesを求め

ルノアールの傳を通読す、

夕方前降雨ありて涼気を覚ゆ、

八月十七日 日曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

朝セン川岸にてスケッチをした、  
(セーヌ河岸)

午後読書して居る内今日

も又睡気催して一時間ほど

午睡した、

夕方の絵と夜の畫を少し描  
た

日本から一向発信か来ぬかと  
うしたのか知ら、

八月十八日 月曜

【予記欄】

発信

小林、金山、

今関、伊仙、

疋田、足立、

笹川、赤木萬<sup>190</sup>

小林寿、自宅

来信

原、

【本文欄】

朝青山君来訪先日約せし

如くルノアール先生の寓を訪

問す先生昨日曜日田舎に趣き

たるま、帰らすと云ふ

長谷川氏の寓に立寄り

支那飯を食して帰宿

青山君夕方迄在宿、

夕方パンテオンの写生を  
なす、

190

赤木萬二郎か。児島の住所録に名前ととも  
に「朝鮮平壤中学校校長」と記されて  
いる。また、児島は前年の中国旅行の際、  
赤木を訪ねていることが日記（一九一八  
年六月十二日、十五日）で確認できる。  
赤木は児島と同郷で、平壤中学校校長、  
平城師範学校初代校長を務めた人物。

八月十九日 火曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来輪吉田、

中尾

発輪 吉田

西村、

【本文欄】

今朝は早く床を出た、八時過ル〔リュクサンブル公園〕クサンブルグにスケツチに出かけた、

ラモレルに寄てスケツチ板と絵具

を買ふ 午後モテル〔モテル〕か来ると云ふ

のて待て居たか来なかつた

午後と夕方と夜と写生をなす

セザンヌ〔セザンヌ〕<sup>191</sup>の傳記を読だ

彼か殆と死る迄畫筆を握て居

た位彼は絶へざる勉強家て

あつた、

八月二十日 水曜

【寒暖欄】

晴

【予記欄】

来信加藤、

山田

Dr. Le Goff

178 rue du

〔Faubourg〕  
Faubg, Saint

Honoré

【本文欄】

朝窓の下のルーソー〔ルソー〕の銅像を写生

しかけたら二時間近く過ぎた、

昼食後藤島先生よりの托送

品か三四日前ロンドンの加藤君に

預て置たのか着たのでゴツプ氏192

の処に持参す不在、

直に帰宅、夕方頃、ルクサンブル〔リュクサンブル〕プロに

一寸出かけた、

パンテオンの夕照の写生をつゝける

僅の間しか写生する事か出来ぬ

八月二十一日 木曜

【予記欄】

発輪、藤島

満谷、

発信

太田、栗川

加藤、青の

岡崎、岡本

関、須藤

発信

平塚

191 ポール・セザンヌ (Paul Cézanne, 一八

三九一―一九〇六)。フランスの画家。

192 同日予記欄にある「Dr. Le Goff」(S)は、あろう。

【本文欄】欄外左側

珍らしく朝来降雨であるしよ  
ぼく雨の間を絵具箱を携  
へてセンヌ(セーヌ)の川岸に出た其間  
に雨は霽た川岸に土砂  
運ふ馬車と労働車(者)のスケツ  
チを試たる帰途をシヤルタン  
ドプラント(植物園)に廻り□石の標本室  
を観る化石の面白きもの多く  
あり二時過昼食午後窓外の  
写生をなす、「少し頭重し涼気  
の勢にや  
古布を買って洗濯をした、

八月二十二日 金曜

【予記欄】

来信 Golt  
中尾  
廣瀬  
発輪  
Golt

【本文欄】

朝ギユスターヴ・モロ(美術館)の見  
に出かけ昼迄、午後読書、  
夕方パンテオンの写生  
ギユスターヴ・モロ(モロ)の専心研究  
の深かりし事何処迄も自

分の藝術を自分か満足する

迄遂行して居る、テクニク

も如何なる事でも試みて居る

モロ(モロ)の描た様に裸体を取扱

て構図を試て見たいあんな気

韻のある裸体は同感である、

八月二十三日 土曜

【予記欄】

ブリストール(ブリストール)  
ホテルに行て  
自分の巴里着以  
前に来て  
居た、青野  
兄と矩一から  
の一通づ、  
の手紙を  
受取た

【本文欄】

午前中パンテオンの夕方画を  
修した、  
昼食後岡田氏の宅を一寸訪  
れてGolt氏の所か今日は午  
後來て呉れないかとの事  
にて出かけた、  
夕方写生出ようと思ふ  
たか今朝から又腹の加減か

よくないので加藤君から来た  
新聞を読た、

八月二十四日 日曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

(川口儀平氏の知友)

中沢彦吉<sup>193</sup>

氏等

【本文欄】

朝ルクサンブル(リュクサンブル公園)に写生に出る

今日日曜日なるも人少なし

四五の画人池の周りに写生を

なす、

昼食頃より青山君日本よりの来遊

者三人連194にて今余の宿を訪ひたる所

なりと云ふ、路上にて出會す、

午後ルーブルを共に參觀す、

八月二十五日 月曜

【本文欄】

青山君早朝来訪昨日中沢氏ル

ノアールの作品一枚買受たけ

れはとの事三人同伴して

ルノアール氏を訪問、中沢氏

七千法を支拂、一ヶ月ルノアール

カンヌ井木に帰宅したる上送品する  
事を約す、<sup>195</sup>

午後再び額縁の件にてルノア

ール氏を訪問 正金にて調製

の事を依頼す

夜半氏中沢氏のホテルにて語る、

八月二十六日 火曜

【本文欄】

午前ルクサンブル(リュクサンブル公園)に趣く、

写生

午後中沢氏の依頼により、

ルーブル、セーブルを案内す、

夕方巴里に帰り、古董屋

にペルシヤの陶器を数点

求めらる

青山君に案内など頼たれば、

同君の作品を譲受る様

約せらる、

八月二十七日 水曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

木村、

発信

195

194 193

中沢彦吉(二代目)。実業家、銀行家。  
同日予記欄に青山(熊治)が連れてきた  
「日本よりの来遊者」のひとりとして、中  
沢彦吉の名を記している。

一九二〇年、再興第七回日本美術院展覧  
会の特別陳列として開催された「仏国近  
代絵画及彫塑展覧会」に中沢彦吉所蔵の  
ルノワール《西班牙の女》が出品されて  
いる。同作品は同じく中沢所蔵のロダン  
《考える人》とともに関東大震災で焼失し  
たとされる。(下山肇「大正期日本のロダ  
ン蒐集家群像・1912-1927」『ロダンと日  
本』展図録、静岡県立美術館・愛知県美  
術館、二〇〇一年、一六八頁) 児島は青  
山熊治とともに同作の入手に関わってい  
る(九月末まで)ことがわかる。

青山

【本文欄】

朝中沢氏より依頼されたる

ま、早くパレーロワイヤル<sup>(パレーロワイヤル)</sup>辺の

古董屋に趣く□□□<sup>(昔)</sup>ペルシア

ギリシヤ辺も品多けれどエジ

プトのもの尠しRue de la Paix

のカルヒジユアン、フレールの店に<sup>(Kalehdian Freres カレフジヤン 骨董店)</sup>

趣く中沢氏数点を求む、

午後、久し振に浴湯に行く

夕方近日引越のため籠を

購ふ夜パンテオンの写生を

試む、夕方青山君を訪問す、

八月二十八日 木曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信

木村、

【本文欄】

朝、rue la Pelletier の古董屋に<sup>(ペルティエ通)</sup>

趣きペルシヤ陶皿の破片を求む、<sup>(昔)</sup>

(一五〇法来月の支出に□す)

午後青山君来訪夜迄共

に外出す、

不在中、木村氏来訪の由し<sup>(ママ)</sup>

八月二十九日 金曜

【予記欄】

発信

自宅大原

三橋 柿原

武内

【本文欄】

朝ホテルミラボーに木村氏を訪問

不在、エルネストクレソンに廻<sup>(concierge 管理人)</sup>

りコンシエールジュに明後日轉

宅の事を告ぐ

午後ミューゼテデコラチーブ<sup>(パリア装飾美術館)</sup>

を観る、

夕方帰宅、

八月三十日 土曜

【予記欄】

来信

妻、

疋田、柳井

【本文欄】

朝□□□の廣瀬氏来訪

明日轉宅□予定なれはとて

かたつけをなす、

昼食後□紐を買求めに行

く夕方、かたつけをなす、

196  
インディアン骨董店(A. & M. Indoujdjian Freres) のところ。同店の住所は9, rue Le Pelletier。

一日甚た短き思して暮したり

八月三十一日 日曜

【予記欄】

発信

自宅、疋田

柳井

【本文欄～欄外左側】

朝宿の主人と同道してエルネスト

クレソンの画室に至り家具残金

及一ヶ月半の借室料共に弍千法

卍の内三百法先月渡し置きたる残

千七百法を渡す

夕方引越すべく僅荷物<sup>?</sup>の取かた

つけをなす、

五時青山君来援され愈々

此夕よりエルネストクレソンの画

室生活に就く

室内散乱して取かたつけになかく<sup>?</sup>らし

荷物は幸に宿カルソン<sup>(ギヤルソン)</sup>自ら取運ひ呉る、

九月一日 月曜

【本文欄】

殆と終日室内の掃除に費す

午後三時頃昼食を済せて

大使館に宿所変更の報知を

なし白耳義行<sup>(ベルギ)</sup>の旅券の

裏書を乞ひ直に白耳義公

使館<sup>ニ</sup>に趣き手続を終る、

夕方帰宅、

途上青山君に會遇、君は今午後

轉宅したりと余の近所にし

て賑かになりたり、<sup>?</sup>

風邪の氣味にて頭重し、<sup>?</sup>

九月二日 火曜

【予記欄】

来信

原

【本文欄】

終日外出せず掃除に暮す

昼前青山君来訪午後

手傳呉れらる

昼食夕食を日本食をなし

共に會食す、

夜十一時頃迄青山君と

藝術上の問題につきて

語る、

九月三日 水曜

【本文欄】

朝九時過迄就床朝のカツフエを

十一時前喰<sup>(飲)</sup>た アマンシアン<sup>(アマンシジャン)</sup>氏の

所へ出かけて見ようかと考へた

か少し時間の中に會ぬらしいのと雨ても降そふてある、

昼食後ホテルトビユのマガザンに

買物に趣く降雨□々たり

午後五時帰宅、

夕方食事に出づ、

九月四日 木曜

【本文欄】欄外左側

午前少し読書した、十時半シャト

チエリに趣くべくガールエストに向ふ

一時着の筈の列車はやつと二時

を過ぎてシャトチエリに着駅前のレスト

ランにて昼食す、

三時頃アマンシヤン氏を訪ふ在宅製

作中、藤島先生よりの箱を送

る 夕食を共にすべければとの事、

来合せたる或画家と共に向の丘に

登り写生をなす、この辺の一村は全く

戦□にて破壊し終□たり、

午後八時半の列車にて十一時巴里着、

九月五日 金曜

【予記欄】

発信

原、

藤島

来信

石井、

【本文欄】

朝青山君来訪、昼食を共に

し夕方散歩を共にして八時

過歸寓す、青山君再来

十一時迄話す

青山君より借りたる黒板博

士の西遊式年<sup>197</sup>のエシフト<sup>(エシフト)</sup>行

を読む、

九月六日 土曜

【予記欄】

発信 石井、木村

都鳥

2. chemises

1. chemise du nuit

3. canisoles

1. caleçon

1. fra□□□□□□□□□□

3. coles<sup>(coles)</sup>

□□□□p□□r. draps VW

【本文欄】

午後アカデミーにクロツキ<sup>(クロツキ)</sup>、

油、□彩、スケッチ板などを買

求め帰宅、夜読書

197 黒板勝美著『西遊二年欧米文明記』(文会堂書店、一九二一年)のことであろう。

九月七日 日曜

【予記欄】

来信、

原、

Renoir

【本文欄】

昼前掃除の女来る、

外出、長谷川君明日出発

南佛の地に病後を療養

せんとさる由御見舞に行く

午後ダリヤの花を買求め

帰宅、一時間ほど写生をなす

九月八日 月曜

【本文欄】

朝岡田氏来訪昼食を共にす、

朝と午後昨日写生のつゝきを

描く、

夕方セ<sup>(セーヌ)</sup>ヌ河岸を散歩す

夜壁に張りたる支那女優の

絵を眺めて修作の辺を定む

九月九日 火曜

【予記欄】

発信、

自宅

青の

【本文欄】

朝<sup>(オース)</sup>へ花買に行く

昼前より写生す、

タリヤ<sup>(タリヤ)</sup>、シオンの類数多の花

を水<sup>(水注)</sup>つきに抑<sup>(種)</sup>して洗面臺の

上に置いて周囲を描く<sup>199</sup>

夕方迄、

青山君昼過ぎ来り夕方迄

話す、

昨日も今日も自炊して生活

九月十日 水曜

【本文欄】

昨日から始めた花の写生を朝から

夕方迄つゝけた

画室に計<sup>(ばかり)</sup>こもつて毎日描て居れば

巴里に来て居る心地かせぬ、

然し何か一つ試みて見ねはなるまい

静物はかし描て居たとて何にも

なるまい

加藤君<sup>田</sup>から送て呉られる日本の

新聞を通読す日本も糧食問題

と社界問題<sup>念</sup>てかなり騒て居る様<sup>念</sup>て

ある

198 《小放牛》(大原芸術財団所蔵、所蔵品登録No.4127)のこと。前年一九一八年に中国にて取材、その後日本にて制作が進められ、一九二〇年にフランスの国民美術協会展に出品された。出品前にパリにて加筆修正されていることがわかる。以下、「支那女優の絵」「支那芝居の絵」などと表記されている。

199 モチーフや構図についての記述内容が「児島虎次郎画伯遺作展覧会」(大阪中之島朝日会館、一九三六年)出品番号No.88《静物》(所在不明)の図版と一致することから、同作またはその関連作と考えられる。

九月十一日 木曜

【予記欄】

発信

加藤

【本文欄】

午前中描きつゝけの花の写生

午後昼食後ルーブルに出

かく、

街上暑気烈しくして外

に在に不堪、六時前帰宅、

先日より描きし花は如何にして

も意を不得夕方八号に同じ

様なもの一枚を描く

九月十二日 金曜

【天気欄】

晴

【寒暖欄】

暑

【本文欄】

朝ラモレルに絵具買<sup>?</sup>に趣く昨

日より暑気強し

少し暑さに労れたる心地す

午後より夕方迄支那の女優の絵を修

作す

九月十三日 土曜

【本文欄】

朝岡田氏の所にアトリエの話

にて趣く、夕方迄岡田君留

守

九月十四日 日曜

【本文欄】

終日支那女優の絵を修作す、

朝より夕方迄、青山君

来訪、

九月十五日 月曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信

山田芳

【本文欄、欄外左側】

早朝岡田君アカデミーに同伴

し呉れとて来訪アカデミーに

行く、ルクサンブル公園

を一人にて散歩す、

街上子供を三人連れたる中年

の貧しき婦人か残年の歌を

独唱して銅貨を乞ふて居た

余は簡単なるスケッチをなす、

正午後前帰居、廣瀬氏来訪

午後青山君と Mr. Rivier

氏の所にルノアールの絵を見に行く<sup>200</sup>  
夕方、他の廣瀬（佛文）氏原君と来訪<sup>201</sup><sup>202</sup>

九月十六日 火曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

発信

アマンジヤン<sup>(アマンジヤン)</sup>

【本文欄】

朝アマンジヤン氏へ手紙を書く<sup>(アマンジヤン)</sup>

昼食後支那女優の修作

を夕方迄つゝけた

今朝は早くルクサンブルの公園

に出かけて見ようと考へたか

空か曇りて薄寒いので中止し

た、

今朝はルクサンブルの園は静<sup>(リュクサンブル公園)</sup>

かて淨いよい気持である、

今月も早や半月過ぎた

日本から一向手紙か来ぬ

九月十七日 水曜

【本文欄】

朝窓外の写生を始め、昼食後

ルクサンブル辺の散歩に出つ

て式時間古董屋に過す、<sup>(⑧)</sup>

辰砂の壺の口かけのもの三品

價安く求む

四時頃帰宅して食事、

夕方少し支那女優の修作

をなす睡気催して力なし

九月十八日 木曜

【予記欄】

来信

長谷川

【本文欄】

午前中在宅、

昼前岡田君来訪共に

昼食す

午後青山君来宅の筈

なるも不来

岡田君と中川氏の寓を<sup>203</sup>

訪問

夜シネマを観て夜半帰

宅

九月十九日 金曜

【予記欄】

発信

長谷川

200 ジョルジュ・リヴィエール (Georges Riviere, 一八五〇—一九四三) か。フランスの作家、美術評論家。一九一九年九月十二日消印の児島宛ルノワールの書簡が現存しており、リヴィエールの住所と作品受け取りについて記されている。

201 広瀬哲士 (ひろせ・てつし、一八八三—一九五二) であろう。フランス文学者、岡山県出身。児島の住所録に名前があり、住所は Welcome Hotel (パリ五区) および東京市外中野となっている。

202 原勝四郎 (はら・かつしろう、一八八六—一九六四) であろう。洋画家。

203 中川紀元 (なががわ・きげん、一八九二—一九七二) か。洋画家。

【本文欄】

朝ロンドン山田氏より来電本日

夕方巴里着の由

夕方迄朝より支那女

優の修作

四時頃青山君とRivier氏

の宅にてルノール氏の作品

を受取る<sup>204</sup>

(Care at Nord Paris 北野)  
ガールドノールに山田氏久保

氏を訪聞出迎ふ両氏三井

の人とグラランドホテルに就く、

(ラオリールベルゼール)  
ホリベルゼールを案内して夜半過ぎ雨に降れ

て帰宅したるハ一時半

九月二十日 土曜

【本文欄】

(True de Lake リージェンツ)  
朝リエヰリエーシに木村

氏を訪問昼食を氏のパンシ

(宿舎)  
ヨンにて饗せられグラランドホテ

ルに置手紙して帰る、

夕方山田、久保氏来訪、

夕食を共にす、

(オランピア劇場)  
夜オランピアの案内す

九月二十一日 日曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

発信

青野

矩一

Renoir

来信

矩一

【本文欄】

連日夜晩く就床のため睡眠

不足、日曜なれはと思ひゆ

つくり睡り、醒めたるは十時に

近し、朝ルノール氏へ手紙を

かく、

午後、少し散歩に出づ、夕方

支那女優の修作、

夜原君来訪、支那飯に

趣く、

九月二十二日 月曜

【天気欄】

晴

【本文欄】

朝原君来訪原君に依頼されて同道して

ワルトロカデロの附近に趣く

夕方青山君の所に同道す

午後

ワルトロカデロより宿迄

(セイヌ)  
の河岸を散歩す

九月二十三日 火曜

【天気欄】

曇

【本文欄】

朝、(グランドホテル) クラウドホテルに山田氏への

電報を持参す、

恰も見物に出かけの折にて夕

方迄自働車にて引廻す、

風邪の氣味なれば早く就

床す、

九月二十四日 水曜

【天気】

晴

【予記欄】

来信

中沢、

山田氏への電報来る、

【本文欄】

朝九時離床よく眠りたるため  
にか頭少し軽くなる

瓦斯ストーブを焚きて暖房

す、

昼前都鳥氏来訪夕方  
迄談合す、

九月二十五日 木曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

発信

山田、

発電

山田

【本文欄】

夜発汗したれば朝少し心地

よし、中沢氏より巴里に帰

着の由はかき受けたれば依頼

され居る額(額縁)椽屋に出かく、

午後支那劇の修作をなす、

九月二十六日 金曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

自宅、三通

柳井、岡崎

来電山田氏への

発信

山田氏

自宅、柳井

成羽、大原（輸）

太田

【本文欄】

朝中沢氏ホテルに帰着の事と

考へ向たれと尚巴里に帰

られざる様子

諏訪に廻り古董屋に寄り

昼支那飯に趣く、

風邪の心地よし、

夜手紙をかく、

九月二十七日 土曜

【天気欄】

雨曇

【予記欄】

発輪

自宅、斉藤

信

柳井、岡崎

来信

山田芳

「山田氏への

手紙二通

【本文欄】

朝九時迄睡る、午前中洋服の

repassageをなす、

昼食を山口氏の所にて御馳走

になる、

午後青山君、松永君<sup>205</sup>山口氏

の所にて来語す

夕方一寸外出す冷氣なかく

に強し、

九月二十八日 日曜

【本文欄】

朝中沢氏より来電、直にホテル

に趣く、別に何の用事もなく

日曜日にて用達も出来ず

昼食を御馳走になりて夕方

迄遊て帰る、

九月二十九日 月曜

【予記欄】

来信

Duthe' 妻

金沢、岡崎

【本文欄】

朝ルクサンプルに写生に行

205 松永津志馬（まつなが・つしま、一八九三—一九六六）であろう。洋画家。

く  
〔エシ<sup>206</sup>プト〕  
エシ<sup>206</sup>プトの板画一五〇を購む、  
〔ランド・ショ<sup>206</sup>ーム<sup>206</sup>ール〕  
克蘭シヨーム<sup>206</sup>エーとラモレルに  
寄る、  
午後中沢氏来訪、

九月三十日 火曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

Goff

【本文欄】

朝青山君と中沢氏の宿に  
趣く、額<sup>〔額〕</sup>椽屋にてルノアールの  
作品に對する木彫<sup>〔木〕</sup>の椽<sup>〔椽〕</sup>を撰  
ぶ<sup>207</sup>  
午後同道してRue de la Paixの  
古董<sup>〔古〕</sup>屋にて中沢氏新にギリシ  
ヤの品数点を求めらる、

十月一日 水曜

【天気欄】

晴夕雨

【予記欄】

発信

Goff

長尾建吉  
額<sup>〔額〕</sup>椽代の  
事を申送る

【本文欄】

朝ルクサンブル<sup>〔リュクサンブル公園〕</sup>に久振りに  
スケツチに趣く池の側にて子供  
の噴水を描く  
午後ガールドリオン<sup>〔Gare de Lyon リオン駅〕</sup>に時間表  
を買求む后ループルに<sup>〔エシ〕</sup>  
プト<sup>〔エシ〕</sup>の墓標を觀る

十月二日 木曜

【予記欄】

来信

小笠原、

小林、

岡本、

発信

自宅、

Duthu

【本文欄】

先般中から中沢氏に依頼された  
用事で殆ど数日を費したししかも其の  
用便か至極不愉快千萬てあ  
つたためか頭かなんとなく嫌てたま  
らぬ、何所か田舎へ飛出し

207 206  
「二五〇フラン」の意であろう。  
八月十四日、二十五日、九月十五日、十  
九日欄参照。

て来て見たくもあるし今日モン  
チニー辺に遊て見ようかと考へたら  
又思直した、朝大使館に手紙の  
事て出かけて帰途を都鳥氏の寓に  
寄て四時頃迄話した夕方小柴君<sup>208</sup>  
の所を訪れて帰つた、

十月三日 金曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

ホテル

Grand Hommes

発信

小笠原、加藤、

小林、

【本文欄】欄外左側〜欄外下側

十時五十分（Gare de Lyon リオン駅）カールドリオンよりモンチ

ニーに絵具箱を携へて十年振り

にロアン（ロワン池）の清流に見んとす、

十一時半前着、停車場前にて昼食川岸

に降りて橋上より一枚写生す降雨に

會ず陶器屋に歸りて壺一個を求む、

田グレの方への道（とほろ）をほどくと歩た雨に濡

れた緑葉の鮮さとても都にては見られ

ぬ色なり紅と燃る鳶の羨しきほと

美しさよ、町はづれにて一枚スケッチを試み

た五時僅か過ぎ七時迄の汽車を待つにはあ

まり時間あれはモレー迄歩行き見む林道を急行した

恰た三四キロ行た所て馬車か馳て来た御者か同乗を、

すゝめる

のて車上の人となる、六時半少し過ぎ停車場着、巴

里へ空腹の

ま、十時帰寓飯を炊て食事した

十月四日 土曜

【本文欄】

朝ルクサンブールの池を十五号に画

室て描直した

午後デュランルエル

ボヘッチー（ボヘン通り）の Bernheim <sup>209</sup> などにタブ

ローを見る シヤバンヌ <sup>210</sup> のパステル

十号程のもの六万五千法 かなり

よい品であつた

夕方迄歩み通して勞れて帰寓

青山君来訪

十月五日 日曜

【予記欄】

来信

矩一、青野、

柿原、金沢

208 小柴錦侍（こしば・きんじ、一八八九—一九六一）か。洋画家、版画家。

209 ジョルジュ・ベルネーム画廊。

210 ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ（Pierre Puvis de Chavannes、一八二四—一八九八）。フランスの画家。

発信

矩一青野

柿原金沢

【本文欄】

午前中在宅昨日の夜画を少しつゝける

午後、外出ホテルクラントホーム(ホテル・デ・グラン・ゾム)

主人を訪ふ

夕方帰宅、諸氏への手紙を

夜迄かく

人生に最も発達しつゝあるものハ  
虚偽を以て第一とす

十月六日 月曜

【予記欄】

来信

山本 久保田

【本文欄】

朝山本氏ローマより明朝帰巴

すべければスワホテル(諏訪ホテル)に宿を求

め呉れとの手紙を受取る

昼前スワに趣く 午後少し

朝顔?の絵を修作す<sup>211</sup>

十月七日 火曜

【予記欄】

来信<sup>?</sup>

中沢、

【本文欄】

朝ガールドリオン(Gare de Lyon 駅)に山本氏を

迎ふ 午後同導して山本

氏の買物をなす、

夜カジノドパリ(カジノ・ド・パリ)を観る、

十月八日 水曜

【本文欄】

朝スワホテル(諏訪ホテル)に趣く山本氏

正午の汽車にてロンドンに出

発さる、

午後

十月九日 木曜

【予記欄】

来信

加藤

【本文欄】

朝 朝顔の画を修作す、

夕方ホルトオレアン(Fort Orleans オレアン)の城

外を散歩す

211

《朝顔》(大原芸術財団所蔵、所蔵品登録  
No.050-411-412)のこと。三点が日本  
で制作され、うち二点が一九二〇年の国  
民美術協会展に出品された。出品前にパ  
リにて加筆修正されていることがわかる。

十月十日 金曜

【本文欄】

朝ルクサンブルに写生に

出かけ

グランパレにオートモービルの  
のエキスポジション(Kunsthistorisches Museum)を観る

夕方より室内の写生を

始めた

十月十一日 土曜

【予記欄】

来信

平塚

発信

平塚

岡本

【本文欄】

午前中在宅午後(グラン・パレ)グランパレ

バーに趣き(ヨルジュ・ブティエ)シヨージブチに水

彩画展覧會を観る

夕方帰宅、

大使館に寄り満谷氏よりの

手紙を受取る

十月十二日 日曜

【予記欄】

来信

妻、吉田

柳井青の

小林上田、

中尾

【本文欄】

午前中在宅午後(クリュニー美術館)ミュセクリ

ニ(館)に行く館中、廣瀬、関野

博士212に會遇す、夕方迄両氏

のホテルに寄る博士より印度

旅行の物語及数多の写

真にを赤さるつき教示を得、

夜日本への数多の返信を認

む 夜半過就床

十月十三日 月曜

【予記欄】

発信

鼎宅、妻

青の、柳井

上田、小林、

吉田、

妻

来信、

212 関野貞(せきの・ただし、一八六八一—  
九三五)。建築史・美術史家、考古学者。

小野、木村  
妻より写真  
来る

【本文欄】

朝渡欧の時同船したる小野<sup>213</sup>氏来  
巴したれは遊ひに来て呉れとの手紙  
を受け午後クリシーのホテルに  
訪ひ夕方迄同道して市中  
を散歩す、  
午前室内のデッサンを五十号  
に描く、

十月十四日 火曜

【予記欄】

来信  
中沢、  
青の  
妻、  
三宅、  
【本文欄】  
(クリュニー美術館)  
朝クリニーに出かけようかアマン  
ジャン(「シヤトール」テイエリ)  
ジャンのシヤトールウチエリー  
に出かけようかと色々考へた末  
シヤトールウチエリー行は日延とした  
(クリュニー美術館)  
午後クリニーにペルシヤのデッ  
サンを模写に出かけた  
夕方暮(略)くなつて三時半退

出した  
(カレブジャン骨董店)  
カルブジャンからギリシヤのテール  
(赤陶)  
キュイの少なのを二個届けてよ越  
した先日???の礼ならむ

十月十五日 水曜

【予記】

発信  
中沢、  
三宅、  
長谷川

【本文欄】

午後ミュゼクリニに  
(ロードス)  
Rhodesの皿を模写に趣く  
夕方帰宅、  
(ベルギ)  
白耳義に行て来たいのと  
(アマンジャン)  
アマンジャン氏の宅を訪れ  
たいのとモデルを描きたい  
しの三つの問題か毎日頭の  
中を支配して然ママしかも毎日  
三つの何一つも出来ないのである  
奮起を要す

十月十六日 木曜

【予記】

来信

213 小野輝男か。児島の住所録に名前があ  
り、住所はロンドンとなっている。

久保田

山田、

【本文欄】

午前中昨日クリニー(クリニー美術館)にて描写したる

皿の絵を修正す、

午後St. Honore(サン・トノレ)の店に

ゴガン(ゴッパン)の展覧会を見る、

夕方帰宅、ゴガン(ゴッパン)の作品

ブルターニュ(ブルターニュ)にて描たもの、みらしく

二十枚もあつたか風景はゴ

ガン(ガッパン)のものとは思へぬ様な穏

雅なよいものかあつた

十月十七日 金曜

【予記欄】

発信

久保田

山田、

満谷

【本文欄】

午前中室内の写生をなす、

五十号に先日来デッサンを描

き置しも室内に子供のモデル(モデル)を置

く積りなるも一向モデル(モデル)来らず

昼食を支那飯に行く途中

岡田君に會遇す食後共に

(リュクサンブール美術館)  
ミュセルクサンブルクを観る、岡田君

の寓に帰り日暮過迄話す

中川君も来合す、

アラブ製?の大幕を購ふ價非

常に安價

十月十八日 土曜

【本文欄】

午前中昨日の続きに室

内を描く

午後Rue Royale(ロワイヤル通り)に展覧

會を観る

夕方、ルクサンブル近くの

古道具屋に入る一時間

費す、

朝来霧深くして町余と辨

せぬ位なり、

十月十九日 日曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信

加藤

【本文欄】

朝九時迄睡眠す 此頃暁頃?

よく醒めて朝起の際頭痛む

214 ポール・ゴッパン (Paul Gauguin, 一八四八一—一九〇三)。フランスの画家。

215 サントノレのバルバザンジュ画廊で開催されていたゴッパンの個展を観覧したものと考えられる。

Paul Gauguin: Exposition d'œuvres

Inconnues, Galerie Barbazanges, Paris,

Oct. 10-30, 1919

寒さ加りたるため？

午後(ギム)ミユセギユメ(美術館)に趣き新に

エジプト(エジプト)の室と印度の室を觀

るルーブルのそれに比して遜色な

きのみか模写などするのは非

常に都合よし、

夕方帰宅、

今日は□春先の如く暖気心地よし

大陸なれば支那の如く三寒四温

の存するにや、

十月二十日 月曜

【予記欄】

来信

長谷川

【欄外右側〜本文欄】

午前中シシカ□ペナンでスケッチして来た

子供の構図を描て見た、<sup>216</sup>

午後支那飯からセンヌ川の

岸の方に散歩して

帰途、□エジプトの Sarcophage

の破片を買求めて来た

美術学校にて羅馬賞(ローマ賞<sup>217</sup>)の彫刻□コン

クールの作品陳列を觀る、

十月二十一日 火曜

【本文欄】

昨夜より少し風邪の気味

なりしか今朝は熱もかなりあり

喉も痛むし気分も悪し

終日一寸買物に出たるのみにて

ストーブの側にてセザンヌを

読む、

外はあまり暖かそうふてもなし

十月二十二日 水曜

【予記欄】

来信

小野、

加藤

都鳥

【本文欄】

午前中在室

昨夜より風邪の気味なりし

ため発汗させむと昨夜ブー酒(ブー酒?)

を熱して飲しもきめなし九時迄

就床、

昼前花の絵を描始む

昼過ラモレル迄用達に行く

吉田君へブランダルジャン(絵具のシルバールホワイト)を九本発

送を依頼す

午後□□青山君来談、

217 216

五月二十四日欄参照。  
ローマ賞。芸術分野の学生を対象とした、  
フランス国家による奨学金付留学制度。

夜手紙をかき読書(セザンヌ)

十月二十三日 木曜

【予記欄】

発信

大原、加藤

【本文欄】

午前中鉢花を描く矢張暁

寒冷を感じて熟睡不能

風邪の気減退せず、

午後ルクサンブル(リュクサンブール公園)の園に

写生に出かく

室内のストーブの傍に居るより

外出して日光に少しでも浴す

る事か非常に快よい

夜久し振りにシネマに行く

今晚はよく睡られて明日は

すつかり氣分の直る事を祈る

十月二十四日 金曜

【予記欄】

来信

岡本

【本文欄】

午前中花の写生をつけた、

午後ルーブル(エジプト)に埃及の壁画の

一部を模写に行た

面積の大なるものか描けぬ

ため三部に劃分して写し

た、

十月二十五日 土曜

【予記欄】

発信、

柿原、

岡本

【本文欄】

午前中花の写生をなす、

午後ルーブルに昨日の模写の

つゝきをなす

夜国民新聞を読む

柿原君に送金の事について問合す

十月二十六日 日曜

【本文欄】

午前青山君来訪

昨日、ルーブルにて模写(模写/写生)せし

エジプト壁画の破片を

の絵を修作す

午後一寸ルーブルに覗く

夜山口、松永氏と支那飯

に趣く、

十月二十七日 月曜

【予記欄】

発信

青の

妻

【本文欄】欄外左側

午前中、シユー(Chou キャンツ)とトマトを机の

上に置いて写生昼迄に描き終

へられず

午後美術学校にコンクル(コンクール)の

成績を見物に行く

夕方迄方々散歩して又

エシプ(エシフト)ト(サルコファージュ 石棺)の sarcophage の破

片を買た

夜松永氏来話さる、

来月の分へかき延す<sup>218</sup>

十月二十八日 火曜

【本文欄】

午前中静物を描く

午後美術学校に絵画部

の競技成績を參觀

に行く、

夕方帰宅、

十月二十九日 水曜

【予記欄】

来信

小野

【本文欄】

昼前外出、午後ルーブル

に行く、

今朝モンチニーに写生に出

かける積にて写生の支度な

として居る間に、とても十時

五十分の汽車に乗る間に會ぬ

様になつたので断念した

今モンチニーには都鳥氏が

滞在中秋の盛なる由報

せらる、

218

「エシプトの Sarcophage」の上より引出線をつないでいる。同作の購入については、出納帳の来月分の欄へ記入するという意であろう。

十月三十日 木曜

【本文欄～欄外下】

午後(少女)小女のモテル来る筈にて

夕方迄待たるに終に来らず

夕方(クロッキー)目目Croquiに行く、

(モンチニー)montignyに行たきも天気

毎日曇り勝にて時に小雨

などあり此の陽気にては田

舎に出かけても画興とこ

ろか腸を害する様なるもな

きある見合勝となる、

画室の乗北の窓に窓幕を懸たの

て夜中暁室中の寒冷さほと強□

□□なる、

十月三十一日 金曜

【予記欄】

来信 原

【本文欄】

午後(ギメ美術館)ミユセギユメに行く

(エジプト) 219 (王朝) エジプト XIX - XXdinastie

(墓) のTombeauxの内より支那の

明時代の香水瓶の小なるもの

数個発掘されたるもの陳列

さる

夕方散歩して帰宅

今日は天長節なり大使より

通知来らず

日本より送金に接せず

十一月一日 土曜

【予記欄】

発信、山田、

【本文欄】

朝(サロン・ドートンヌ)220 ~~サロ~~ Salon d'automne

の開会されたるを観る館中スチー

ムなく非常の冷氣にて腹痛を催

一廻大急きにて観て帰る

1914よりこの方久振りにて面<sup>221</sup>

白きもの黻からず、

午後市中を散歩して夕方帰

宅、

十一月二日 日曜

【本文欄】

朝中川君を訪れ昨日都鳥

氏など□□留守に来訪されたる

時(道)同導(ママ)ならさりしかとと尋ぬ

午後(クリュニー美術館) musée Cliny を一寸

□く 夕方帰宅、

雪細く降る樹木の白く染

り来る、

219 前行頭からここまで縦書きになっている。

220 サロン・ドートンヌ。フランス芸術家協会展をはじめとする既成公募展の保守性に反発して、1903年に創設された公募展。

221 第一次世界大戦の影響により、1914年以降サロン・ドートンヌが展覧会開催を休止していたことを述べている。

昨日の寒さも今は降雪のためな  
るか気さほ□□強からず  
一時間ほと目(万聖節)  
(Toussaint)Toussant  
の人通出の町を散歩す、

十一月三日 月曜

【予記欄】

来信  
矩一  
中尾、

【本文欄】

朝の中salon d'Automneを(サロン・ドートンヌ)  
参観す、  
午後、松永氏来訪夕方迄  
夜外出シネマを見る

十一月四日 火曜

【予記欄】

来信、書留、  
(大阪倉紡、松尾)  
三宅専、  
Duthu

発輸

大原、柿原、青の  
山田、松尾、

発信

山田小林、  
都鳥

【本文欄】

朝、書留来る、  
九月二十二日の投函なれば  
延着にあらずして発信の遅れ  
たるなり、三千圓 11,120fcs.  
午前中書簡を認む  
午後、カタログmusee Guimet(ギメ美術館)  
(Musée Guimet)  
を求に市中に出て冬の□ラン  
シを買求めて帰る、

十一月五日 水曜

【予記欄】

来信矩一

【本文欄】

朝ルクサンプル(リュクサンプル公園)に写生に行く  
降雨にて雨宿して描く行人  
稀に秋色清□たり、  
午後より夕方迄アカデミー(アカデミー)にて雇た  
る(少)小女を室内の画中に加へ  
て描く

十一月六日 木曜

【予記欄】

来信 笹川

【本文欄】

朝室内の画を描く午後(モデル)モデル

来らす

夕方、関野博士を訪問し

松永氏等と支那食を共にして

帰宅、

十一月七日 金曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信 林、

柿原、妻、

石井、小村、

都鳥、

【本文欄】

朝より室内写生中、都鳥氏

中原氏222来訪、

昼食を共に自炊して

午後散歩して夕食を日本人

倶楽部に趣き十時頃帰宅、

十一月八日 土曜

【天気欄】

雨

【予記欄】

発信、妻、

石井熊夫、林223

来信、

中尾、岡崎

【本文欄】

午前少し室内の写生を続ぐ

昼前松永氏と同道して palais

ロワイヤル(管)の古董屋に行き後

Musée Guimé(ギメ美術館)に趣ぐ

夕方過帰宅、

十一月九日 日曜

【天気欄】

快晴

【予記欄】

発信、

三宅克、□原、

小林笹川

矩一

岡崎石井日向224

青の

222 中原實(なかはら・みのる、1893-1990)。洋画家、歯科医師。

223 大原孫三郎の義兄。倉敷紡績に勤めたほか、倉敷商工会議所会頭などを務めた。

224 「日向(宮崎)の石井」の意であろう。

来信山田、

【本文欄】

午前中室内写生

午後より(野)関根博士の印度旅行講演あるため先生の宿に  
趣く集まるもの七八名

都鳥廣瀬諸氏と夕食を共にして  
帰宅、十時、

十一月十日 月曜<sup>225</sup>

【予記欄】

来信中尾<sup>?</sup>  
(モデル)  
モデル

【本文欄】

十一月十日

午前室内を描く  
午後外出

十一月十一日 火曜<sup>226</sup>

【天気欄】

曇

【予記欄】

来信原

【欄外上側】

十一月十一日

【本文欄】

朝室内の絵を少し修製す  
午後Salon d'Automneを  
観る (サロン・ドートンヌ)  
(内?)場合都鳥氏に會遇

此頃はよく支那料理に行く  
今日昼、夕、共に支那料理で  
済した

十一月十二日 水曜<sup>227</sup>

【天気欄】

曇

【予記欄】

昨夜降雪  
僅少  
寒氣強し

【本文欄】

午前中自画像を描く N°15<sup>228</sup>  
(リュクサンブール公園)  
午後ルクサンブールをスケッ  
チス<sup>(す)</sup>  
夜食事に出て活動に寄る

久し振りにバイオリンを出して  
見た、壁の傍に箱を置いてあつたの  
で 濕氣のために一部糊か  
離れて板か割れかけて居た  
今少しの事ですつかり駄目に

- 225 11月10日の日記は、11月12日欄に印刷された日付を訂正して記入されている。  
226 11月11日の日記は、11月10日欄に印刷された日付を訂正して記入されている。  
227 11月12日の日記は、11月11日欄に印刷された日付を訂正して記入されている。  
228 「15号カンヴァス」の意であろう。

なる所であつた

【欄外下側】

十一月十二日

十一月十三日 木曜

【予記欄】

来信

金山、妻、  
直平<sup>229</sup>、太田

発輸、

太田、妻、直平

【本文欄】

午前中自画像を描く

午後食事を兼ねて外出して紅葉し

たる樹枝を買めて帰り自画像

(背景  
fond)のfontとして写生す、夕方<sup>230</sup>

迄

夜 花の静物を夜半過迄

描く、

十一月十四日 金曜

【予記欄】

午後大に雪

降る、

【本文欄】

朝洋服を着するのを少しくづ<sup>\*</sup>

したら又腹工合か変になつた、

午前中自画像を少し描た

午後大使館に金山君からの為

替か着しては居ぬかとかけたか

未着(サン ト ノ レ  
Honore)(腹工合悪し) St. Honnore に

(クールベ) (画家のアトリエ)  
Courbetのl'atelier de peintre

を観た大作のみならず自画像に加ふる

自分の知己親友と他に自分の會遇した印象

ある人物(貧民など)をうまく構図してあつた<sup>231</sup>

(ベルネーム=ジュヌ画廊) (モリゾ)<sup>232</sup>ベルネームにMorisotの展画をも見る<sup>233</sup>

見るほどのものなし夕方帰宅

十一月十五日 土曜

【予記欄】

発信

Delvin

Claus

来信

金山

柿原 妻、

三原、

【本文欄】

昨夜よりの降雪、尺に近し、

朝起出て、直に二十五号に窓外の

写生をなす、

午後二時過にてやつと終る<sup>?</sup>

229 児島直平。児島虎次郎の甥、山陽新聞記者。のちに、『児島虎次郎略伝』(児島虎次郎伝記編纂室、1967年)を著した。

230 紅葉した樹枝が背景にある自画像に該当するものとしては、『自画像』(大原芸術財団所蔵、所蔵品登録No.4003)がある。同作またはその関連作のことと考えられる。

231 ギュスターヴ・クールベ《画家のアトリエ》はこの当時サントノレのマルバザンジュ画廊の所有であった。同作品は翌1920年にルーヴル美術館に収蔵されている。

232 ベルト・モリゾ(Berthe Morisot, 1841-1895)。フランスの画家。

233 当時、ベルネーム=ジュヌ画廊ではベルト・モリゾの個展が開催されていた。Cent Oeuvres de Berthe Morisot (1841-1895), Galerie Bernheim-Jeune, Paris, Nov. 7-22, 1919

昼食を昨夜の残飯を食す、  
夕方来信多し 返事をかく  
夜十一時迄

金山君より(カンヴァス)?カンパス代取換金  
九百四十五法の所  
千法切手にて来る、<sup>234</sup>

十一月十六日 日曜

【予記欄】

発信妻  
金山、柿原、  
吉田、三橋、  
三原、  
橋本、青の、

【本文欄】

昨日の雪は少しも消へ解て居ない  
朝日か美しく白雪に輝て居る、  
昨夜少し腹か痛てよく睡られ  
なかつた 九時頃起きてから  
八号に昨日と同じ位置で雪  
の町を写生した 昼頃終る  
昼食のために外出したか腹工合は  
矢張よくない運動不足と、消化  
不良ならむと中昼(昼)を見合して川岸の  
雪景を眺めながら散歩した、  
夕方一寸活動(映画)を観て同じく工合あしけれ

は帰寓、

十一月十七日 月曜

【予記欄】

発信 吉田、  
Aman Jean、  
(Comllard?)<sup>235</sup> Comllar

来信 吉田、  
吉田君より  
帝展入選の  
報来る、

【本文欄】

(リュクサンブール公園) (世界四地域の Fontaine des)  
朝ルクサンブールの Fontain de  
噴水 (天文台噴水)  
Quatre Parties du Monde)  
 quatre mondes の傍に残雪  
のスケッチに行く<sup>236</sup>  
今は雪の後てさほど寒さ強  
からず、午後松永氏と ~~ベル~~  
(ベル・シャルディニエール百貨店)  
Belle Jardinier に買物に  
行く、

夕食の支度中 目目目水の入  
(大鍋 (キヤセロール))  
(grande casserole) ?  
た grand caserole を引くり返  
して頭か痛くなつた

- 234 予記欄に書かれた「金山」からの引出線が、以上3行の頭の部分につなげられている。また、以上3行は縦書きとなっている。
- 235 児島のアドレス帳には「Comllard」という名前がみえ、住所は「Samoreau par Vulaines-sur-Seine」となっている。
- 236 《ルクサンブール公園の噴水》(府中市美術館所蔵)の制作に関わるスケッチと考えられる。

十一月十八日 火曜

【予記欄】

発信青の  
来信青の

【本文欄】

朝ルクサンブールに出た、今日も雪  
の写生に出かける筈であつたか  
昨日からの暖気で今朝はすつ  
かり雪か消て終た、  
〔sénat 元老院〕  
セナの前で鼈甲の香合を買求めた  
ラモレルに廻て黒田先生へ絵具  
を送付する事を依頼した、  
タクロツキーに行き支那食後、  
〔「イタリアの妻わら  
オデオン座」 (Un chapeau de paille  
odeon) でChapau de paile  
帽子〕  
〔d'Italie〕  
d'Italieを観た、

十一月十九日 水曜

【予記欄】

発信青の

【本文欄】

午前中、在宅何をするともなく  
過した  
〔ロダン美術館〕  
〔Musée Rodin〕  
午後Musée Rodanを観る  
弐回なり  
〔Rodin〕 Rodanの作品よりも 〔Rodin〕 Rodanの  
〔collection〕 corectionしたエジプトの 〔レリーフ〕 レリーフ

とか彫像などに面白いものか  
あつて矢張〔Rodin〕 Rodanも自らの作品  
を作る事よりも往古の作品に接す  
るの慰めを味た事の潔かりし事  
を思ふ 夕方入浴して帰る、  
湯に浴すれば気持よし、

十一月二十日 木曜

【予記欄】

来信、〔Comllard?〕 Comllar  
加藤、小笠原、

【本文欄】

午前十時頃迄在室 隣の女の所に  
又早くから男かやつて来□た、騒  
て居る こんな響の中で仕事の  
手につく筈はあるまい、  
金山君から送つて来た金を銀行  
〔ソシエテ・ジェネラル銀行〕  
〔Société Générale〕  
に取に趣く、Société Generale、  
〔デュラン＝リュエル画廊〕  
Durand-Ruelに廻て Albert  
<sup>237</sup>  
André氏の作品を観る南欧マル  
セーユ辺の小品面白きもの尠からず  
〔ベル＝シャルディニエール百貨店〕  
〔Belle Jardiniere〕  
Belle Jardiniereに洋服の假縫に  
〔映画〕 〔マノン・レスコー〕  
〔Manon Lescaut〕  
寄り夕方迄活動て Manon Escaut  
を観た

237 アルベール・アンドレ (Albert André,  
1869-1954)。フランスの画家。

十一月二十一日 金曜

## 【予記欄】

発信加藤

小笠原

来信

Aman-Jean

Delvin

発信

黒田先生、

## 【本文欄】

朝の内くづ<sup>\*</sup>した先夜Odeonで観た<sup>238</sup>舞臺面

を小なものに描て見た、

午後ラモレルに行き、

黒田先生への絵具及送料を支拂

ふ205frs

満谷氏へ送るべき<sup>(画布)</sup>トワルを注文し

自分もトワル粹などを買求む

夕方<sup>(モンソー公園?)</sup> parc Mon<sup>(Parc Monceau?)</sup>□□□□迄絵具

箱を携へて出かけた夕方の風か少

し身に<sup>(浴)</sup>必む写生をせず<sup>(アマン=ジャン)</sup>に帰寓した

アマンシヤン氏□□来信 一週間程前

より巴里に在りと

十一月二十二日 土曜

## 【予記欄】

矩一に

彫刻の

写真を郵

送す、

## 【本文欄】

朝より二時頃迄噴水の雪のスケ

ツチを十五号に写した<sup>239</sup>昼飯も食すにつ<sup>たべず</sup>、けたら何たか

終た時ぼんやりとした様で

あつた、

三時頃一寸外出したか雨か

ほしよ<sup>\*</sup>と降て居る 夕方迄夕食

に外出する迄読書した、

食後Sarah Bernarrdtに<sup>(サラ・ベルナール座)</sup>La Damme aux Camélias<sup>(Sarah Bernhardt)</sup>

を観る、

十一月二十三日 日曜

## 【予記欄】

発信

矩一

## 【本文欄】

朝の中に昨夜観たLa Dame<sup>(La Dame)</sup>aux Camélias<sup>(La Dame)</sup>の舞臺面を

238 兎島はしばしば「舞臺面（舞台面）」という語を用いる。それらの使用例から、「セットも含めた舞台の（一）場面」という意であると解釈できる。

239 前掲注236参照。《ルクサンブール公園の噴水》（府中市美術館所蔵）の画面サイズは51.3×62.8cm、15号相当である。

スケッチ板に描た  
午後昼食に門の所迄出ると  
岡田君に會遇同道して日本人  
倶楽部に昼食に趣きく 吉江  
孤<sup>240</sup>氏に會す、夕方迄話す 岡田君の  
所へ日夕食前一寸寄て支那  
飯に同道して帰宅、

十一月二十四日 月曜

【予記欄】

発信、  
中山巍

【本文欄】

昨夜とうも夜半に度々醒めて  
熟睡か出来なかつた発汗を度  
々して今朝は身体の骨か少  
し痛む様た午前中何もせずに  
加藤君から送られた新聞を読む  
午後<sup>(アマン=ジャン)</sup>アマンシヤン氏を訪問す、  
錦<sup>(販)</sup>絵の板集を贈る  
日本から持来た作品を携示した  
支那劇の絵はさほどの出来てないか  
他の作品は皆面白い明年是非<sup>241</sup>  
サロンに出品せよと勧告さるゝ

十一月二十五日 火曜

【予記欄】

来信  
青の小林、  
重成、妻、柳  
井、矩一

【本文欄】

昨日身体の痛みは少しは□□た、  
<sup>(セルヌスキ美術館)</sup>  
朝 Musée Cernuschi  
を参観に出かけたら来年の春迄は  
整理のため開館せすとの事昼食  
<sup>(ラ・ボエシー通)</sup>  
<sup>(Rue la Boétie)</sup>  
後 rue Boethe を雨に  
<sup>(ルーヴル美術館)</sup>  
濡れゝ歩んだ ルーヴールに  
<sup>(ラスバイエ大通)</sup>  
一時間ほど寄て夕方 Raspail  
の古道具店に1時間ほど話して  
帰つた

十一月二十六日 水曜

【天気欄】

曇

【予記欄】

発信、  
妻小林  
柳井矩一  
青の、重成  
Delvin、

240 吉江孤雁〔喬松〕(よしえ・こがん〔たかまつ〕、1880-1940)。フランス文学者、作家。

241 「支那劇の絵」は《小放牛》のこと(前掲注198参照)。翌1920年の国民美術協会展には、《小放牛》《秋》および2連画として《朝顔》が出品されている。(サラ・デュルト「児島虎次郎のサロン出品について」『生誕130年児島虎次郎—あなたを知りたい』展図録、大原美術館、2011年、160-170頁)

【本文欄】

(サロン・ドートンヌ)  
昼一寸前 Salon d'Automne を  
観に行く  
(クリュニー美術館)  
午後 Musée Cluny に寄る  
夜松永君とモンマルトルの  
(アルルカン劇場?)  
(Théâtre Arlequin)  
小芝居に出かけた (Théâtre Arlequin)  
(「ナイルの川岸」?)  
(Les Berges du Nil?)  
les Verges du Nil  
(クロッキー)  
クロッキーを少し試た

十一月二十七日 木曜

【天気欄】

小雨

【本文欄】

朝昨夜の芝居を板に描た  
(クリュニー美術館)  
午後、Musée Cluny  
新らしき室か今日から開館  
(3階)  
をさ□2<sup>me</sup> etage て□く□□□ル  
や布のものか多い Antinoie  
の布も少しあつた、

十一月二十八日 金曜

【予記欄】

来信  
原、

【本文欄】

(senat 元老院)  
朝、セナの前の古道具屋に行

(エジプト)  
き昨日買ったエジプトの首飾  
の残を買た  
(ルーヴル美術館)  
午後ルーヴルを一寸見物して  
帰つた  
(オデオン座)  
夜 Odeon に Monsieur  
(d'Assoucy?) (最終舞台  
(dernière répétition  
Dassoucy の dernière répétition  
(稽古)  
générale を見物に行つ  
(ママ)  
なかゝ面白い能書である  
舞臺面もかなり美し

十一月二十九日 土曜

【予記欄】

来信矩一  
岡崎  
発信原

【本文欄】

午前中雪の絵を少し直した  
今日は珍らしく朝来の晴天?  
雨後の陽光輝き鮮なり  
昼食後箱を携へて郊外  
に出かけんと思たか都合  
よく電車が来ぬのと、  
少し寒くなつたのでルクサン  
プールに行て ginyote  
(Guignol キニョール人形)  
キニョールの芝居を少し佇て観

た、見物の子供の動作になか<sup>\*</sup>  
面白いものがある、

十一月三十日 日曜

【本文欄】

午前中在宅、  
目正午都鳥氏来訪、夕寿迄  
食迄話し合ひて支那  
飯に趣く、

十二月一日 月曜

【本文欄～欄外下側】

〔オルレアン鉄道のことか?〕  
朝、Gare Orleanに西班牙  
旅行検べのため時間表を買求  
めに行く  
午後松永君と郊外〔フォントネー〕Fontenayに  
写生に行く、  
夕方迄一枚スケッチして  
帰る  
夕方迄丘上風の当る所にて  
写生しても少しも寒さを覚へ  
ぬ位であるこれなら冬も苦  
くなし然し陰鬱は少しも明らむ  
事かない

十二月二日 火曜

【予記】

発信  
岡崎、矩一  
成羽、柳井

【本文欄】

昼前目ラモレルに行く、  
午後松永氏とMusée  
〔モロー  
美術館〕  
Moreauに趣く、  
モンマルトルの絵具屋と  
〔ベル・ジャルディニエール百貨店〕  
ベルシヤルテニエの洋服の  
仕立合せに寄り夕食して帰る、

十二月三日 水曜

【予記欄】

来信  
中尾、  
西村

【本文欄】

〔サン・ミシエル〕  
朝サンミセルの本屋に注文の  
L'Espagne 〔illustré〕illustrésを取に  
行く 未着  
方々の書籍店を探し廻つたか  
何れも持合せなし  
午後ウルースの本店に行つて  
求めた  
夕方前帰宅、一通り通覧した

夜目旅行案内を少目し検  
べた

十二月四日 木曜

【天気欄】

晴

【予記欄】

来信 妻、藤島  
吉田、足立  
武内、三橋  
小笠原  
青の、岡崎  
松尾、

【欄外左側】

発信西村

【本文欄】

(L'art décoratif?)  
昨日 l'art Decorativs を  
<sup>(バールトソン)</sup>  
(Baertsoen) 242 [ジョルジュ・  
買たら Baertsme 氏かジョー  
<sup>ブティ画廊</sup>  
ジプチで展覧会をして居る  
様の目に記載してあつた  
但し十一月号  
朝同所へ出かけた十日<sup>ママ</sup>ほ前  
に終た期間一ヶ月なりとバル  
<sup>(バールトソン)</sup>  
ツン先生か来巴して居た事など  
聞た実に失望し尽した  
午後 Fontaney にスケッチに行

く

【欄外下側】

夜西村の用事で諏訪ホテルに趣く

本日

去る二日ルノアール永眠の報新聞に出づ

十二月五日 金曜

【予記欄】

発信、  
妻、松尾  
吉田足立  
岡崎 武内

【本文欄】

朝、銀行に至り先日来りし為替を  
受取る、  
午後シャツなどの買物をして夕  
方帰宅  
日本への数通の<sup>(返)</sup>通事をかく  
本日の新聞に西班牙貨幣の  
佛貨に貳倍余價する事  
を掲げられたるに驚く  
伊太利は殆と同價格なり  
夜も手紙をかくに深す

十二月六日 土曜

【予記欄】

来信 妻

242 アルベール・バールトソン (Albert Baertsoen, 1866-1922)。ベルギーの画家。見島と同じくゲントの王立美術アカデミーでデルヴァンの教えを受けたことから、見島は第一次滞欧時にバールトソンのアトリエを何度か訪れている。

【本文欄】

昼前アカデミーに諸君を訪れ  
昼食を日本人倶楽部に行く、夕方迄  
諸氏と會談す、  
夜松永氏と Chatl<sup>(シヤトレ劇場)</sup>□<sup>(Châtelet?)</sup>に  
芝居を観る、

十二月七日 日曜

【天気～寒暖欄】

曇風雨

【予記欄】

来信  
太田、上田

【本文欄】

終日在寓、  
西班牙<sup>(スペイン)</sup>の案内を検へて読  
書す、

久し振りにバイオリンを出して  
松永君と合奏をして見た

十二月八日 月曜

【予記欄～欄外下側】

発信太田  
上田妻  
来信青の

【本文欄～欄外下側】

昼前ラモレルに絵具代支拂  
に趣く、  
午後アマンシヤン<sup>(アマン=ジャン)</sup>氏を訪問す、  
藤島先生と余とにパステル  
画十号のもの<sup>(額縁)</sup> しかも額縁<sup>243</sup>  
の付きたるものを恵まる  
余は藤島先生に對して何なり  
と紀念のため御送り下さる事を乞  
ひ余に對しても何の受くる所なき事  
を以て辞したるに終に一枚惠與  
さる事となりたり先生の眞情贊  
美に絶するものあり、

十二月九日 火曜

【予記】

発信  
大原 書留  
アマンシヤン<sup>(アマン=ジャン)</sup>  
作品購入の事  
申送る

青の

【本文欄】

午前中支那芝居の幕の辺を少  
し直した  
午後 Espagne<sup>(スペイン領事館)</sup>の Consulat

243 児島田蔵のアマン=ジャン作品《二人の女》か。パステル画でサイズは50×33.9cm、10号相当。

の所に旅券の事て出かけた、

夜晩く 食事に趣く

十二月十日 水曜

【予記欄】

来信 岡崎

発信 都鳥

【本文欄】

午前中旅行の下検に過した  
午後ラモレルに絵具代支拂  
及藤島先生に荷物発送の  
事につき相談に行つた  
夕方迄旅行の買物なとし  
て過した  
早く旅行を終へて勉強に  
かゝらねは駄目である

十二月十一日 木曜

【本文欄】

朝、Cook〔クック旅行社〕244 〔スペイン〕に行て西班牙行の汽  
車賃を聞た、戦前百八十法□□□□  
のものか六百九十幾法たと云ふたの  
て一寸考へるため帰つた  
午後〔スペイン〕西班牙の鉄道會社に趣  
たか西班牙国内のものしか賣  
らぬと云ふCook〔クック旅行社〕のより少し安

い様たか大差はない

十二月十二日 金曜

【予記欄】

発信、藤島

岡崎

十二月十三日 土曜 (記入なし)

十二月十四日 日曜 (記入なし)

十二月十五日 月曜

【予記欄】

発信

自宅、青の

【本文欄】

午前クツク〔クック旅行社〕 〔スペイン〕に趣き西班牙  
廻遊切符を注文す、  
午後四時旅行支度を終て  
ママ〔クック旅行社〕  
てクツクに趣く、  
単に仏蘭西の切符のみ渡して  
〔スペイン〕  
西班牙のものは、国境にて  
求めよとて不親切千萬驚く  
に堪へたり、  
〔オルレアン鉄道のことか?〕  
〔Gare d'Orléans〕  
午後五時、Gar d'Orleans  
〔オルセー河岸駅〕  
Quai d'Orsay を発し南下

244 旅行会社トーマス・クック・アンド・サ  
ン (Thomas Cook & Son)。

の旅に就く

十二月十六日 火曜

【本文欄～欄外下側】

昨夜は夕食後直に睡に就く  
\*  
寝臺を求めたるにあらされは、  
熟睡する能す、  
七時国境イルンに下目下車  
荷物ママの旅券の調べあり  
再び暫時にして(Irún イルン)イルンに下車  
此所は已に(スペイン)西国にして切符を  
やつと求むるの時間ありたり  
終日マド明空の下に起伏多き  
高原内支那の風光に似たる  
村落など眺めつ、同室の客の話  
など聞きつ、夜七時半過 セゴビヤ  
に下車停車場前に泊す、

十二月十七日 水曜

【欄外上側】

Hotel Biarritz Victoria de Madrid

【天気～寒暖欄】

快晴

【予記・本文欄】

早朝カッフェを済して市中見物に趣く  
町の中央迄約二キロ程あり、巾廣き往来  
両側の人家、驢馬上の村夫婦など如

何にしても支那の風光に似たりと云ふ  
外なし、城砦に近に従て右側遙に  
高くローマン水道の橋梁を仰ふ廣大  
大なママ驚嘆の外ならず、  
午後、再び宿より市外を散策す終日  
逍遥してスケッチ数枚を描く少し  
尚寒さ感すれとも写生欲ママなり、然し  
先を急げはマド夕方七時半の急行にてマド  
リードリドに向ふ延着十時過に着く

十二月十八日 木曜

【天気欄】

快晴

【本文・予記欄】

朝早く須田氏245の寓を訪た幸に在  
宅、初対面なるに閑せず親切に案内の労を  
諾せらる 午前先つ旅券のため日本公使館  
に趣く、新美術館、午後、ブラド美術館  
に閉館迄停れと殆ママをも観る不  
能す其の数多なる傑作に驚く  
ベラスケス246とゴヤ247の非常のママなり  
(ルーベンス)248(ヴェネツィア派)  
ルーベック等ベニス派等南陽  
世界有数の美術館として推賞するべ  
し夕方寄席に(スペイン)西班牙の(ダンス)ダンスなどを観る、  
夜案内書を検す、

- 245 須田国太郎(すだ・くにたろう、1891-1961)。洋画家。  
246 ディエゴ・ベラスケス(Diego Velázquez, 1599-1660)。スペインの画家。  
247 フランシスコ・デ・ゴヤ(Francisco de Goya, 1746-1828)。スペインの画家。  
248 ピーテル・パウル・ルーベンス(Peter Paul Rubens, 1577-1640)。フランドルの画家。

十二月十九日 金曜

【天気～寒暖欄】

快晴

【本文・予記欄】

朝須田氏来宿同道して佛国  
領事館に趣き旅券の表書を乞  
ふべく托し置く午後再びPrade  
のMusée残部を観る、各派  
の初期の作品になかゝ観る  
べきものあり、  
夕方前芝居に同道せらる  
午前中Musée Archeologiqueを観る  
ゴヤの壁画あ  
る小寺院を  
町端れに  
訪ふ至極小  
なるものなれとゴ  
ヤ壁画は壁の色  
に調和して心地よき作たり  
夕方佛国領事館に出かけ旅  
券を受取る、

十二月二十日 土曜

【天気欄】

快晴

【本文欄～予記欄】

午前須田氏を訪問し同道差支を訪問同道

(考古学博物館)  
(Musée archéologique)

してMusée ArcheologiqueMusée Archeologiqueを

観る(ローマ)羅馬朝の遺品なかゝ多く  
エジプト(エジプト)の集品もさほと貧弱な  
らず、メキシコの蒐集見るべき  
もの多し

午前申再びPradoを観る

各室を通観す、  
クレコ(エル・グレコ) 249の強みは見るを重ねて

愈少しベラスケスの気品高

きもの優れて餘りあり

夜

Rubinstein<sup>250</sup>

のピアノ独奏

を聞く傑出したる

楽家なり

十二月二十一日 日曜

【寒暖欄】

快晴

【本文欄】

午前須田氏差支あれはとの事

にてPrado(プラド美術館) (最後?)の終後の通観

をなす

午後市中を散歩す、

夕方六時発の列車にて須田氏

- 249 エル・グレコ (El Greco, 1541-1614)。クレタ島出身、イタリアおよびスペインで活動した画家。
- 250 アルトゥール・ルービンシュタイン (Arthur Rubinstein, 1887-1982) か。ポーランド出身のピアニスト。

(El Escorial エル・エスコリアル)  
と Escorial に趣く八時頃

着、一泊す

十二月二十二日 月曜

【天気欄～寒暖欄】

快晴

【本文欄～予記欄】

昨夜よりの風愈々烈しく殆

と出會したる事なきほどの烈風

なり

午前、午後にてこの大建築の内部

を殆と通観す

Palais の各室は感興深き

ものあり(ゴヤ)の下面なるゴブラン

織の壁懸は見事なるものなり

Panteon 内の構造精美にして驚くべし

グレコの各作品は総て靈妙なるも

のなり、夕方汽車に投し七時(マド

リード)に着す、

夜九時発、

トレドの汽車あ

りと思ひ停

車場迄出て

たるに、日曜日

のみの列車にて

翌日を待つべく

再び投宿す、

十二月二十三日 火曜

【寒暖欄】

快晴

【予記欄】

来信、

自宅

兩三日前

より少し風邪

の気味あり

この日も少し頭

重し

【本文欄】

午前七時宿を發し午前八時過

発の列車に投しトレドに向ふ

車中二時間、十時過トレドに着

此日頃日の如く快晴鮮

光の美云はん方なし、

此辺朝霧と白霜にて車中よりの

眺めは全く煙の中を通る

心地せり

昼前昼後、案内書により参観 (エル・

グレコ美術館) の住宅後のミューセは最も感深し

外砦の周囲を觀散歩す、

十二月二十四日 水曜

【寒暖欄】

曇

【欄外左側】

発信須田氏松永

【予記欄】

昨夜よく眠

り過ぎたれば

殆と睡眠を

催せず

知人へ二十

枚<sup>?</sup>と<sup>251</sup>発信

【本文欄～欄外下側】

午後朝室内眞暗なれば点燈して  
時計を観るに十二時にて止まり居  
る様なれば今何時なるを知す、然  
し氣かゝりのまゝ窓を開く最早起き  
てもよきそふの時なり着衣してコーヒー  
を命すべく食堂に入れは一時半なり  
驚くべし余の止まり居りしを信ぜし  
時計は正午なりしなり  
霧深くして今尚一日止りて写生  
にても試むべかりしも断念して  
午後少し散歩し夕方六時発、  
<sup>(アルゴドル)</sup> Algodorにて二時間<sup>(バダホス)</sup> Badajoz 行の汽車  
を待合せて車中の客となる、

十二月二十五日 木曜

【寒暖欄】

曇

【本文欄】

<sup>(アルゴドル)</sup>

Argodor より十三時間、

午前十一時、<sup>(バダホス)</sup> Badajoz に着く

<sup>(Hôtel du Palais?)</sup> Hotel de Palais に寄る、

昼食前一通り案内記に従

ひ馳廻る、

午後絵具の用意をして砦に

そ<sup>?</sup>ふ<sup>?</sup>たる辺にて一枚スケッチを

なす、五時になりて已に暮れに

近し宿に帰る、

明日は空の晴れ輝かむ事を

切望す、

十二月二十六日 金曜

【本文欄】

<sup>(バダホス)</sup> 朝八時過 Badajoz 発車午前十

時過<sup>(メリダ)</sup> Merida 着 荷物を宿へ置

きて早速<sup>(ローマ)</sup> 羅馬朝遺跡を探る、

<sup>(Alcázar)</sup> 252 Arcázar と長橋を觀る空晴れ

やらす寒さ強し劇場の遺跡を

見る今尚発掘を終らざるものなら

む? 発掘されし石柱石像所<sup>?</sup>狭

251 以上2行を線で四角く囲っている。

252 Alcazaba (アルカサバ、要塞) の誤りか。

き迄に地上に列せあり この様はとて  
も伊太利にても見る事不能さらむ？  
幸に此地に來りたる甲斐ありたると喜ぶ  
夕方、郊外水道梁を写生す、

十二月二十七日 土曜

【本文欄】

朝郊外の水道梁を写生に出づ  
十一時発車<sup>〔セビリア〕</sup> Sevillaに向ふ  
午後八時着のもの壱時間余延着  
Hôtel Oriente<sup>253</sup>に泊す、  
夜は矢張り宿につきて昼間窓外  
の風光を眺めつゝ旅するに限  
る、なるほど時間と費用は少  
しかゝる問題である、

十二月二十八日 日曜

【欄外上側】

Sevilla

【本文欄】

例の如く案内記により終日見  
物、朝、Muséeに趣く<sup>〔ムリ〕</sup>ム  
ローの作数多あれと感ずるもの<sup>リョ〕254</sup>  
なし、Archeologiqueのコレクシヨ  
ン面白きものあれと貧弱たるを  
まぬかれ<sup>〔Alcázar〕</sup> Alcázarの建築完  
美と云ふべし 然し其庭園の

快感を感じたるは限なし

<sup>〔Hospital de la Caridad 慈善病院〕</sup> <sup>〔ムリリョ〕</sup>  
午後 Carlidad のムユローを観る  
<sup>〔トリアナ〕</sup>  
川向に渡り Triana を散歩  
す、

十二月二十九日 月曜

【欄外上側】

Sevilla

【予記欄】

絵はかき、  
二十余枚を  
発信す、

【本文欄】

午前七時半発車、<sup>〔Carmonna〕</sup> Carmonna  
に趣く九時過着（途中乗換）  
<sup>〔Necrópolis Romana〕</sup> Necropole Romaine 迄は僅か弐  
十分（土地の中流の人懇々案内して同所迄  
導かる）George Ronsor 氏（英人）  
の発掘にかゝる（案内人は Ronsor 氏は画  
家なりと云ふ）同氏は目発掘され  
たる数多の遺跡の中央に住宅兼小  
Musée を建て、数多の遺物を陳列  
されて居る見るべきもの尠からず、  
汽車遅延六時頃 Sevilla 帰着、

- 253 現存する領収書（1919年12月31日付）によれば、ホテル名は「Gran Hotel de Oriente」。
- 254 バルトロメ・エステバン・ムリリョ（Bartolomé Esteban Murillo, 1617-1682）のこと。スペインの画家。同日本文欄9行目参照。

十二月三十日 火曜

【欄外上側】

Sevilla

【本文欄】

<sup>(Alcazar)</sup>  
朝 Alcazar の庭に写生に趣く  
午後五時迄油絵スケッチと鉛  
筆のデッサンをつゝく  
Sevilla は気持のよい所なり  
然し至る所土地に慣れ宿に親  
しみかければ直に他に轉す  
る事(に)のなるのである、  
明日は引揚て南の方に趣くべ  
きか或は尚留りて何か一枚  
描て見るか、さても心急しき旅  
なり

<sup>(セラニウム)</sup>  
く園ジェラユーム咲く停車場の  
庭など南国の□美し

十二月三十一日 水曜

【本文欄】

<sup>(Málaga)</sup>  
午前十時 Sevilla 発、Malaga  
に向ふ例の如く二時間余汽車  
延着、五時半のもの八時頃着、  
Hotel <sup>(Simón)</sup> Simon に泊す  
Sevilla よりは路(?)沿道  
カンラン <sup>(サボテン)</sup> シヤボテン等赤土の畑  
を飾る事美し、<sup>(蜜)</sup>密柑レモン  
の尚色つかぬものあり 目葉の  
尚散残りたるものありバラ咲

## 人名索引

- ・本表は、児島虎次郎日記（1919年）に登場する人名と日付をまとめたものである。
- ・一部、特定個人と関わる商店名を加えている。
- ・「氏」「君」などの敬称は人物の特定に役立つ場合があるため、日記中で敬称が用いられている場合は敬称もあわせて示した。
- ・日記の前後や関係資料から得られた情報をもとに人物の特定・推定を試み、「氏名等」欄に示した。これらは、更なる精査を要する段階のものであることをご了承いただきたい。
- ・「氏名等」欄は、該当する可能性のある人物が複数考えられる場合は、特定を避けて空欄とした。ひとりの人物であるが氏名がわからないものは「不明」、空見出しの場合は「-」とした。
- ・日記に記された名前を五十音順に示し、続いて、欧米人のみ姓のアルファベット順に示した。ただし、名前の漢字の読みが誤っている可能性があることをご了承いただきたい。

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
青木君	不明（外務省関係者）	4/4	
青野			
青野君	青野俊一郎	1/16, 3/5, 3/14, 3/20, 5/4, 7/13	注8
青野兄	〃	4/30, 5/2, 5/3, 5/5, 8/1, 8/23	
青野	〃	1/5, 9/21, 10/5	
青の	〃	3/20, 3/21, 3/22, 3/26, 3/29, 4/7, 5/11, 5/22, 5/24, 6/15, 7/5, 7/11, 7/12, 7/13, 7/22, 7/23, 8/11, 8/21, 9/9, 10/12, 10/13, 10/14, 10/27, 11/4, 11/9, 11/16, 11/18, 11/19, 11/25, 11/26, 12/4, 12/8, 12/9, 12/15	
青野兄の室	青野俊一郎夫人	5/1	
青野氏	不明（静岡丸乗船者）	6/19-21	
青山			
青山君	青山熊治	7/6, 7/12, 7/19, 7/20, 7/28, 8/14, 8/18, 8/24, 8/25, 8/26, 8/27, 8/28, 8/31, 9/1, 9/2, 9/5, 9/9, 9/14, 9/15, 9/18, 9/19, 9/22, 9/27, 9/30, 10/4, 10/22, 10/26	注154
青山	〃	8/27	
赤木萬	赤木萬二郎	8/18	注190
足立		8/18, 12/4, 12/5	
阿藤君	阿藤秀一郎？	1/30	注30
跡見（君）	跡見泰？	3/20	注65
アマン＝ジャン	-	→ Aman-Jean, Edmond-François	
アマンシアン氏／アマンジャン氏／アマンシヤン／アマンシヤン氏／アマンジャン／アマンヂヤン			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
有島			
有島君・有島（君）	有島生馬	3/30	注84
有島	〃	4/4, 4/21	
石井			
石井日向	石井家（石井十次遺族）	11/9	
石井熊夫	石井熊夫	11/8	注223
石井		1/27, 2/23, 9/5, 9/6, 11/7	
伊仙	-	→伊藤	
磯谷	磯谷商店	2/18, 3/18, 3/21, 3/30, 4/3, 4/5, 4/9, 4/10	注33, 46
伊藤			
伊藤仙君	伊藤仙三郎	3/6	注57
伊仙	〃	8/18	
伊藤	〃	5/6	
伊藤夫婦	伊藤仙三郎夫妻	5/5	
伊藤（氏）		5/11	
伊藤		5/10	
井上			
井上額縁店？の主人	不明	4/14	
井上		4/28, 4/29	
今関			
今関氏	今関天彭？	3/25	注77
今関	〃	8/18	
岩村			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
岩村氏	岩村悦郎	2/17	注45
岩村	〃	2/25	
岩村愛子	岩村愛子	2/24	
岩村悦郎夫人	〃	2/19	
岩村		8/6	
上田			
上田尚	不明	4/23	
上田	不明	1/27, 5/9, 5/24, 10/12, 10/13, 12/7, 12/8	
エル・グレコ	-	→ El Greco	
クレコ/グレコ			
遠藤	不明	4/28	
王統一氏	王統一	5/11	
欧文堂	-	→林欧文堂	
太田			
太田君	太田喜二郎	3/15	注48
太田	〃	2/22, 2/25, 4/23, 5/6, 8/14, 8/21, 9/26, 11/13, 12/7, 12/8	
大庭			
大庭氏	大庭猛	4/8	注93
大庭夫人	大庭猛夫人	4/8	
大原			
大原氏	大原孫三郎	1/16, 1/26, 2/22, 3/17, 4/23, 5/4	注17
大原	〃	1/17, 5/10, 5/11, 5/22, 5/24, 6/15, 7/21, 8/11, 8/29, 9/26, 10/23, 11/4, 12/9	
大原	大原家(大原孫三郎)	3/5, 3/7	
大原(宅)	〃	3/12	
大原氏先代	大原孝四郎	4/20	
大原夫人	大原壽恵子	3/26	注78
岡崎			
岡崎君	不明	4/6	
岡崎	不明	8/21, 9/26, 9/27, 9/29, 11/8, 11/9, 11/29, 12/2, 12/4, 12/5, 12/10, 12/12	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
小笠原			
小笠原子爵	小笠原長丕	6/19-21	注127
小笠原	〃	5/22, 6/28, 6/29, 10/2, 10/3, 11/20, 11/21, 12/4	
岡田			
岡田先生	岡田三郎助	3/17	注43
岡田(先生)	〃	2/17	
岡田君	岡田毅	9/13, 9/15, 9/18, 10/17, 11/23	注185
岡田氏	〃	8/12, 8/15, 8/23, 9/8, 9/13	
岡野(氏)	岡野栄?	3/23	注72
岡本	不明	8/21, 10/2, 10/11, 10/24, 10/25	
奥原	不明	2/22, 2/25	
乙骨	乙骨安昌?	5/6	注115
小野			
小野氏	小野輝男	10/13	注213
小野	〃	10/13	
小野		4/1, 10/22, 10/29	
小野田	小野田鉄弥?	5/6	注117
柿原			
柿原得君	柿原得一	2/24	注39
柿原得	〃	2/16	
柿原君	〃	2/16, 10/25	
柿原政君	柿原政一郎	2/24	注42
柿原政	〃	2/17	
柿原氏	柿原得二または政一郎	3/14	注39, 42
柿原	〃	2/23, 8/29, 10/5, 10/25, 11/4, 11/7, 11/15, 11/16	
笈博士	笈繁	5/1	注113
片岡	不明	4/1	
加藤			
加藤虎之助氏	加藤虎之助	6/19-21	注128
加藤君	〃	8/10, 8/16, 8/20, 8/23, 9/10, 11/24	
加藤	〃	5/22, 9/11	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
加藤	加藤虎之助?	7/19, 7/20, 8/1, 8/9, 8/10, 8/16, 8/20, 8/21, 10/3, 10/9, 10/19, 10/22, 10/23, 11/20, 11/21	
加藤	不明	1/18	
金沢			
金沢氏	金沢巖	2/16, 3/20, 4/7, 4/17	注36
金沢	〃	2/14, 2/15, 4/1, 9/29, 10/5	
金山			
金山君	金山平三	1/24, 7/10, 7/21, 11/14, 11/15, 11/20	注26
金山 (氏)	〃	3/27	
金山	〃	5/5, 5/6, 7/21, 8/18, 11/13, 11/15, 11/16	
カロリユス・デュラン	—	→ Carolus-Duran	
カルルスデュラン			
川合玉堂			
川合玉堂氏	川合玉堂	2/16	注41
玉堂	〃	2/24	
川口儀平氏	川口儀平	8/24	
河原			
河原賀市君	河原賀市	6/25	注50
河原氏	〃	3/15	
河原	〃	2/23	
関雪	—	→橋本関雪	
木村			
木村氏	木村半蔵	6/29, 7/1, 7/25, 8/28, 8/29, 9/20	注144
木村	〃	6/28, 6/29, 8/1, 8/27, 8/28, 9/6, 10/13	
ギュスターヴ・モロー	—	→ Moreau, Gustave	
ギュスターブモロー/ギュスターブモロ			
松旭齋天勝?			
天勝	松旭齋天勝?	1/7	注12
玉堂	—	→川合玉堂	
矩一	—	→児島矩一	
クールベ	—	→ Courbet, Gustave	
楠木正行			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
正行	楠木正行	2/20	
久保氏	不明	9/19, 9/20	
久保田	不明	10/6, 10/16, 10/17	
栗川	不明	8/21	
黒板博士	黒板勝美	9/5	注197
黒田			
黒田先生	黒田清輝	1/16, 2/15, 3/23, 3/25, 4/6, 8/8, 11/18, 11/21	注18
黒田 (先生)	〃	2/17	
黒田	〃	4/21	
城一郎	—	→児島城一郎	
ゴーギャン	—	→ Gauguin, Paul	
ゴガン			
小柴君	小柴錦侍?	10/2	注208
ゴップ氏	—	→ Le Goff	
児島			
矩一	児島矩一	1/18, 3/18, 3/29, 4/1, 5/11, 5/22, 7/23, 7/24, 8/7, 8/23, 9/21, 10/5, 11/3, 11/5, 11/9, 11/22, 11/23, 11/25, 11/26, 11/29, 12/2	注19
城一郎	児島城一郎	5/19	注124
妻	児島友	3/26, 7/11, 7/13, 8/30, 9/29, 10/12, 10/13, 10/14, 10/27, 11/7, 11/8, 11/13, 11/15, 11/16, 11/25, 11/26, 12/4, 12/5, 12/6, 12/8	注79
直平	児島直平	11/13	注229
成羽	児島家 (児島徳太郎)	9/26, 12/2	
小林			
小林寿	小林寿美太	8/18	注10
小林君	〃	1/7, 1/23, 2/11, 2/13, 2/21, 3/14, 3/15, 4/9, 4/21, 4/23, 5/5, 5/6	
小林 (君)	〃	4/22	
小林兄	〃	5/2	
小林	〃	1/5, 1/6, 3/21, 3/22, 3/25, 3/26, 3/29, 4/14, 4/15, 4/17, 5/6, 5/7, 7/5, 10/12, 10/13, 11/25, 11/26	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
小林		8/18, 10/2, 10/3, 10/12, 11/4, 11/9	
小林氏	小林寿美太または 寿美太の義父?	4/9	
小林萬吾氏	小林萬吾	3/24	注75
小村	不明	11/7	
ゴヤ	-	→Goya, Francisco de	
ゴヤ/コヤ			
小山健三(氏)	小山健三	4/16	注102
コラン			
コラン先生	-	→Collin, Raphaël	
コラン先生の妹さん	-	→Collin, Blanche	
斉藤			
斉藤豊	斉藤豊作	4/21	注37
斉藤君	〃	2/15	
斉藤	〃	4/4, 7/13, 9/27	
斉藤溪舟	斉藤徳太郎(溪舟)	3/21	注35
斉藤氏	〃	3/14, 3/22, 4/9	
斉藤	〃	2/12, 4/21	
斉藤	斉藤豊作または 斉藤徳太郎	1/18, 3/20, 3/29	注35, 37
坂田			
坂田(氏)	坂田一男?	3/27	注81
坂田	〃	4/1	
笹川	不明	8/18, 11/6, 11/9	
皿井			
皿井氏	皿井立三郎	1/23	注24
皿井	〃	3/15	
重成	不明	11/25, 11/26	
滋野			
滋野男爵	滋野清武	8/8	注184
滋野氏	〃	8/16	
ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ		→Puvis de Chavannes, Pierre	
シャバンヌ			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
庄	不明	4/28	
甚三郎	不明	5/10	
須田氏	須田国太郎	12/18, 12/19, 12/20, 12/21, 12/24	注245
須藤			
須藤氏	須藤祐七(または五百 三、新六)	5/10	注34, 121
須藤(氏)	〃	5/11	
須藤君	須藤祐七または新六	5/10	
須藤	須藤新六または祐七	2/11, 4/15, 5/6, 8/21	
須藤兄弟	須藤祐七、新六、また は五百三	5/10	
砂田			
砂田君	砂田正二?	3/27	注80
砂田	〃	3/29	
炭谷	炭谷小梅?	5/6, 7/27	注116
諏訪	諏訪秀三郎	7/1	注148
関	不明	2/23, 5/24, 8/21	
関野博士	関野貞	10/12, 11/6, 11/9	注212
セザンヌ	-	→Cézanne, Paul	
セサンヌ			
妹尾	不明	5/6, 5/10, 5/11, 5/24	
武内			
武内君	武内潔眞	1/2	注6
武内	〃	7/23, 8/29, 12/4, 12/5	
田中			
田中印刷所	田中印刷所	3/16, 3/20	
田中	〃	3/21	
田中の主人	田中印刷所の主人	3/19	
田中氏	不明(『黄薇之友』関係 者)	3/26	
田辺至氏	田辺至	3/23	注73
佃			
佃	佃武昭または佃政道	3/29, 4/1	注82
佃兄弟	佃武昭、政道	3/28	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
辻氏	辻永?	3/22	注71
都志			
都志氏	都志太郎	4/27	注110
都志	〃	7/23	
筒井			
筒井氏	不明	4/4	
筒井	不明	4/5	
妻	—	→児島友	
デュトウ	—	→Duthu, Jean Baptiste Laurent	
デュス先生			
天勝	—	→松旭齋天勝?	
天主教の先生		→Duthu, Jean Baptiste Laurent	
ドガ		→Degas, Edgar	
都鳥			
都鳥氏	都鳥英喜	9/24, 10/2, 10/29, 11/2, 11/7, 11/11, 11/30	注157
都鳥 (氏)	〃	7/12, 7/20, 7/23	
都鳥	〃	9/6, 10/22, 11/2, 11/4, 11/7, 11/9, 12/10	
富永			
富永君	富永勝重?	4/7	注67
富永 (氏)	〃	3/27	
富永	〃	3/21, 4/4, 5/24	
内藤博士	内藤湖南	4/16	注101
直平	—	→児島直平	
中尾			
中尾氏	中尾優	8/1, 8/6, 8/7	注147
中尾 (氏)	〃	8/8	
中尾	〃	6/29, 7/9, 7/26, 8/19, 8/22, 10/12, 11/3, 11/8, 11/10, 12/3	
長尾			
長尾建吉	長尾建吉	10/1	注33
長尾氏	長尾建吉 (または一平)	4/12, 4/13, 4/14, 4/17, 4/18	
長尾 (氏)	〃	4/18	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
長尾	〃	2/10, 2/25	
中川			
中川君	中川紀元?	10/17, 11/2	注203
中川氏	〃	9/18	
中沢			
中沢彦吉氏	中沢彦吉	8/24	注193
中沢氏	〃	8/25, 8/26, 8/27, 9/25, 9/26, 9/28, 9/29, 9/30, 10/2	
中沢	〃	9/24, 10/7, 10/14, 10/15	
中村			
中村先生	中村勝治郎	2/17	注44
中村	不明	4/29	
中原氏	中原實	11/7	注222
中山			
中山巍	中山巍	11/24	注27
中山君	〃	1/25	
中山	〃	4/1	
成羽	—	→児島家 (児島徳太郎)	
西村			
西村氏	西村磯右エ門	6/19-21, 6/25, 8/2	注139
西村 (氏)	〃	7/9, 8/1	
西村	〃	6/29, 7/7, 8/8, 8/12, 8/19, 12/3, 12/4	
橋本			
関雪	橋本関雪	2/24	注52
橋本	不明 (三越関係者)	4/10	
橋本	不明	11/16	
長谷川			
長谷川君	長谷川潔	8/14, 8/18, 9/7	注188
長谷川	〃	9/18, 9/19, 10/15, 10/20	
林			
林源	林源十郎 (甫三)	5/22	注3
林氏	〃	1/1	
林氏 (の) 母堂	林清	1/1, 1/4, 1/16	注4

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
林夫人	林浦	1/1	注5
林杉造	林杉造	3/9	注58
林杉	〃	4/21, 5/24	
林欧文堂	林欧文堂	4/9	注58, 95
林君		2/12, 3/14, 4/13, 4/15	
林		4/15, 5/6, 11/7, 11/8	
林弟		4/15	
正行	—	→楠木正行	
原			
原氏	原富太郎 (三溪)	4/8	
原君	原勝四郎	9/15, 9/21, 9/22	注202
原	原澄治	3/22	注69
原	原勝四郎または原澄治	7/28, 8/18, 9/2, 9/5, 9/7, 11/11, 11/28, 11/29	注69, 202
原九郎?	原九郎?	8/9	
原田			
原田善吉氏	原田善吉	2/24, 2/28	
原田氏	〃	2/23	
原田	原田善吉?	7/23	
原田瓊生氏	原田瓊生	5/11	注122
原田氏	〃	5/11	
バルトソン	—	→Baertsoen, Albert	
バルツン先生			
バルトロメ	—	→Bartholomé, Paul-Albert	
バルトロメ氏			
疋田	疋田直太郎または疋田家	2/23, 5/7, 8/18, 8/30, 8/31	注49
平井君	不明 (光風会関係者)	3/20	
平塚			
平塚氏	平塚英吉	5/31	注131
平塚農学博士	〃	6/19-21	
平塚		8/10, 8/21, 10/11	
廣瀬			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
廣瀬氏	広瀬勝平	7/12, 7/20, 7/23, 8/30, 9/15	注158
廣瀬	〃	7/24, 8/22, 10/12, 11/9	
廣瀬 (仏文) 氏	広瀬哲士	9/15	注201
藤	藤彦衛?	4/1	注88
藤島			
藤島先生	藤島武二	2/15, 2/17, 2/19, 3/17, 3/24, 3/28, 3/29, 3/30, 4/4, 4/7, 8/16, 8/20, 9/4, 12/8, 12/10	注38
藤島 (先生)	〃	2/17	
藤島	〃	8/21, 9/5, 12/4, 12/12	
二村光三氏	二村光三	6/19-21	
佛先生	—	→Duthu, Jean Baptiste Laurent ?	
ブラングイン	—	→Brangwyn, Frank	
ベラスケス	—	→Velázquez, Diego	
正木			
正木校長	正木直彦	3/18, 4/6	注60
正木	〃	4/21	
正行	—	→楠木正行	
マダムルロア	—	→Leroy (Madame Arthur Leroy de Borgard)	
松尾			
松尾氏	松尾哲太郎?	3/5	注56
松尾		11/4, 12/4, 12/5	
松方			
松方幸太郎	松方幸次郎?	4/16	注103
松方氏	〃	4/16	
松永			
松永君	松永津志馬	9/27, 11/26, 12/1, 12/7	注205
松永氏	〃	10/26, 10/27, 11/3, 11/6, 11/8, 11/17, 12/2, 12/6	
松永	〃	12/24	
松原			
松原氏	不明 (美術旬報関係者)	3/22	
松原氏	松原三五郎	4/9	注96

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
松原□	〃	4/15	
松原	松原三五郎?	4/21	
三木令嬢		3/4	
ミケランジェロ	-	→Buonarroti, Michelangelo	
満谷			
満谷氏	満谷国四郎	2/16, 2/18, 3/6, 3/8, 3/9, 3/10, 3/11, 3/12, 10/11, 11/21	注40
満谷(氏)	〃	3/5	
満谷	〃	8/21, 10/17	
三橋			
三橋兄	三橋玉見	5/1, 5/3	注2
三橋氏	〃	1/1, 1/27, 3/6	
三橋	〃	1/17, 7/23, 8/29, 11/16, 12/4	
三原			
三原(氏)	不明	4/18	
三原	不明	4/14, 4/15, 8/16, 11/15, 11/16	
三宅			
三宅克	三宅克己	11/9	注70
三宅(氏)	〃	3/22	
三宅専	不明	7/23, 11/4	注171
三宅		8/16, 10/14, 10/15	
村田			
村田君	不明 (中国民報関係者?)	3/20	
村田氏	〃	3/16, 3/22, 3/23, 3/24, 3/25, 3/26, 3/28, 4/4, 4/5, 4/6	
村田	〃	2/23, 4/1	
ムリリョ	-	→Murillo, Bartolomé Esteban	
ムユロー			
桃田氏	不明	1/27	
モロー	-	→Moreau, Gustave	
モロ			
屋代(矢代?)	矢代幸雄?	4/4, 4/21	注90
柳井			

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
柳井君	柳井新太郎	1/5, 1/6, 1/7, 1/8, 4/12, 4/13, 4/29, 5/5, 5/6	注9
柳井(君)	〃	5/5	
柳井氏	〃	4/18	
柳井	〃	1/18, 1/28, 2/25, 4/15, 4/17, 4/28, 4/29, 5/6, 5/7, 5/11, 6/15, 7/13, 8/6, 8/30, 8/31, 9/26, 9/27, 10/12, 10/13, 11/26, 12/2	
山内			
山内愚僊	山内愚僊	1/23	注25
山内	〃	4/21	
山口			
山口嬢	不明	7/29, 8/9	
山口女史	〃	7/26, 8/7	
山口氏	不明	9/27	
山口(氏)	〃	10/26	
山口	不明	7/28	
山下			
山下君	山下新太郎	3/30	注85
山下	〃	4/4, 4/21	
山田			
山田国民記者	山田毅一	6/19-21	注126
山田氏	〃	5/21, 6/19-21, 7/25, 7/26	
山田(氏)	〃	7/9	
山田	〃	6/28, 6/29, 7/7, 8/1, 8/20	
山田	山田毅一?	7/22	
山田芳	山田芳三郎(高田商会)	7/5, 9/15, 9/27	注151
山田氏	〃	9/19, 9/23, 9/24, 9/26, 9/27	
山田(氏)	〃	9/20	
山田		9/25, 10/16, 10/17, 11/1, 11/4, 11/9	
山谷氏	不明	3/28	
山本			
山本(君)	山本森之助	3/20	注64
山本氏	〃	3/27	

日記に記された名	氏名等	日記の日付	参照先
山本君	山本森之助?	3/17	
山本氏		10/6, 10/7, 10/8	
山本		10/6	
山本□		4/23	
結城氏	不明	3/17	
ユゴー	-	→Hugo, Victor	
ユーゴー			
柚木			
柚木君	柚木久太	5/5	注83
柚木	"	3/29, 5/6	
横見	不明	4/15	
吉江孤厂氏	吉江孤雁	11/23	注240
吉田			
吉田君	吉田苞	1/3, 1/5, 1/6, 1/26, 2/22, 3/2, 3/3, 3/7, 3/17, 3/18, 3/19, 3/24, 3/29, 4/15, 4/24, 5/4, 10/22, 11/17	注7
吉田 (君)	"	4/21	
吉田	"	4/21, 5/22, 8/19, 10/12, 10/13, 11/16, 11/17, 12/4, 12/5	
吉田君夫妻	吉田苞夫妻	3/4	
ルーベンス	-	→Rubens, Peter Paul	
ルソー	-	→Rousseau, Jean-Jacques	
ルソー/サンジャクロー			
ルノワール	-	→Renoir, Pierre-Auguste	
ルノアール/ルノアール氏/ルノアール先生			
ルロア君	-	→Leroy ?	
ロダン	-	→Rodin, Auguste	
ロダン/ロタン			

氏名等	日記に記された名等	日記の日付	参照先
Aman-Jean, Edmond-François (エドモン=フランソワ・アマン=ジャン)			注14
Aman-Jean		1/12, 11/21	
Aman Jean		11/17	
アマンシアン氏		9/3, 9/4	
アマンジャン氏		10/15	
アマンジャン		9/16	
アマンシヤン氏		9/16, 11/21, 11/24, 12/8	
アマンシヤン		10/14, 12/9	
アマンヂヤン		7/24	
André, Albert (アルベール・アンドレ)			注237
Albert André氏		11/20	
Bartholomé, Paul-Albert (ポール・アルベール・バルトロメ)			注16
Barthoromé		1/12	
バルトロメ氏		7/15	
バルトメ氏		7/20	
Baertsoen, Albert (アルベール・バールトソン)			注242
Beartsme氏		12/4	
バルツン先生		12/4	
Brangwyn, Frank (フランク・ブラングイン)			注146
ブラングイン		6/28	
Buonarroti, Michelangelo (ミケランジェロ・ブオナローティ)			注183
ミケランシロ		8/6	
Carolus-Duran (カロリユス=デュラン)			注160
カル・スデュラン		7/13	
Cézanne, Paul (ポール・セザンヌ)			注191
セザンヌ		8/19, 10/22	
Claus, Emile (エミール・クラウス)			注20
Claus		1/18, 11/15	
Collin, Blanche (ブランシュ・コラン)			注177
コラン先生の妹さん		8/1	
Collin, Raphaël (ラファエル・コラン)			注176
コラン先生		8/1	
Comllard ?			注235
Comllar		11/17, 11/20	

氏名等	日記に記された名等	日記の日付	参照先
Courbet, Gustave (ギュスターヴ・クールベ)			注167
	Courbet	11/14	
	クールベ	7/21, 8/6	
Degas, Edgar (エドガー・ドガ)			注150
	ドガ	7/4	
Duthu, Jean Baptiste Laurent (ジャン・バティスト・ローラン・デュトゥ)			注13
	Duthu	10/2, 11/4	
	Duthe	9/29	
	デュス先生	5/4	
	天主教の先生	1/10	
	佛先生	2/28	
El Greco (エル・グレコ)			注249
	グレコ	12/22	
	クレコ	12/20, 12/23	
Gauguin, Paul (ポール・ゴーギャン)			注214
	ゴガン	10/16	
Goya, Francisco de (フランシスコ・デ・ゴヤ)			注247
	ゴヤ	12/18, 12/19	
	コヤ	12/22	
Hugo, Victor (ヴィクトル・ユゴー)			注163
	ユーゴー	7/19	
Janssen ?			
	Janssen ?	7/28	
Le Goff (ル・ゴフ)			
	Dr Le Goff	8/20	
	Goff氏	8/23	
	Goff	8/22, 9/30, 10/1	
	ゴッフ氏	8/20	
Leroy (Madame Arthur Leroy de Borgard) (ルロア夫人)			注175
	マダムルロア	7/30	
Leroy ?			
	ルロア君	8/10	
Moreau, Gustave (ギュスターヴ・モロー)			注155

氏名等	日記に記された名等	日記の日付	参照先
	ギュスターブモロー	7/11	
	ギュスターブモロ	8/22	
	モロ	8/22	
Morisot, Berthe (ベルト・モリゾ)			注232
	Morisot	11/14	
Murillo, Bartolomé Esteban (バルトロメ・エステバン・ムリリョ)			注254
	ムユロー	12/28	
Puvis de Chavannes, Pierre (ピエール・ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ)			注210
	シャバンヌ	10/4	
Renoir, Pierre-Auguste (ピエール＝オーギュスト・ルノワール)			注187
	Renoir	9/7, 9/21	
	ルノアール氏	8/25, 9/19, 9/21	
	ルノアール先生	8/14	
	ルノアール	8/14, 8/16, 8/18, 8/25, 9/15, 9/30, 12/4	
Rivière, Georges (ジョルジュ・リヴィエール) ?			注200
	Riviér氏	9/19	
	Mr Rivier氏	9/15	
Rodin, Auguste (オーギュスト・ロダン)			注180
	Rodan	11/19	
	ロダン	8/4, 8/6	
	ロタン	8/4, 8/6	
Ronsor, George ?			
	George Ronsor氏 (英人)	12/29	
	Ronsor氏	12/29	
Rousseau, Jean-Jacques (ジャン＝ジャック・ルソー)			注179
	ルソー	8/3, 8/20	
	サンジャクルロー	8/3	
Rubens, Peter Paul (ピーテル・パウル・ルーベンス)			注248
	ルーベンス	12/18	
Rubinstein, Arthur (アルトゥール・ルービンシュタイン) ?			注250
	Rubinstein	12/20	
Velázquez, Diego (ディエゴ・ベラスケス)			注246
	ベラスケス	12/18, 12/20	